

第一調

「スポタ」の小晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に四句を立てて、八調經の主日の讚頌三章を歌ふ、其第一は二次、第一調。克肖なる吾が神父ダマスキのイオアンの作。

句、我が^{オクトイボ}靈主^{ステイヒラ}を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
聖なる主よ、我が晩の^{はなはだ}禱を納れて、我等に罪の赦を與へ給へ、爾は獨世界に復活を顯しし者なればなり。

人人よ、シオンを廻り、之を圍みて、是の中に死より復活せし主に光榮を歸せよ、彼は我等を不法より救ひし吾が神なればなり。

人人よ、來れ、歌ひてハリストスを拜み、其死より復活せしを讚榮せん。彼は敵の誘惑より世界を救ひし吾が神なればなり。

光榮、今も、生神女讚詞。定理歌。

第一調 「スポタ」の小晩課 一

第一調 「スポタ」の小晩課 二

兄弟よ、今日は童貞の慶賀なり。造物は喜ぶべし、人類は楽しむべし、蓋聖なる生神女、童貞の無垢なる寶は我等を呼び集めたり。彼は第二のアダムの靈智なる樂園、二性の結合の寶藏、救を爲す和睦の成就、言が實に人體に配偶せし宮、ヘルワイムの上^{ドグマテイク}に在る者を身と共に乗せし輕き雲なり。ハリストス神よ、彼の祈禱に因りて我等の靈を救ひ給へ。

次ぎて「隱なる光」。^{ボロキメン}提綱、「主は王たり」、其句と共に。「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」の後に司祭聯禱を誦せず、我等直に主日の挿句の讚頌を歌ふ、左の如し。

ハリストスよ、爾の苦にて我等は苦を免れ、爾の復活にて我等は淪滅より救はれたり。主よ、光榮は爾に歸す。

至聖なる生神女の他の讚頌

句、我爾の名を萬世に誌さしめん。

童貞女・母・生神女マリヤ、世界の轉達よ、爾は萬世に讚榮せらる。少女よ、爾は實に父と同無原なる子、聖神と同永在なる主を身にて生み給へり。彼に我等の救はれんことを禱り給へ。

句、女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ。

潔き童貞女よ、我等不慮の菑害に圍まるる者は、獨爾を轉達者と有ちて感謝の心を懷きて呼ぶ、至聖なる神の聘女よ、我等を救ひ給へ、爾は世界の避所、我が族の防護なればなり。

句、民中の富める者は爾の顔を拜まん。

神の母よ、爾の産に因りて世界は新にせられたり。至淨なる少女、信者の救、敬虔に爾に禱る者の眠らざる轉達者よ、爾を歌ふ衆人の爲に息めずして切に禱り給へ。

光榮、今も、^{ドグマティック}定理歌、同調。

童貞女よ、預言者は爾を永在なる光の雲と名づけたり。蓋雨が羊の毛に降りし如く、
爾より父の言は降り給へり、爾より輝きしハリストス我が神は世界を照し、迷惑を
亘し給へり。至聖なる者よ、祈る、爾を眞の生神女と承け認むる我等の爲に息めず
して切に彼に禱り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に主日の讚詞。
光榮、今も、其生神女讚詞。小連禱。發放詞。



第一調 「スポタ」の小晩課 三
第一調 「スポタ」の大晩課 四

「スポタ」の大晩課

首誦聖詠の後に常例の聖詠經の誦文。

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて、八調經の主日の讚頌三章、アナトリーの四章、
月課經の三章或は六章を歌ふ。若し聖人の祭日ならば、光榮、月課經の、今も、本調
の第一の生神女讚詞。

八調經の主日の讚頌、第一調。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。
聖なる主よ、我が晩の禱を納れて、我等に罪の赦を與へ給へ、爾は獨世界に復活を顯
しし者なればなり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん
人人よ、シオンを廻り、之を圍みて、是の中より復活せし主に光榮を歸せよ、彼は我等
を不法より救ひし吾が神なればなり。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
人人よ、來れ、歌ひてハリストスを拜み、其死より復活せしを讚榮せん、彼は敵の誘惑
より世界を救ひし吾が神なればなり。

又讚頌、總主教アナトリーの作、第一調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。
諸天は樂しめ、地の基は角を吹け、諸山は歡びて呼べ、蓋視よ、エムマヌイルは我等
の罪を十字架に釘せり、生を賜ひ、アダムを復活せしめし者は死を殺せり、人を愛
する主なればなり。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人
の爾の前に敬まん爲なり。

甘じて我等の爲に身にて十字架に釘せられ、苦を受け、葬られ、死より復活せし主
を歌ひて曰はん、ハリストスよ、正教を以て爾の教會を堅め、我等の生命を平安な

らしめ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、我主を望み、我が靈主を望み我彼の言を恃む。

ハリストス我が神よ、我等不當なる者は生命を籠むる爾の墓の前に立ちて、爾の言ひ難き慈憐に讚榮を奉る。蓋爾は罪なき者よ、世界に復活を賜わん爲に、十字架と死とを受け給へり、人を愛する主なればなり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

父と同無原同永在なる言、言ひ難く童貞女の胎より出でて、我等の爲に甘じて十字架と死とを受け、光榮の中に復活せし者を歌ひて曰はん、生命を賜ふ主、我が靈の

第一調 「スポタ」の大晩課 五

第一調 「スポタ」の大晩課 六

救者よ、光榮は爾に歸す。他の讚頌、至聖なる生神女に捧ぐ、アモレイのパワエルの作、月課經の讚頌の無き所、或は「リティヤ」に歌ふ所の者。

讚頌、第一調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

聖なる衆軍より聖にして一切の造物より尊き生神女、世界の女宰、救世主を生みし者よ、爾の祈祷を以て我等を諸の罪と疾病と災禍より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

慈憐の門なる少女よ、切に爾に祈る、我が卑微なる靈を棄つるなく、速に憐を垂れて、之を我が諸罪の淵より救ひ給へ。潔き童貞女よ、爾の恩寵を新にして、我の上に輝かし給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

女宰よ、爾は神を人々に合せ給へり、爾は獨死に屬する性を神聖なる不朽に升せたり。爾は地上の者に救を流し給へり。爾、生神女よ、我等を諸の苦難より脱れしめ給へ。

光榮、月課經の。今も、生神女讚詞。

人より生れて主宰を生みし全世界の光榮と天の門なる童貞女マリヤ、諸天使の歌、諸信者の飾なる者を讚め歌ふべし。彼は天と均しく、神の宮と均しき者として顯れたり、彼は仇の隔を破りて和睦を結び、國を開けり。我等は彼を信の固と爲し、彼より生れし主を扨ぎ衛る者と爲す。勇めよ、神の民よ、勇めよ、主は敵に勝たん、全能者なればなり。

聖人。「穩なる光」。本日の提綱を歌ふ、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。句、主は能力を衣、又之を帯にせり、句、故に世界は堅固にして動かざらん。句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

次ぎて常例の聯禱。「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。「我等主の前に吾が晩

の^{ステヒラ}禱」。高聲の後本堂の讚頌を歌ひて、前院に出で、^{リテイヤ}熱衷公禱を行ふ。此の中にアモレイのパワェルの讚頌、或は聖務長の示す所を歌ふ。常例の祝文の後堂に入る、其時左の讚頌を歌ふ。第一調。

ハリストスよ、爾の苦にて我等は苦を免れ、爾の復活にて我等は淪滅より救はれたり。主よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌

第一調 「スポタ」の大晩課 七

第一調 「スポタ」の大晩課 八

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

造物は喜ぶべし、諸天は樂しむべし、諸民は樂しみて手を拍つべし。蓋吾が救世主ハリストスは我等の罪を十字架に釘し、死を殺して、我等に生を賜ひ、萬族の原祖たる陥りシアダムを復活せしめ給へり、人を愛する主なればなり、

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

悟り難き主よ、爾は天地の王にして、仁愛に因りて甘じて十字架に釘せられたり。地獄は下に爾を迎へて哀しみ、義人等の靈は爾を接けて喜び、アダムは爾造成主を最下なる處に見て復活せり。嗚呼奇蹟や、萬有の生命は如何ぞ死を嘗めたる、是れ世界を照さんと欲せし故なり。此に由りて世界は呼びて云ふ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

攜香女は香料を攜へ、急ぎ且哭きて爾の墓に至りしに、爾の至浄なる體を得ずして、天使に因りて新しき至榮なる奇蹟を知りて、使徒等に謂へり、世界に大なる憐を賜ふ主は復活し給へり。

光榮、若し之あらば、月課經の。若しなくば、光榮、今も、

生神女讚詞

視よ、イサイヤの預言應ひて、童貞女は子を生めり、生みし後も生む前の如く童貞女なり、生れし者は神なるに因る、故に天性は改め易へられたり。嗚呼神の母よ、爾の諸僕が爾の堂に獻ぐる祈禱を棄つる勿れ惠深き主を爾の手に抱きし者として、爾の諸僕を憐みて、我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讚詞、第一調。

救世主よ、イウデヤの人墓を封じて、兵卒爾の潔き軀を守る時、爾は三日目に復活して、世界に生命を賜へり。故に天軍は爾生命を施す主に呼べり、ハリストスよ、光榮は爾の復活に歸し、光榮は爾の國に歸す、獨人を慈む主よ、光榮は爾の慮に歸す。

生神女讚詞

童貞女よ、ガウリイルが爾に慶べよと告げし時、其聲に従ひて萬有の主は爾聖なる約櫃に身を取り給へり、義なるダウイドの言ひしが如し。爾の造成主を妊みて、爾は天より廣き者と現れたり。光榮は爾に入りし者に歸し、光榮は爾より出でし者に歸し、光榮は爾の産にて我等を釋き給ひし者に歸す。

其他の次第。「主は神なり」にも同讚詞。

~~~~~

第一調 「スポタ」の大晩課 九

第一調 「スポタ」の晩堂課 一〇

### 「スポタ」の晩堂課

司祭誦す、「我等の神は恒に崇め讃めらる」。誦經者、我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。「天の王」。聖三祝文。「天に在す」の後に、主憐めよ、十二次。光榮、今も、「來れ、我等の王」、三次。第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。第六十九聖詠、「神よ、速に我を救へ」。第百四十二聖詠、「主よ、我が禱を聆き」。其後、「至高きには光榮神に歸し」。「主よ、爾は世世に我等の避所」。「主よ、我等を守り、罪なくして此の夜」。次ぎて、「我信ず一の神」。

其後至聖なる生神女の規程を歌ふ。第一調。

### 第一歌頌

イルモス、イズライリは苦しき奴隷より脱れて、渉られぬ處を陸の如くに過れり、敵の溺るるて見て、恩主たる神、高き臂を以て奇蹟を行ふ者に歌を奉る、彼光榮を顯したればなり。

附唱、至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ。

萬有の女王よ、天使の首品は驚き懼れて爾を讃め揚げ、凡の智慧は爾を仁慈なる造物主の母として歌ふ、爾はハリストスを生みて、一切の讚美の量に超えたればなり。

我不當の者は甚しき攻撃に苦しめられ、諸敵に悩まされて、涙と共に呼ぶ、慈憐に富める者よ、上より爾の手を我に伸べて、我を援け、爾の祈禱を以て無難に生を度らしめ給へ。

### 光榮

生神女よ、慈憐の治療を以て我が靈の隱なる罪過を醫し、肉體の進撃を鎮め、諸敵の戈と矢とを返して、強く彼等の心に刺し給へ。

### 今も

童貞女の胎はハリストスを生みて、古の兇殺の草場を絶せり。故に、至淨なる者よ、今造物皆生かさされしに因りて喜びて、同心に爾の子及び神を讃め歌ふ。

### 第三歌頌

イルモス、死すべき者は己の智慧と富とを以て誇るべからず、主を信ずる信を以て誇

りて、正しくハリストス神に呼びて、常に歌ふべし、主宰よ、爾の誠の石に我を固め給へ。

童貞女よ、大なるイアユフは昔途に眠りて梯に縁りて上より地に諸天使の降るを見て驚き、寤め興きて、明に爾を天の門として預見せり。

我不當なる者は迷ひて諸難に遇ひ、艱難の暴風に悩まされて呼ぶ、哀しい哉我や、神を生みて、我等の角を高くせし者よ、爾の祈祷を以て我を救ひ給へ。

第一調「スポタ」の晩堂課 一一

第一調「スポタ」の晩堂課 一二

### 光榮

嗚呼萬有の王、吾がハリストス イイススよ、天より強き手を伸べて、有形無形の敵の首を爾の母を正しく生神女と傳ふる者の足下に置き給へ。

### 今も

慈憐に富める童貞女よ、イサイヤは昔神の蕪炭に潔められて、明に爾の胎より子の生れんことを呼べり。爾は末の時に於て我が爲に夫なくして之を生み給へり。

### 第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、昔アウワクムは爾の奇妙なる風聲を聞きて、懼れて呼べり、神は南より來り、聖なる者は樹蔭繁き山より來りて、其膏つけられし者を救はん。主よ、光榮は爾の力に歸す。

神の母よ、睿智なる王は爾女の中に美しくして最尊き者が野より出づる如く出でて、子ハリストスを手に抱くを預象して、呼べり、主よ、光榮は爾の力に歸す。

慈愛なる者よ、我に爾の耳を傾け、私の憂患と苗害の多きとを見よ。女宰よ、我今爾に靈の目を注ぎて、涙と共に膝を屈めて、祈りて呼ぶ、我を擾す侵害を鎮め給へ。

### 光榮

嗚呼慈憐に富める者よ、我爾の僕は爾を壞られぬ垣と識りて、今祈りて、爾に趨り付き、敵の矢を幼児の玩具の如く無効の者と爲す。故に歡びて呼ぶ、神の母よ、光榮は爾の産に歸す。

### 今も

童貞女よ、聖神の臨むに因りて至上者の能は爾を蔭へり。其時性に超えて、萬有の主は神の性を易へずして、體と靈とを生ける者として己に合せ給へり。

### 第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、我等信を以て爾を歌ふ者の心に爾の入らざる光を輝かして、智慧に超ゆる平安を我等に與へ給へ、我等が爾の光に由りて無知の夜より日に趨りて、爾人を愛する主を讚榮せん爲なり。

讚美たる者よ、昔ダニエルは爾を神聖なる截られざる山と預見して、明に爾よりハリストス救世主、神産の石の截られんことを呼べり。神の聘女よ、我等信者は今彼を尊みて、爾を崇め讚む。

我不當なる爾の役者は多くの誘惑に陥りて、心の痛と涙とを以て切に禱りて呼ぶ、

かみ はは ひび われ かこ かんなん のが われ たのしみ み たま  
神の母よ、卑微なる我を圍める艱難より脱れしめて、我を樂に満て給へ。

光榮

第一調 「スポタ」の晩堂課 一三

第一調 「スポタ」の晩堂課 一四

よく あず う じんじ もの なんじ ちから きとう もつ わ しょうよく  
慾に與からずしてハリストスを生みし仁慈なる者よ、爾の力ある祈禱を以て我が諸慾  
の荒れたる海を鎮め給へ、我が今より生命の餘日を靈の安靜の中に送りて、歌を以  
て爾を讚め揚げん爲なり。

今も

ああ いた さいわい どうていじょ い いか なんじ て かみ いた いか その て もつ ばんぶつ  
嗚呼至りて福なる童貞女よ、言へ、如何に爾の手に神を抱く、如何に其手を以て萬物  
を持つ者を乳にて養ふ。言へり、我はハリストス神を生みて、アダムと原母との債  
を除きて、産の後にも潔淨に止まる。

第六歌頌

イルモス、われ ぜんしん わりよう よく かこ しょうやく ふち おちい いの かみ さき  
イルモス、我全身無量の慾に圍まれて、諸悪の淵に陥れり。祈る、神よ、曩にイオ  
ナを救ひしごとく、我を淪滅より引き上げて、信に由りて我に無慾を賜へ、我が讚美の聲  
と眞實のと神を以て爾を祭らん爲なり。

えいえん こ ちち ふところ ざ はな はは ふところ あ よよ さき ちち とも いま もの  
永遠の子は父の懐の座を離れずして、母の懐に在り。世世の先より父と偕に在す者  
は末の時に童貞女の胎より出でて、言ひ難き仁慈を以て萬衆を不死の生命に升せ給  
へり。

かな かな われ あくじ よ てき かせ しぼ じごく もん お いさぎよ しんじょ てん  
哀しい哉、我悪事に因りて敵の械に縛られて、地獄の門に墜ちたり。潔き神女よ、天  
より現れて、前に立ち、爾の祈禱を以て爾の役者を起して、爾の神聖なる産を歌ふ者  
に援助の手を授け給へ。

光榮

われ ふとう もの ほろび あな おちい おお もうじゅう われ めぐ じよさい なんじ きとう もつ いし  
我不當の者滅匹の穴に陥りて、多くの猛獸は我を環る。女宰よ、爾の祈禱を以て石  
を除きて、爾の僕を害なく護り給へ、爾は隅石たるハリストスを爾の胎に宿したれ  
ばなり。

今も

どうていじょ むかし よげんしゃ しんせい かい なんじ さん さま かたど なんじ う もの  
童貞女よ、昔預言者の神聖なる會は爾の産の状を像りて、爾ハリストスを生みし者  
を、光る雲と燈、壺と筵、天の露と餅と「マンナ」、門と寶座と宮、杖と樂園と爲せ  
り。

主憐めよ。三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

われら みな なんじ かみ はは さん のち じつ どうていじょ あらわ し あい もつ なんじ  
我等皆爾が神の母にして、産の後にも實に童貞女と現れしを識りて、愛を以て爾の  
仁慈に趨り附く。蓋我等罪なる者は爾を轉達者として有ち、爾獨純潔なる者を患難  
の中に拯救として獲たり。

第七歌頌

イルモス、むかし けいけん よ あきらか せい もの あらわ しょうしゃ こんえん みや とお ごと いろり  
イルモス、昔敬虔に由りて明に聖なる者と現れし少者は、婚筵の宮を過るが如く、爐  
の堪へ難き焰を涉り、聲を合せて歌を歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。

第一調 「スポタ」の晩堂課 一五

ばんゆう によおう えいざい もの なんじ とお もん とお さん のち なんじ いきぎよ どうてい まった  
萬有の女王よ、永在の者は爾の過られぬ門を過ぎて、産の後にも爾の潔き童貞を全  
くして護り給へり。故に我等呼ぶ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。  
われたましい ころろ かんなん いろり な しちばい ほのお や じあい じよさい なんじ きとう  
我靈を殺す患難の爐に投げられて、七倍の焔に焚かる。慈愛なる女宰よ、爾の祈禱  
を以て親ら我に露を降して、呼ばしめ給へ、吾が先祖の神は崇め讃めらる。

光榮

われ しょよく およ たえま いぎない うれい うち お わ いのち にし いた しょとく あずか  
我諸慾及び間斷なき誘惑と憂患との中に老いて、我が生の西に至り、諸徳に與らず、  
怠惰に嚙まれて、爾に呼ぶ、地上の者の慰藉なる女宰よ、我を憐み給へ。

今も

いさぎよ は どうていじよ われら ちじょう もの いったい おい さんしや ちゅうしん ほうじ なんじ み かみ  
潔き母童貞女よ、我等地上の者は一體に於て三者に忠信に奉事し、爾を身にて神を  
生みし者と傳へて、敬虔に歌ふ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、<sup>むかし ひ つゆ いろり てんねん こ きせき かたち しめ けだし ひ しょうしや や</sup>  
昔火と露との爐は天然に超ゆる奇蹟の象を示せり、蓋火は少者を焚かず  
して、<sup>どうていじよ とうていじよ じんせい しんせい さん あらわ ゆえ われら うた よ</sup>  
ハリストスの童貞女よりの種なき神聖なる産を顯せり。故に我等歌ひて呼ば  
ん、<sup>ことごと ぞうぶつ しゆ あが ばんせい ほ あ</sup>  
悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。  
<sup>どうていじよ しさい しんじつ ことば なんじ さん かたど けだしなんじ じつ かみ ことば う かみ</sup>  
童貞女よ、司祭の眞實なる言は爾の産を象れり、蓋爾は實に神の言を生みて、神  
が過り給ひし童貞の門は啓かざりき。故に我等喜びて、職として爾生神女を同心に歌  
ひて、<sup>いさぎよ もの ばんせい ほ あ</sup>  
潔き者を萬世に讃め揚ぐ。  
<sup>いた いさぎよ もの しんせい ひ わ たましい うち しょう いばら や なんじ きとう もつ</sup>  
至りて潔き者よ、神聖なる火を以て我が靈の中に生じたる棘を焚き、爾の祈禱を以  
て我を諸徳の爲に起して、<sup>われ しょとく ため おこ 果 むす けん たま けだしなんじ つね い</sup>  
果を結びてハリストスに獻ぜしめ給へ。蓋爾より常に活  
ける花は生じて、<sup>はな しょう いっさい ぞうぶつ かざ ゆえ われら なんじいさぎよ かみ はは ばんせい とうと</sup>  
一切の造物を飾れり。故に我等爾潔き神の母を萬世に尊む。

光榮

かみ はは われ しょびょう うち と いやし あた たま けだしわれ ふとう もの ゆうしゅう かんなん おちい  
神の母よ、我に諸病の中に疾く醫治を與へ給へ。蓋我不當の者は憂愁患難に陥りて、  
泣きて爾の<sup>なんじ すみやか たすけ よ ゆえ しじょう もの いそ われ およそ くるしみ のが</sup>  
過なる援助を呼ぶ。故に至淨なる者よ、急ぎて我を凡の苦より脱れし  
めて救ひ給へ、<sup>すく たま わ なんじ さん あが ほ うた ため</sup>  
我が爾の産を崇め讃めて歌はん爲なり。

今も

どうていじよ わかし め いた つえ なんじ かたど けだしなんじひとりおつと てん あめ ほん  
童貞女よ、昔芽を出したるアアロンの杖は爾を像れり、蓋爾獨夫なく、天の雨を腹  
に受けて、<sup>う め しょう たま ゆえ われら みな たの よろ かな なんじしょうしんじよ どうしん</sup>  
芽を生じ給へり。故に我等皆楽しみて、宜しきに合ひて爾生神女を同心  
に歌ひて、<sup>うた ばんせい ほ あ</sup>  
萬世に讃め揚ぐ。

第九歌頌

イルモス、<sup>どうていじよ ひみつ い がた けだしかれ てん あらわ かみ ぜんのうしや</sup>  
童貞女の秘密は言ひ難し、蓋彼は天と現れ、ハリストス神全能者のヘル  
<sup>ほうざ およ ひかり はな みや あらわ われら けいけん くれ しょうしんじよ あが ほ</sup>  
ワィムの寶座及び光を放つ宮と現れたり。我等敬虔に彼を生神女として崇め讃む。

どうていじよ ひみつ しさい けだしてんじょう おおい もの ら い あた しょう くれ その ほん  
童貞女の秘密は至榮なり、蓋天上の大なる者等が容るる能はざりし主を彼は其腹に  
容れ給へり。故に我等集まりて彼を讚美し、<sup>い たま ゆえ われら あつ くれ さんび たの ちゅうしん あが ほ</sup>  
楽しみて忠信に崇め讃む。

無玷なる童貞女よ、我等地上の者は獨爾を天より高き者、神の曙、ヘルウィムの  
寶座、宮、及び聖なる掬と見て、讚め揚げて、爾が潔き胎より生み給ひしハリスト  
ス吾が神を崇め讚む。 **光榮**

多くの危難は我を環り、甚しき攻撃は我に逼り、諸病諸罪は我を穴に陥れたり。故  
に我が靈の憂の中に爾に祈る、至聖なる生神女よ、我に援助を獲しめ給へ。

今も

ハリストスよ、潔き神女の祈禱に因りて世界を隠にせよ。敵の力を忠信なる諸王  
の足下に斃し、之に因りて絶えざる平安を致して、世々に之を護り給へ。

次ぎて「常に福にして」。聖三祝文。「天に在す」の後に本調の小讚詞。主憐めよ、  
四十次。祝文、「何の日何の時に」。主憐めよ、三次。光榮今も、「ヘルウィムより  
尊く」。神父よ、主の名を以て福を降せ。次ぎて祝文、「穢なく誘はるるなく」。其他  
常例の如し。發放詞并に赦罪。

~~~~~

主日の朝、夜半課

司祭、「我等の神は恒に崇め讚めらる」。誦經者誦す、「アミン」。我等の神よ、光榮
は爾に歸す、光榮は爾に歸す。「天の王」。聖三祝文。「至聖三者」。「天に在す」。司
祭、「蓋國と權能」。主憐めよ、十二次。光榮、今も、「來れ我等の王」、三次。第五
十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。

次ぎて生を施す聖三者の規程。其冠詞は、惟一なる三日の神性よ、爾を歌ふ。ミトロ
ファンの作。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮
を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イズライリ人の爲に新なる深水の路を開
きたればなり。

附唱、至聖なる三者我等の神よ、光榮は爾に歸す。

惟一の三位なる本原、始なき、永在なる、萬有の造成者、悟られぬ者を、セラフィ
ム等は黙さずして讚榮す、凡の民も歌を以て忠信に彼を尊む。

初に人を造りし主よ、爾は人人に惟一して三光なる爾の神性を現さん爲に爾の像
に循ひて之を造りて、之に智慧と、言と、神とを賜へり、人を愛する主なればなり。

第一調 主日の夜半課 一九

第一調 主日の夜半課 二〇

光榮

父よ、爾は神元なる三位に惟一の權柄の屬するを上より示して、爾と均しく行爲す
る子及び神に言へり、我等降りて、彼等の言語を滄さん。

今も、生神女讃詞。

睿えいち智ちなる者もの等らは像かたどりて云いへり、智ちえ慧うまは生ちちれざる父ちちなり、同どう無むげん原ことばの言どうは同一いつ性せいの子こなり、聖せい神しんは童どう貞てい女じよの内うちに言ことばの爲ために身みを造つくりし者ものなり。

第三歌頌

イルモス、獨ひとり人ひとの性せいの弱よわきを知しりて、憐あわれみを以もつて之これを衣きたる者ものよ、我われに上うへよりの力ちからを帯おびて、爾なんじに呼よばしめ給たまへ、人ひとを慈いつくしむ主しゅよ、爾なんじの言いひ難がたき光こう榮えいの生いける宮みやは聖せいなり。

爾なんじは神しん性せいに於おいて惟ひと一いつにして、昔むかし明あきらかにアウラアムあうらあむに三さん位いの者ものと現あらわれて、形かたち象もつを以もつて神しん學がくの大おほなる眞まこと理しを示しめし給たまへり。我われ等ら醇じゆん正せいに爾なんじ一いち元げんなる三さん光こうの神かみを歌うたふ。

父ちちよ、神かみに適かなふが如ごとく無む窮きゆうに爾なんじより生うまれたる變へん易えきなき子こは光ひかりよりする光ひかりとして輝かがやき、神しん聖せいなる神しんも光ひかりとして出いで給たまへり。我われ等ら醇じゆん正せいに惟ひと一いつなる神しん性せいの三さん位いの光こう明めいに伏ふく拜はいして、之これを讚さん榮えいす。

光榮

惟ゆい一いち者しや三さん者しや、萬ばん性せいより上うへにして、言いひ難がたく、悟さとり難がたき主しゅを無む形けいの者ものは讚さん榮えいして、聖せい三さんの聲こゑを以もつて黙もださざる讚さん美びを奉たてまつる。我われ等らも同どう一いつの聲こゑを以もつて心こころを合あわせて三さん位いなる主しゅを

讚ほめ歌うたふ。

生神女讃詞

生しょう神しん女じよよ、時ときより上うへなる者ものは時ときに及およびて種たねなく爾なんじより出いで、見みえざる主しゅは我われ等らに似にたる者ものと爲なりて、父ちちと、子こと、聖せい神しんとの惟ゆい一いちなる性せい、惟ゆい一いちなる權けん柄べいを教おしへたり。故ゆゑに我われ等ら爾なんじを讚さん榮えいす。

主憐めよ、三次。

坐誦讃詞、第一調。

我われ等ら皆みな父ちちと子こ及および同どう尊そんにして義ぎなる神しんに伏ふく拜はいせん。光こう榮えいは造つくられざる三さん者しや、至いたりて神しん聖せいなる能のう力りよくに歸きす、無む形けいの者ものの品ひん位いは之これを讚さん榮えいす。我われ等ら地ちに生うまるる者ものも今こんにち日おそれを以もつて醇じゆん正せいに之これを讚さんめ揚あぐ。

光榮、今も、生神女讃詞。

婚こん姻いんに與あずからざる讚さん美びたるマまリヤ、失しつ望ぼうする人ひとの避かくれ所れが、神かみの居すまい處いよ、我われ等ら常つねに諸しよ悪あくの無む道どうに迷まよひて、至し仁じんなる主しゅを怒いらしむる者ものを痛つう悔かいの途みちに向むかはしめ給たまへ。

第四歌頌

第一調 主日の夜半課 二一

第一調 主日の夜半課 二二

イルモス、アウラクムあうらくむは先せん知ちの目めにて爾なんじ神かみの恩おん寵ちゆうに覆おおはるる山やまを見て、イズライリいずらいりの聖せいなる者ものが我われ等らを救すくひ改あらためん爲ために、爾なんじより出いづるを預よげん言いせり。

三さん日じつの神しん元げんよ、爾なんじの神しん功こうの光こう照しやうの輝かが煌きにて我われを照てらし給たまへ、我われが心こころの目めにて智ちえ慧こに超こゆる爾なんじの神しん聖せいなる光こう明めいの華か麗らを仰あおぎ、之これに與あずかある事ことの甘かん美びを感かん想そうせん爲ためなり。

主しゅよ、爾なんじは始はじめに萬ばん事じを行おこなふ爾なんじの言ことばと爾なんじの口くちの同どう一いつ性せいの氣きとを以もつて天てん及および其その全ぜん軍ぐんを造つくりて、神しん性せいの三さん光こうの獨どく一いつの權けんを以もつて萬ばん有ゆうを宰つかり給たまふ。

光榮

萬事を宰制する全能の三者、混淆せざる惟一者よ、我を爾の像と肖とに循ひて造りしに因りて、我を照して、爾の聖にして仁愛且純全なる旨を行ふを教へ給へ。

生神女讃詞

至淨なる者よ、爾は聖三者の一、神元なる子を生子給へり。彼は我等の爲に爾より身を取りて、三日の神性の暮れざる光と輝とを以て地に生るる者を照し給ふ。

第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリストトスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

爾の華麗の近づき難き光線にて天使の首品を直に輝かす獨一有權なる聖三者よ、爾の光明を以て醇正に爾を歌ふ者を照し給へ。

單一なる三日の神元よ、爾が仁慈に因りて生を賜ひし性は今爾を歌ひて、諸の罪と誘惑、菑害と憂愁より脱れしめんことを求む。

光榮

父と、子と、聖神、惟一の神性、分れ、又分れざる者、見ゆると見えざる萬物の惟一の神を我等信を以て讃榮す。

生神女讃詞

至淨なる者よ、諸預言者の言語は皆爾の言ひ難く解き難き産を預録せり。我等斯の産を單一にして三日なる神性の奥義に導く者なりと知れり。

第六歌頌

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

永在なる三者よ、爾は意旨の同一に於て同等の能力を有つ、爾は單一にして分れざる惟一者なり。爾の能力を以て我等を護り給へ。

二次。

光榮

第一調 主日の夜半課 二三

第一調 主日の夜半課 二四

悟られぬ三者よ、爾は仁慈なるに因りて己の意旨を以て萬世を無より出し、亦人をも造れり。今も我を凡の危難より救ひ給へ。

生神女讃詞

至淨なる童貞女・神の聘女よ、爾は入らざる日、全能を以て大なる光體を造りて排列せし者の家と爲れり。今も我を諸慾の昏昧より救ひ給へ。

主憐めよ、三次。

坐誦讃詞、第一調。

聖なる三者、分れざる性、截られずして三位に截らるれども、神性に於て分るるなく止まる主に我等地上の者は畏を以て伏拜し、造物主及び主宰として至仁なる神を讃榮す。

光榮、今も、生神女讃詞。

至りて無玷なる者よ、我が不當なる靈を治め、其罪の多きに因りて淪滅の深處に跌

あわれ おそ し ととき われ つみ あくき およそ くるしみ のが たま
きしを憐み、畏るべき死の時にも我を罪する悪鬼と凡の苦より脱れしめ給へ。

第七歌頌

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め
ほ 讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。
かみ ことば ぜんのうしや どういつ せいか がやき なんじ やく ごと じんじ よ なんじ ちら およ
神の言、全能者の同一性の輝煌よ、爾が約せし如く、仁慈なるに因りて、爾の父及
び聖神と共に我の内に神功の住居を爲して、我を悪鬼と諸慾との爲に畏るべき者と現
し給へ。二次。

光榮

しゅさい なんじ おのれ じんじ うみ われら しめ ため なんじ こ わ ひび つかわ われら
主宰よ、爾は己の仁慈の海を我等に示さん爲に、爾の子を我が卑微に遣して、我等
を變じて初始の光明に回せり。今も神聖なる神を以て我を教へ給へ。

生神女讃詞

しじょう もの ほうざい にな ばんゆう おう なんじ どうてい ほん い ひと
至淨なる者よ、ヘルウィムの寶座に昇はるる萬有の王は爾の童貞の腹に入りて、人
を愛する主なるに因りて、衆を壞滅より救へり。今も爾の祈禱を以て我を護り給へ。

第八歌頌

イルモス、昔火と露との爐は天然に超ゆる奇蹟の象を示せり、蓋火は少者を焚かず
して、ハリストスの童貞女よりの種なき神聖なる産を顯せり。故に我等歌ひて呼ば
ん、悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。
ばんゆう しゅ さんい ぜんのうしや なんじ しんこう またたき もつ てん まく ごと は また なんじ
萬有の主、三位なる全能者よ、爾は神功の瞬を以て天を幔の如くに張り、又爾の

第一調 主日の夜半課 二五

第一調 主日の夜半課 二六

ぜんりよく て もつ ち おも か ひと あい しゅ なんじ お あい しん もつ なんじ
全力の手を以て地の重きを懸けたり。人を愛する主よ、爾に於ける愛と信とを以て爾
の諸僕をも堅め給へ、我等が切に爾を世々に讃榮せん爲なり。二次。

光榮

い さんじつ ひかり せい ゆいいち かみ なんじ しんげん ひかり もつ なんじ うた もの てら
位にては三日の光、性にては唯一の神よ、爾の神元なる光を以て爾を歌ふ者を照し
て、常に爾の輝ける光明を仰がしめ給へ、我が之に因りて爾の甘美にして、光を施
す、至りて盛なる光榮に飽かせられて、醇正に爾を世々に讃め揚げん爲なり。

生神女讃詞

しじょう しょうしんじょ なんじ こ へんえき ひと せい う しだい じんじ よ これ
至淨なる生神女よ、爾の子は變易なく人の性を受けて、至大なる仁慈に因りて、之
を古の朽壞より救ひて、天に上せ給へり。我等感謝の心を懷きて彼に歌ふ、悉く
の造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今
も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。
しせい いったい さんしや ぞうぶつ きゅうしゅ けいたい およ しん れい なんじ しょぼく てき あくぼう こうげき
至聖なる一體の三者、造物の救主よ、形體及び神靈なる爾の諸僕を敵の悪謀と攻撃
より救ひて、常に爾の牧群を害なく護り給へ。二次。

光榮

三日にして一元なる全能の神よ、爾は己の大仁慈の無量なる深を示さん爲に、我等爾の諸僕に救を施す誠命を賜へり、我等を之を行ふに堪へさせ給へ。

生神女讃詞

神元なる三位に於て唯一者と確信せらるる神よ、我等の禱を眷みて、爾の諸僕に、至淨にして讚美たる神の母の祈禱に因りて、慰藉を與へ給へ。

次に聖三者の規程の後に主日毎に誦する所のグリゴリイ シナイトの聖三者讃詞、「爾神言を讚榮するは誠に當れり」、本書の末に載す。及び其他夜半課の式、并に發放詞。



早課

六段の聖詠畢りて「主は神なり」、第一調に依りて歌ひ、後主日の讃詞。二次、生神女讃詞。一次。大晩課に載す。次ぎて聖詠經の常例の誦文。

第一の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第一調。

救世主よ、爾の墓を守る兵卒は女等に現れて復活を傳ふる天使の光輝に因りて死せ
第一調 主日の早課 二七

第一調 主日の早課 二八

し如くなれり。我等爾朽壞を滅す者を讚榮し、爾墓より復活せし我等の唯一の神に伏拜す。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。鴻恩の主、生命を施す有能者よ、爾は甘じて十字架に釘せられ、死者として墓に置かれて、爾の死を以て權柄を破り給へり。蓋地獄の門衛は爾を畏れて慄き、爾は古世より死せし者を己と偕に起し給へり、獨人を慈む主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

我等皆爾を神の母、産の後にも實に童貞女なりと知りて、愛を以て爾の慈憐に趨り附く。蓋我等罪なる者は爾を轉達として有ち、爾獨純潔なる者を誘感の中に救として得たり。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

女等朝早く墓に來り、天使の顯現を見て慄けり。墓は生命を輝かし、奇蹟は彼等を驚かせり、故に彼等は往きて門徒に復活を傳へたり。ハリストスは獨有能有權なる者として、地獄を虜にし、朽ちたる者を皆己と偕に起し、十字架にて定罪の畏懼を解き給へり。

句、主よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇蹟を傳へん。

萬有の生命よ、爾は十字架に釘せられたり、不死の主よ、爾は死者の中に入りたり、救世主よ、爾は三日目に復活してアダムを己と偕に朽壞より起し給へり。故に天軍は爾生を施す主に呼べり、ハリストスよ、光榮は爾の神聖なる苦に歸す、光榮は爾

の復活に歸す、獨人を愛む主よ、光榮は爾の寛容に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

マリヤ、主宰の尊き住居よ、我等甚しき失望と、諸罪と、憂患との淵に陥りし者を起し給へ。蓋爾は罪なる者の守護と、扶助と、堅固なる轉達にして、爾の諸僕を救ひ給ふ。

次ぎて「道に玷なくして」。其後諸讃詞、「救世主よ、天使の軍」、本書の末に載す。次に小聯禱。

應答歌、第一調。

盜賊の悔は樂園を奪ひ、攜香女の哀は喜を知らせたり、蓋爾、ハリストス神よ、復活して、世界に大なる憐を賜へり。

品第詞。第一偈和詞、第一調。毎句復唱す。

我が憂の時、私の痛歎を聴き給へ、主よ、我爾に呼ぶ。野に居りて虚しき世の外に在る者には恒に神聖なる望あり。

第一調 主日の早課 二九

第一調 主日の早課 三〇

光榮

聖神には父及び子と均しき尊敬と光榮とは適ふ。故に我等同一權能の聖三者を歌はん。

今も、同上。

第二偈和詞

神よ、爾は我を爾の律法の山に登せたり。諸徳にて我を飾り給へ、我が爾を歌はん爲なり。

言よ、爾の右の手に我を取りて、我を蔭ひ、我を守り給へ、罪の火が我を焚かざらん爲なり。

光榮

聖神に因りて凡の造物は新にせられて、復初の状に還る、父及び言と均しく有能なればなり。

今も、同上。

第三偈和詞

人我に向ひて、主の家に向かんと云ふ時、我が神は樂しみ、心も共に喜ぶ。

ダウイドの家には大なる畏懼あり、蓋彼處に寶座は立てられて、地上の萬族萬民は審判せられん。

光榮

聖神には父及び子と均しき尊敬、伏拜、光榮、權柄を歸すること當然なり、蓋聖三者は性にて惟一なり、唯位にては然らず。

今も、同上。

提綱、第一調。

主曰く、我今興き、執へられんとする者を危からざる處に置かん。句、主の言は淨き言なり。

「凡そ呼吸ある者は」。順序の早課福音經。

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス獨罪なき者を拜むべし。ハリストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌ひ讃む、爾は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱ふ。信者よ、皆來りて、ハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて歡喜は全世界に臨みたればなり。我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌はん、主は十字架に釘うたるるを忍びて、死を以て死を滅ししに因る。

第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。

光榮

使徒の祈禱に依りて、憐深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

今も

生神女の祈禱に依りて、憐深き主よ、我等の多くの罪を淨め給へ。

第一調 主日の早課 三一

第一調 主日の早課 三二

次ぎて、第六調。

神よ爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。

讚頌

預め言ひし如く、イイス墓より復活して、我等に永遠の生命と大なる憐とを賜へり。

「神よ、爾の民を救ひ」。高聲「爾が獨生子の仁慈と慈憐と」。

規程四篇、主日の、讚詞四章、十字架復活の、三章、生神女の、三章、月課經の、四章。若し聖人の祭ならば、聖人の、六章、十字架復活の、二章、生神女の、二章。

主日の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イズライリ人の爲に新なる深水の路を開きたればなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

讚詞

元始に至淨なる手にて神の力を以て我を土より作りし主は、十字架に手を伸べて、童貞女より取りし我が朽ち易き身を土より喚び起せり。二次。

光榮

神聖なる吹嘘を以て我に靈を入れし主は、我が爲に殺され、靈を死に付して、我を永遠の鎖より解き、己と偕に復活せしめて、不朽の榮を賜へり。

今も、生神女讚詞。

恩寵の泉よ、慶べ、天の梯と門よ、慶べ、燈臺と金の壺、及び截られざる山、生命

を賜ふハリストスを世界の爲に生みし者よ、慶べ。

又十字架復活の規程

第一歌頌、同調。

イルモス、「ハリストス生る」。

附唱、主よ、光榮は爾の尊き十字架と復活に歸す。

ハリストスは人體を取りて我を神成し、ハリストスは卑くなりて我を高くし、ハリストス生命を賜ふ主は身にて苦を受けて我を苦より解き給ふ。故に我感謝の歌を奉る、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスは十字架に釘せられて我を上せ、ハリストスは殺されて我を己と偕に

第一調 主日の早課 三三

第一調 主日の早課 三四

復活せしめ、ハリストスは我に生命を賜ふ。故に我楽しみて手を拍ちて、救世主に凱歌を奉る、彼光榮を顯したればなり。

生神女讃詞

童貞女よ、爾は神を孕めり、至淨なる者よ、爾は童貞に於てハリストスを生めり。彼は爾より身を取りて、一位二性の獨生子と識らる、光榮を顯したればなり。

又至聖なる生神女の規程

第一歌頌、同調。

イルモス、「死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手」。

附唱、至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ。

我等の不能は爾に適ふ何の歌をか爾に奉らん、唯悦ばしむる歌、ガウリイルが奥妙に我等に教へし者なり、生神童貞女、聘女ならぬ母よ、慶べ。

我等信者は永貞童女、上なる軍の王の母に最淨き心より熱切に呼ばん、生神童貞女、聘女ならぬ母よ、慶べ。

純潔なる者よ、爾の悟り難き産の奥義の淵は量られず。故に我等疑なき信を以て切に爾に歌を奉りて云ふ、生神童貞女、聘女ならぬ母よ、慶べ。

次ぎて月課經の規程。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、獨人の性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力を帯びて、爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。

仁慈なる主よ、爾は私の神にして、陥りし者を憐みて、甘じて我に降り、十字架に釘せらるるを以て我を升せて、爾に呼ばしめ給ふ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。

本原の生命たる主宰ハリストスよ、爾は慈憐なる神にして、我朽ちたる者を衣、死

に屬する塵に下りて、死の權を滅し、三日目に死より復活して、我に朽ちざるを衣せ給へり。

生神女讚詞

童貞女よ、爾は至聖神に因りて神を孕みて、焼かれざる者と止まれり、蓋立法者モイセイに顯れし棘は爾堪へ難き火を受けし者の燃えて焼かれざるを明に前兆せり。

又 イルモス、「世の無き前に分離なく父より」。

第一調 主日の早課 三五

第一調 主日の早課 三六

己の肩に迷へる羊を任ひて、木を以て其罪を滅ししハリストス神に呼ばん、我等の角を高くせし主よ、爾は聖なり。

大なる牧者ハリストスを地獄より上せて、其聖務に因りて使徒等を以て嚴に諸民を牧せし主に、我等信者は眞實と神聖なる神とを以て務むべし。

童貞女より種なく甘じて身を取りし子、生みし者を産の後に神聖なる力を以て潔き童貞女と護りし者、萬有の上在る神に呼ばん、主よ、爾は聖なり。

又 イルモス、「獨人の性の弱きを知りて」。

童貞女よ、我等預言者の言に循ひて、正しく爾を輕き雲と稱ふ。蓋主は爾に抱かれて、エジプトの迷惑の手造を滅して、之に事ふる者を照さん爲に來り給へり。

讚美たる者よ、預言者の會は爾を實に封じたる泉、閉ぢたる門と稱へて、爾が産の後にも守りし童貞の徴を明に我等の爲に像れり。

至りて無玷なる童貞女よ、至上の智慧を能するに循ひて悟るに堪へたるガウリイルは爾に欣ばしき報信を攜へたり、明に言の降孕を知らせ、言ひ難き産を傳ふる者なり。

第四歌頌

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾、神の恩寵に覆はるる山を見て、イズライリの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。

斯の救主、エドムより出で、棘の冠を冠り、血に染みたる衣を衣、木に懸かれる者は誰ぞ、是れイズライリの聖なる者、我等を救ひ改むる主なり。

頑しき人人よ、視て愧づべし、蓋爾等が無智に因りてピラトの命を乞ひて、犯罪者として十字架に懸けし者は死の力を破りて、神に適ふが如く墓より復活せり。

生神女讚詞

童貞女よ、我等爾が生命の樹なるを識る、蓋爾より生ぜし者は人の死を致す果に非ず、乃永き生命の樂にして、爾を歌ふ我等を救ふ者なり。

又 イルモス、「イエッセイの根より生ぜし枝」。

斯の美しき者、エドムより出で、其衣の赤きはワオソルの葡萄に染みたるが如き者は誰ぞ、神としては、美しく、人としては肉體の血に赤みたる衣を衣たる者なり。

我等信者は彼に歌ふ、主よ、光榮は爾の能力に歸す。

ハリストスは將來の福の司祭長と現れて、我等の罪を滅し、己の血を以て更に美し

く、更に全備なる幕に入る奇妙なる途を示して、我等の前驅として聖所に入り給へり。

生神女讃詞

第一調 主日の早課 三七

第一調 主日の早課 三八

讃美たる者よ、爾は我等の爲に現れし新なるアダムよりエワの古の債を赦さんことを求め得たり。蓋 潔き降孕に因りて己に智あり 靈ある肉體を合せたるハリストスは爾より出で給へり、二性にして一位なる主なり。

又 **イルモス**、「アウワクムは先知の目にて」。

天よ、奇蹟を聴け、地よ、耳を傾けよ、蓋塵なる陥りたるアダムの女は神己の造成主の爲に母と爲るに定められたり、我等の拯救及び改易の爲なり。

讃美たる者よ、我等大にして畏るべき爾の祕密を歌ふ。蓋永在の者は天上の品位より隠みて、雨が羊の毛に於ける如く爾に降り給へり、爾を歌ふ我等の救の爲なり。

諸聖の聖なる讃美たる生神女よ、爾より異邦民の期望、信者の拯救なる贖罪主、生を施す主は輝き出でたり。爾の諸僕の救はれんことを彼に祈り給へ。

第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリストスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

イウデヤ人は大なる羊の牧者及び主を十字架の木にて殺したれども、彼は地獄に葬られたる死者を羊の如く死の權より救ひ給へり。

ハリストス吾が救世主よ、爾は十字架にて和睦を福音し、虜に赦を傳へ、權ある者を辱かしめ、爾の神聖なる復活を以て其裸體にして貧しくなりたるを顯し給へり。

生神女讃詞

讃美たる者よ、切に爾に求むる者の禱を斥くる母れ。至淨なる者よ、之を受けて、爾の子なる神、一の恩主に捧げ給へ、我等爾を轉達者として得たればなり。

又 **イルモス**、「和平の神、仁慈の父よ」。

嗚呼神の智慧の富と深や。智者を執ふる主は其悪謀より我等を救へり、蓋甘じて身の弱きを以て苦を受けて、己の力を以て死者を活かして、之を起し給へり。

實在の神ハリストスは我等の爲に肉體に合し、十字架に釘せられ、死し、葬られ、又復活し、己の肉體と偕に嚴に父に升起、之と偕に來りて、敬虔に彼に事ふる者を救はん。

生神女讃詞

諸聖の聖なる潔き童貞女よ、爾は諸聖の聖にして、衆を聖にするハリストス贖罪主を生み給へり。故に我等爾萬物の造成者の母たる者を萬有の女王及び女宰として傳ふ。

第一調 主日の早課 三九

第一調 主日の早課 四〇

又 **イルモス**、「己の降臨の光にて」。

しょうしん どうていじょ てん ぐん なんじ み たの ひとびと かい かれ ら とも よろこ けだしなんじ さん よ
生神童貞女よ、天の軍は爾を見て楽しみ、人人の會は彼等と共に喜ぶ、蓋爾の産に因
りて合せられたり。我等宜しきに合ひて之を讚榮す。
ひとびと した おもい じんるい かざり もの さんび うご どうていじょ まえ た しん
人人の舌と思念とは實に人類の飾なる者の讚美に動くべし。童貞女は前に立ちて、信
を以て彼の奇蹟を歌ふ者を明に榮し給ふ。
えいらしゃ かしよう さんび かみ はは どうていじょ ささ けだしかれ いた しんせい こうえい
睿智者の歌頌と讚美とは神の母童貞女に捧げらるべし、蓋彼は至りて神聖なる光榮
の宮と爲れり。我等宜しきに合ひて彼を讚榮す。

第六歌頌

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾
が神よ、爾の民を救へ、爾は弱者の力と更新なればなり。
主ハリストスよ、我等は始めて造られし者の愆にて痛く傷つけられ、爾が我等の爲
に受けし傷にて愈されたり、爾は弱者の力と更新なればなり。
全能の主よ、爾は己の權にて衆を呑む鯨の力を破り、之を殺して、我等を地獄よ
り引き上げたり、爾は生命と光と復活なればなり。

生神女讚詞

しじょう どうていじょ わ やから げんそ つみ よ うしな なんじ よ また これ え
至淨なる童貞女よ、我が族の原祖は罪に因りて失ひしエデムを爾に因りて復之を得
て、爾の爲に樂しむ、爾は産の前にも産の後にも潔き者なればなり。

又 イルモス、「海の猛獸はイオナを」。

むよく むけい ちえ なんじ さん まえ さん のち いさぎよ もの
無愆無形の智慧なるハリストス神は人の智慧、即神の性と肉體の麤笨とを接合せし
むる者に合せられ、變易なくして我全人と全く合一になれり、十字架に釘せられて、
われおちい ぜんじん すくい たま ため
我陥りたる全人に救を賜はん爲なり。

むかし かわし のぞみ あざむ つまづ たお いまことば あわ よ
昔アダムは神たらんとする望に欺かれて、躓きて仆れたり。今言に合せらるるに因
りて神成せられて興き、苦に因りて苦なきを得、子として父及び聖神と偕に寶座
に坐して讚榮せらる。

生神女讚詞

ぎ もつ おう かみ むげん ちち ふどころ はな いさぎよ しょうじょ ふどころ い さき はは
義を以て王たる神は無原なる父の懷を離れずして、潔き少女の懷に入り、先に母
なく生れし者は父なくして人體を取り給ふ、其來歴は畏るべくして、悟り難く、言ひ難
し。

又 イルモス、「今を限の淵は」。

えいていどうじょ てん ひんい ぼく なんじ こ まえ た よろ かな なんじ たね さん
永貞童女よ、天の品位は僕として爾の子の前に立ち、宜しきに合ひて爾の種なき産
を奇とす、爾は産の前にも産の後にも潔き者なればなり。

いた いさぎよ もの さき むけい ことば その むね もつ いっさい おこな ぜんのうしや むけい ぐん
至りて潔き者よ、先に無形なる言、其旨を以て一切を行ひ、全能者として無形の軍
を無より有と爲しし主は爾より身を取り給へり。

第一調 主日の早課 四一

第一調 主日の早課 四二

かみ おんちよう こうむ もの なんじ いのち ほどこ さん てき ころ じごく あきらか ふ
神の恩寵を蒙れる者よ、爾が生を施す産にて敵は殺され、地獄は明に踐まれ、
われら かせ あ もの と ゆえ われ よ わ ころ よく ほろぼ たま
我等桎梏に在る者は解かれたり。故に我呼ぶ、我が心の愆を滅し給へ。

小讚詞、第一調。

主宰よ、爾は神なるに因りて光榮の中に墓より復活し、世界をも共に復活せしめ給へり。人の性は爾を神として讃め歌ひ、死は滅され、アダムは樂しみ、エウは今縛より釋かれて、歡びて呼ぶ、ハリストスよ、爾は衆人に復活を賜ふ主なり。

同讚詞

我等三日目に復活せし主を全能の神として歌はん。彼は地獄の門を破り、古世よりの死者を墓より起し、嘉せし如く、攜香女に現れて、先づ彼等に慶べよと云ひ、獨生命を施す主として、使徒等に歡喜を報らせ給へり。故に女等は信を以て門徒に勝利の表章を福音し、地獄は呻き、死は泣き、世界は樂しみ、衆は共に悦ぶ、蓋爾は、ハリストスよ、衆人に復活を賜へり。

第七歌頌

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。地は畏れ、日は隠れ、光は暗み、殿の神聖なる幔は裂け、石は碎けたり、義なる者にして、先祖の尊まれて崇め讃めらるる神が十字架に懸り給へばなり。爾は援助なき者の如くなりて、甘じて我等の爲に傷づけられ、死に付されたれども、萬の者を釋き、權能の手を以て己と偕に復活せしめ給へり、先祖の尊まれて崇め讃めらるる神なればなり。

生神女讚詞

常生の水の泉よ、慶べ、樂の天堂よ、慶べ、信者の垣よ、慶べ、婚姻に與らざる者よ、慶べ、全世界の歡喜よ、慶べ、先祖の崇め讃めらるる神が爾に依りて我等に輝きたればなり。

又 イルモス、「偕に敬虔に養はれし少者は」。

昔弟を殺しし手に由りてアウェリの血に赤く染みたる地は詛はれたり、今爾の神たる血を注がれ、祝福せられて、樂しみて呼ぶ、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。神に逆ふイウデヤの民はハリストスを殺しし狂暴の爲に泣くべし、異邦民は樂しみて、手を拍ちて呼ぶべし、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

第一調 主日の早課 四三

第一調 主日の早課 四四

視よ、輝ける天使は攜香女に呼べり、來りて、ハリストスの復活の表章なる布及び墓を見て呼べ、先祖の神よ爾は崇め讃めらる。

又 イルモス、「生神女よ、我等信者は爾を見て」。

生神女よ、イアコフは豫知して梯を爾なりと悟れり、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、嘉せし如く、爾に縁りて地に現れて、人人と偕に住ひ給へり。潔き者よ、慶べ、爾より量り難き仁慈に因りて、實にアダムの皮肉、即我全き人を衣たる牧者は出で給へり、此れ先祖の尊まれて崇め讃めらるる神なり。永遠なる神は爾の潔き血に由りて實に新なるアダムと爲り給へり。彼に今我古び

たる者を新にせんことを祈り給へ、蓋我呼ぶ、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

己の旨に循ひて萬物を造り、又之を變化し、己の苦にて死の蔭を易へて永遠の生命と爲す神の言よ、我等悉くの造物は絶えず爾を主として歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。ハリストスよ、爾は地獄の門及び其防固の中に哀と苦とを滅して、三日目に墓より復活し給へり。悉くの造物は絶えず爾を主として歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

生神女讃詞

種なくして性に超えて神聖なる輝に由りて最貴き眞珠なるハリストスを生みし者を歌ひて呼ばん、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

又 イルモス、「露を出す爐」。

人人よ、來りて、至淨なる足の立ちし處、衆人の救の爲に木の上にハリストスの生を施す神聖なる手の伸べられし處に伏拜して、生命の墓を環りて歌はん、悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。

神を殺ししイウデヤ人の至りて不法なる讒言は露れたり、蓋彼等が惑はす者と名づけし主は有能者として無智の封印を辱かして起し給へり。故に我等歡びて歌はん、悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。

聖三者讃詞

至淨なるセラフィム等は聖三の歌を以て唯一の主を讃美して、僕に適ふが如く畏を

第一調 主日の早課 四五

第一調 主日の早課 四六

以て三位の神性を讃榮す。彼等と偕に我等も敬虔に歌はん、悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。

又 イルモス、「イズライリの少者は爐に在りて」。

新娶者の出づる如く、萬有の主宰ハリストスが出で給ひし輝ける宮を我等皆歌ひて呼ばん、主の悉くの造物は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

神の至榮なる寶座よ、慶べ、信者の垣よ、慶べ、爾に依りて幽暗に在る者に光なるハリストスは輝けり。故に彼等爾を讃美して呼ぶ、主の悉くの造物は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

我等の救の起原者なる主を生みし讃美たる童貞女よ、衆の爲に禱り給へ。蓋皆切に呼ぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルワイムより尊く」。

第九歌頌

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。嗚呼不法不順の民よ、何ぞ悪しきを謀りて、不義不虔の者を義と爲し、義なる光榮の主を木に懸けんことを定めたる。我等宜しきに合ひて彼を崇め讃む。救世主、世の罪を任ひし玷なき羔よ、我等爾三日目に復活せし者を父及び爾の神聖なる神と偕に讃榮し、光榮の主と傳へて崇め讃む。

生神女讃詞

人を愛する主よ、爾の尊き血にて得たる爾の民を救ひ、皇帝に敵に對して能力を賜ひ、爾の諸教會に平安を與へ給へ、生神女の祈祷に因りてなり。

又 イルモス、「我奇異にして至榮なる祕密」。

主よ、爾の十字架は爾の言ひ難き能力に因りて榮を獲たり、蓋爾の弱きは衆の爲に力に超ゆる者と顯れたり。此にて強き者は地に仆されたり、卑しき者は天に升せらる。

ハリストスよ、畏るべき我等の死は殺されたり、蓋爾は地獄に在る者に現れて、死よりの復活を賜へり。故に我等爾を生命と復活、及び本原の光と歌ひて崇め讃む。

聖三者讃詞

無原無極なる性は三の神元の位に於て識らる、父と、子と、聖神との中に惟一の神性なり。敬虔なる皇帝は之を頼みて救はる。

又 イルモス、「生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘」。

童貞女よ、爾は神の先祖たる預言者ダウィドの根より生ぜり、然れども爾は實に

第一調 主日の早課 四七

第一調 主日の早課 四八

ダウィドにも榮を被らせたり、預言せられし光榮の主を生みたればなり。我等宜しきに合ひて彼を崇め讃む。

嗚呼至淨なる生神女よ、爾の光榮の大なるは凡の讚美の法に超ゆ。然れども女幸よ、寛容にして爾の不當なる諸僕より愛を以て爾に捧ぐる讚歌を受け給へ。

嗚呼智慧に超ゆる爾の奇蹟や、蓋爾は、純潔なる童貞女よ、獨日よりも輝きて、衆に爾の悟り難き産の新なる奇蹟を顯し給へり。故に我等皆爾を崇め讃む。

カダワシヤ
共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。

早課の差遣詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讚頌、第一調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

百四十九聖詠を讀み畢りて此の末節を歌う。

ハリストスよ、我等爾が救を施す苦を歌ひ、爾の復活を讃榮す。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

十字架を忍びて、死を空しくし、死より復活せし主よ、我等の生命を平安ならしめ給

へ、爾獨全能の主なればなり。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

地獄を虜にし、爾の復活にて人を復活せしめしハリストスよ、我等に潔き心を以て爾を歌ひ、爾を讚榮するに堪へさせ給へ。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

ハリストスよ、我等爾が神に合ふ寛容を讚榮して、爾を歌ふ。爾は童貞女より生れて、父に離れざりき、人として苦を受け、甘じて十字架を忍び、宮より出づるが如く墓より復活し給へり、世界を救はん爲なり。主よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌、アナトリイの作、同調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

爾が十字架の木に釘せられし時、敵の權は滅され、造物は爾を畏るに因りて戦ひ、地獄は爾の力にて虜にせられたり。爾は死者を墓より復活せしめ、盜賊の爲に樂園を開き給へり。ハリストス我が神よ、光榮は爾に歸す。

句、和聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉞を以て彼を讃め揚げよ、凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

尊き女等は泣きて急ぎて爾の墓に詣り、墓の開けたるを觀、天使より新なる至榮の奇蹟を知りて、使徒等に報らせて云へり、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

第一調 主日の早課 四九

第一調 主日の早課 五〇

句、主我が神よ、起きて爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

ハリストス神よ、我等は爾の苦の神聖なる傷、又シオンに在りし主宰の聖務、世の末に神妙に現れし者に伏拜す。蓋爾義の日は幽暗に寝ぬる者を照して、暮れざる光に向はしめ給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇蹟を傳へん。

亂を好むエウレイの族よ、耳を傾けよ、ピラトに來りし者等は何處にか在る、守る兵卒は言ふべし、墓の印は何處にか在る、葬られし者は何處にか移されたる、賣られぬ者は何處にか賣られたる、寶は如何ぞ盜まれたる。不法なるイウデヤ人は何ぞ救世主の起くるを讒言する。死者の中に自由なる者は復活して、世界に大なる憐を賜ふ。

光榮、早課の福音の讚頌。今も、

生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり、爾に身を取りし主は地獄を虜にし、アダムを喚び起し、詛を壞り、エワを釋し、死を滅し、我等を生かせり。故に我等歌ひて呼ぶ、斯く行ひ給ひしハリストス神は崇め讚めらる、光榮は爾に歸す。

大詠頌。次ぎて復活の讚詞。

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へばなり。

發放詞



リトラルギヤ
聖體禮儀には代式の眞福詞、第一調。

敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時我を懷ひ給へと呼べばなり。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

我爾の苦に伏拜し、アダム及び盜賊と共に復活を讚揚し、朗なる聲にて爾に呼ぶ、主よ、爾の國に來らん時我を憶ひ給へ。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。

罪なき者よ、爾は甘じて十字架に釘せられて、墓に藏められたれども、神なるに由りて復活し、アダムを己と偕に起し給へり、爾の國に來らん時我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の者なればなり。

第一調 主日の聖體禮儀 五一

第一調 主日の聖體禮儀 五二

爾の肉體の殿を三日目の葬の後に復活せしめしハリストス神よ、爾はアダムとアダムよりする者とを己と偕に復活せしめ給へり、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へと呼べばなり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストス神よ、攜香女は涙を垂れて、朝早く爾の墓に來りしに、白き衣を着て坐せる天使に逢ひたり、彼は呼べり、何を尋ぬるか、ハリストス復活せり、今より泣く勿れ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

主よ、爾の使徒は命ぜられし山に來り、爾救世主を見て伏拜せり。爾彼等を萬民に教を傳へ、洗禮を授けん爲に遣し給へり。

光榮、聖三者讚詞。

我等父に伏拜し、子を讚榮し、聖神を共に讚頌して、呼びて云はん、至聖なる三者よ、我等衆人を救ひ給へ。

今も

ハリストスよ、爾の民は祈祷の中に爾の母を轉達として爾に捧ぐ。仁慈なる主よ、彼の禱に因りて爾の恵を我等に垂れて、爾墓より我等に輝きし主を讚榮せしめ給へ。

提綱、第一調。

主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給へ。

句、義人よ、主の爲に喜べ讚榮するは義者に適ふ。

「ア ril イヤ」、願はくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従はしむる神は讃頌せられん。
句、大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダウイド、及び其裔に世に垂るる者よ、我爾の名に歌はん。



主日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に主宰に奉る傷感の讃頌、第一調。
句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

第一調 主日の晩課 五三

全能の主よ、爾は仁慈に因りて爾の言と神とを以て萬物を出し、次に我靈智なる生物を造り給へり、我が爾の聖なる名を讃榮せん爲なり。然れども我は却りて我が耻づべき行を以て常に之を瀆す。祈る、我を憐み給へ。

第一調 主日の晩課 五四

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。
不當なる靈よ、爾の神聖なる良族と不朽なる本國とを知りて、善行を以て恒に之に到らんことを務めよ。朽壞する者は、一も爾を誘ふべからず、爾は上に屬す、肉體は塵にして朽つ、下なる者は上なる者に勝つべからず。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。
吾が至りて不當なる靈よ、至仁なる主に詣り、熱き涙を以て之に就き、爾の行ひし事を審判より前に悉く告解し、主が未だ爾の爲に門を閉ぢざる前に、造成主を己の爲に慈憐の者と爲して、赦免を獲よ。

又無形軍の讃頌

句、願はくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイスライリを其悉くの不法より贖はん。

無形の諸天使、神の寶座の前に立ち、彼處の光に照されて、常に光を放つ第二の光たる者よ、我が靈に平安と大なる憐とを賜はんことをハリストスに祈り給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。
第一の生命より實に滅びざる生命を受けし不死の諸天使よ、爾等は永在の光榮及び永久の睿智の至福至聖なる實見者と爲りて、光に満たされて、至りて明なる燈と現る。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。
天使首、差役、首領、寶座、主制、六翼のセラフィム、神聖なる多目のヘルワイム、智慧の器たる者、能力、及び至りて神聖なる權柄よ、我が靈に平安と大なる憐とを賜

はんことをハリストスに祈り給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

無玷なるマリヤ、凡の智慧に超えて神の母と爲りし至淨なる者よ、爾の至りて能力ある轉達を以て、我多くの罪に圍まれて狭めらるる者を痛悔の廣きに向はしめ給へ、爾は能せざる所なき主の母として、之を能すればなり。

次ぎて「穩なる光」。其後提綱、主の諸僕、夜中主の家に立つ者よ、今主を崇め讃めよ。句、爾の手を擧げ、聖所に向ひて主を崇め讃めよ。次ぎて「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。及び聯禱

第一調 主日の晩課 五五

第一調 主日の晩課 五六

次ぎて挿句に傷感の讃頌、第一調。

救世主よ、我が罪の淵は深し、我罪惡の爲に甚しく沈めらるるに因りて、ペトルに於けるが如く、神よ、我に手を授けて、我を救ひ、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

神救世主よ、我悪しき思と行とに於て定罪せられしに因りて、我に反正の意念を與へて爾に呼ばしめ給へ、仁慈なる恩主よ、我を救ひ、我を憐み給へ。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり。我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

主よ、衆聖人及び生神女の祈禱に因りて、爾の平安を我等に與へ、我等を憐み給へ、爾獨仁慈の廣き主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

天の品位の歡喜、地上に人人の堅固なる轉達、至りて潔き生神童貞女よ、爾に趨り附く我等を救ひ給へ、我等神に亞ぎて爾に憑恃を負はせたればなり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讃詞。

光榮、今も、生神女讃詞。其後聯禱、及び發放詞。



主日の晩堂課

司祭誦す、「我等の神は恒に崇め讃めらる」。誦經者、「アミン」。我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。「天の王」。其他常例の如し。

次ぎて至聖なる生神女に奉る祈禱の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の hand は、神に適ふが如く、能力にて光榮を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イズライリ人の爲に新なる深水の路を開

きたればなり。

至しじょう淨じよさいなる女なんじ宰いよ、爾がたは言かみひ難はらく神せいを孕こみ、性ちに超ものえて地しよざいの者すくを諸しゆ罪しゆより救すくふ主しゆを生うみ給たまへり。故うに爾たまに祈ゆえる、我なんじを多いくの罪われより脱おほれしめ給おほへ。

我われ無むすう數つみの罪よに因うりて憂うれい患おほ及びわざわい苗うみ害しずの海じゆんけつに沈ものめらる。純なんじ潔ちからなる者きようどうよ、爾きようどうの力ちからある嚮きようどう導きようどうと祈きようどう禱きようどうとを以もつて我われを痛つうがい悔しんせいの神へいおん聖むかなる平たま隱たまに向たまはしめ給たまへ。

光榮

吾わが生涯しやうがいの守しゆごしや護しゆごしや者いさぎよたる潔しやうしんじよき生われ神おほ女わざわいよ、我すくを多われくの苗しやうらい害くるしみより救すくひ、我われを將しやうらい來くるしみの苦くるしみより脱われれしめ給われへ、我われが感しやうらい謝くるしみの歌くるしみを爾くるしみに奉くるしみらん爲くるしみなり。

今も

第一調 主日の晩堂課 五七

第一調 主日の晩堂課 五八

造ぞうせいしゆ成おほ主しよぐざいしゆ及びわ贖かみ罪じゆんけつ主はは吾たまが神いざないの純かんなん潔あらしなる母しずよ、間われ斷われなき誘しず惑しずと患しず難しずの暴しず風しずとを鎮しずめて、我われに拯しず救しずの恩しず寵しずと潔しず淨しずとを與しずへ給しずへ。

第三歌頌

イルモス、獨ひとり人ひとの性せいの弱よわきを知しりて、憐あわれみを以もつて之これを衣きたる者ものよ、我われに上うへよりの力ちからを帯おびて、爾なんじに呼よばしめ給たまへ、人ひとを慈いつくしむ主しゆよ、爾なんじの言いひ難がたき光こうえい榮いの生いける宮みやは聖せいなり。

生しやうしんじよ神なんじ女いさぎよよ、爾すがたの潔あらわれき像しよてんしの顯あい見ひとびとは、諸すく天ほどこ使あくきには愛あすべく、人ひと人ひとには救すくを施ほどこし、悪あくき鬼あくきには畏おそるべし。我おそ等おそ信われらを以しんて之もつを尊これみ、接とうと吻せつぶんして、靈たましいを光こうしやう照たましいす。

純じゆんけつ潔ものなる者ぞうせいしやよ、造おほ成しよ者なんじ及びどうてい主ちは爾もつの童おのれ貞にくたいの血つくを以たまて己かれの肉われ體われを造われり給われへり。彼われに我われ不ふ當どうなる行おこないに因よりて朽くちたる者ものを其その言いひ難がたき慈じれん憐もつを以もつて宥なだめんこと祈いり給たまへ。

光榮

至いたりて無むてん玷ものなる者われよ、我なんじ爾いのちを生しゆごしや命おほの守やぶ護かき者え及びいの壊おわりられぬ垣のちとして獲のちて、禱おわりる、終のちの後のちにも我われが爲ために庇ひこ護おほ及びか勝ほごしやたれぬ保な護われ者かみと爲まえりて、我われを神たまの前たずさに攜われへ、我われに永えい遠えんの生いのち命いのちと光こうえい榮たまとを與たまへ給たまへ。

今も

潔いさぎよき者ものよ、爾なんじの胎ほらみ孕たねは種さんなく、産ふきゆうは不うま朽ものなり、生ひとれし者おは人せいの墜よちたる性おこを喚せいび起よす神おこなればなり、故かみに我ゆえ等われら爾なんじを實じつの生しやうしんじよ神あが女うたとして崇うため歌うたふ。

第四歌頌

イルモス、アウラクムは先せんち知めの目なんじにて爾かみ、神おんちやうの恩おほ寵おほに覆やまはるる山みを見て、イズライ

リの聖せいなる者ものが我われら等すくを救あらたひ改ためめん爲なんじに爾いより出いづるを預よげん言よげんせり。

敵てきの行おこな動あと悪ならわしし風よ習とどとに因がたりて止すすみめ難われき進あく行ひは我じよさいを悪われに引たすく。女たす宰たまよ、我たすを助たまけ給たまへ、凶きよう悪あく者しやが終おわりに至いたるまで我われを攻われ撃こうげきして、死しを以もつて我われに痛つうがい悔みちの途たを斷たざらん爲たなり。

我われ放ほう蕩とうと罪ざい過かとに我わが生いのち命ときの時ついやを費いませり、今しよよくも諸わ慾いやは我たましいが卑これらしき靈ひを此かみ等かみに引かみく。神かみを生うみし童どうていじよ貞われ女たすよ、我たまを助たまけ給たまへ。

光榮

じゆんけつ もの われ うれい こえ わ たましい ふかみ たんそく なんじ あ もの き
純潔なる者よ、我の憂の聲、我が靈の深處より嘆息して爾に揚ぐる者を聽きて、
われ ふとう もの おもい わち ならわし もつ おこな おいめ ゆるし われ あた たま
我不當の者が思念と無智なる風習とを以て行ひし罪債の赦を我に與へ給へ。

今も

せかい じよさい しょうしんじよ われ たす たま いときょうあく てき われ かみ はな あ きおく
世界の女宰生神女よ、我を助け給へ。最凶悪なる敵は我を神より離す悪しき記憶と
おもい もつ はなはだ われ なや われ す なか のこ なか
思念とを以て甚しく我を悩ます。我を棄つる母れ、遺す母れ。

第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かしし

第一調 主日の晩堂課 五九

第一調 主日の晩堂課 六〇

なんじ ちえ ひかり ただ なんじ うた もの こころ てら たま
ハリストスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

み われすくい ため そな たすけ え ゆえ なんじ ふふく なみだ とも よ しょうしんじよ
視よ、我救の爲に備はりたる佑助を獲たり。故に爾に俯伏して、涙と共に呼ぶ、生神女
われ てき や およ しょうらい きつもん のが たま
よ我を敵の矢及び將來の詰問より脱れしめ給へ。

しせい しょうしんどうていじよ なんじ われ かため なんじ われ ほまれ よるこび しゅごしや われ
至聖なる生神童貞女よ、爾は我の防固なり、爾は我の美譽と、歡喜と、守護者、我
ふせぎ かくれが か てんたつしや ゆえ なんじ ぼく すく たま
の防護と避所と勝たれぬ轉達者なり。故に爾の僕を救ひ給へ。

光榮

しじょう しょうしんじよ しょうやく けが わ ふとう たましい なんじ しんせい きとう そそぎ
至淨なる生神女よ、諸慾に汚されたる我が不當なる靈を爾の神聖なる祈祷の清麗を
もつ きよ これ なんじ すくい こうけつ ころも あた たま
以て淨めて、之に爾の救の光潔なる衣を與へ給へ。

今も

かみ はは なんじ わ いのち おい われ ため けんご かじとり われ おお
ハリストス神の母よ、爾は我が生命に於て我の爲に堅固なる舵師にして、我を多く
こうげき あらだち のが なんじ いの わ せいせい としき あらわ われ すく たま
の攻撃の騷擾より脱れしむ。爾に祈る、我が逝世の時にも現れて我を救ひ給へ。

第六歌頌

いま かぎり ふち われら かこ のが いましもの われら としよ ひつじ ごと わ
イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾
かみ なんじ たみ すく なんじ よわ もの ちから あらため
が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

よめ しょうしんじよ かみ はは なんじ て われ の われ いた ふとう もの わち
聘女ならぬ聘女、至淨なる神の母よ、爾の手を我に伸べて、我至りて不當なる者が無智
わ たましい よく もつ たくわ しょうあく ふかみ われ ひ いた たま
と我が靈の慾とを以て蓄へたる諸悪の深處より我を引き出し給へ。

いさぎよ もの た なんじ ぼく その たのみ かみ とも なんじ か ほご お もの
潔き者よ、立ちて、爾の僕、其憑恃を神と共に爾の勝たれぬ保護に負はしむる者
たす たま てき ちから え われ とら ほろぼ ため
を助け給へ、敵が力を獲て、我を執へて滅さざらん爲なり。

光榮

や もの いし お もの おこり つみ おか もの きよめ しょうしんじよ われ なんじ いの なみだ
病む者の醫師、墜つる者の興起、罪を犯す者の潔淨たる生神女よ、我爾に祈り、涙
とも ふふく なんじ よ ゆうのう よ みずか われほろぶ もの すく たま
と共に俯伏して爾に呼ぶ、有能なるに因りて親ら我込る者を救ひ給へ。

今も

いさぎよ もの われ いや たましい あわれ いそ これ きょうあくしや いた たま けだしかれ つと
潔き者よ、我の卑しき靈を憐み、急ぎて之を凶悪者より出し給へ、蓋彼は務めて、
わ おお おおたり な しょうあく よ これ ふち おと ほつ
我が多くの怠惰の爲しし諸悪に因りて、之を淵に墜さんと欲す。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

いさぎよ えていどうじよ われら なんじ しゅ いの もの え なんじ せい でん はし つ なんじ たすけ
潔き永貞童女よ、我等爾を主に捧る者として獲て、爾の聖殿に趨り附きて、爾に援助

を乞ふ。我等爾を讚美する者を悪鬼の奸計と、苛苦と、畏るべき定罪より救ひ給へ。

第七歌頌

第一調 主日の晩堂課 六一

第一調 主日の晩堂課 六二

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讚めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。惟一無玷なる者よ、爾は主宰の爲に神聖なる幕と爲りて、之を胎に孕み、之を身に於て生み給へり。故に我等を諸の慾と疾病と、憂患と、罪債より救ひ給へ、多くの權と能とを有ち給へばなり。

潔き女宰よ、我が至りて不當なる靈の堪へ難き痛を止め、我が多くの罪の濁れる浪を涸らして、眞の歡喜を我に予へ給へ、爾は我の爲に避所及び拯救なればなり。

光榮

女宰よ、我救の憑恃を悉く爾に負はせたり。蓋爾を扶助と、折られぬ柱と、堅固と、動なき基として獲て、爾に依りて國を受けんことを望む。

今も

潔き女宰よ、爾は光榮の日の曙と爲れり。爾に縁りて現れし者は衆を幽暗と、無智と、悪臭の諸罪より解き給へり。故に我爾に呼ぶ、外の暗より我を解き給へ。

第八歌頌

イルモス、イスライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讚め、歌ひて萬世に讚め揚げよ。

生神女よ、諸慾の動揺は甚しく我が靈を擾す。隱靜と平安との起原者及び賦予者を生みし潔き者よ、我を平安に治めて、隱靜なる喜と樂とに満たし給へ。

生神女よ、爾は救世主、萬有の主宰を生みて、我等の爲に救の轉達者と現れたり。故に爾に祈る、我の卑微なる靈を救に堪へさせて、正しく爾を萬世に讚頌せしめ給へ。

光榮

萬有の造成主神を言ひ難く孕みし者よ、我を朽壞と諸の誘惑より救ひて、常に呼ばしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讚め、彼を歌ひて世世に讚め揚げよ。

今も

童貞女よ、爾は萬有の造成主神を生み給へり。彼に祈りて、絶えず爾の光榮を歌ふ者の諸罪を潔めて、之に憂愁と艱難、定罪と永火よりの救を賜はんことを求め給へ。

第九歌頌

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、

第一調 主日の晩堂課 六三

第一調 主日の晩堂課 六四

今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。

純潔なる神の母よ、爾の慈憐なる懷を我が爲に啓きて、我を擾して滅さんと謀る
無形の狼の口より逃れしめ給へ。祈る、我爾の僕を憐み、辱を蒙りて歸らしむる母
れ。

純潔なる者よ、我が生涯の保護者及び堅固なる防禦と爲りて、我を多くの災禍と憂患
より脱れしめ、又我を永遠の火より救ひ給へ。 **光榮**

獨病者の醫治、獨陥りし者の提起、獨神に導く嚮導者、獨永福の代求者たる女宰
よ、我獨衆に超えて罪を犯しし者を憐み給へ。 **今も**

生神女、讚美たる女宰よ、今我の涙と共に奉る禱を受けて、我が行ひし諸罪諸悪
の赦を與へ給へ、我甚しき失望に因りて全く滅ぶればなり。

次ぎて「常に福にして」。其他常例の如し、及び發放詞。



月曜日の早課

第一の誦文の後に傷感の坐誦讚詞、第一調。

不法に於て妊まれたる我放蕩の者は敢て天の高きを仰ぐを得ず。唯爾の仁愛を待み
て呼ぶ、神よ、我を潔め、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

若し義者僅に救を得ば、我罪人は何處にか立たん。我終日の苦勞と暑とを忍ばざり
き。然れども神よ、我を第十一時の傭工に加へて、我を救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

至淨なる生神女、天には祝福せられ、地には讚榮せらるる聘女ならぬ聘女よ、慶べ。

第二の誦文の後に坐誦讚詞、第一調。

救世主よ、急ぎて父の懷を我が爲に啓き給へ、我爾の洪恩の費されぬ富を見て、放蕩
に我が生を費せり。今我の貧しくなりたる心を棄つる母れ、蓋我傷感の情を以て爾
に呼ぶ、主よ、我爾の前に罪を獲たり、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

至りて義なる審判者よ、爾の審判座は畏るべく、審判は義なり、我が行は甚悪し。

第一調 月曜日の早課 六五

第一調 月曜日の早課 六六

慈憐なる主宰よ、爾憐みて我を救ひ、苦を免れしめ、左の分より脱れしめて、爾
の右に立つに堪へさせ給へ。

次ぎて致命者讚詞。

句、神よ、爾は爾の聖所にて嚴なり。

主よ、光榮なる受難者は爾より苦の報賞たる尊き榮冠にて飾られたり、蓋瘡痕を忍
ぶを以て不法の者に勝ち、神聖なる能力を以て天より勝利を獲たり。救世主よ、彼等

の祈禱に因りて、我をも見えざる敵より脱れしめて、我を救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

至りて無玷なる者よ、我が不當なる靈を治め、其罪の多きに因りて淪滅の深處に跌
きしを憐み、畏るべき死の時にも我を罪する悪鬼と凡の苦より脱れしめ給へ。

又坐誦讃詞、第三の「カフィズマ」の誦文の時。第一調。

至りて洪恩なる主よ、我無智にして爾より離れ、常に無智の慾に役して、放蕩に吾
が生を費せり。慈憐なる父よ、諸天使の祈禱に因りて、我を蕩子の如く受けて、我
を救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

無形の軍に超ゆる少女、天の品位に勝りて獨彼等より宜しきに合ふ讃美を受くる純潔
なる者よ、諸天使と偕に爾の子に、我獨定罪せられし者が諸慾の苛虐より救はれん
ことを祈り給へ。

傷感の規程、其冠詞は、言よ、我が諸罪の汚を滌ひ給へ。イオシフ師の作。第一調。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮
を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イズライリ人の爲に新なる深水の路を開
きたればなり。

ハリストスよ、爾に祈る、我が罪の多きを爾の慈憐の多きに因りて滅して、我に反正
の念を與へ給へ、我が智慧に超ゆる爾の仁慈を讃榮せん爲なり。

神の言よ、爾は慈憐の多きに因りて、地に肉體を取りし人と現れ給へり。故に人に超
えて罪を犯しし我、今痛悔を以て爾の洪恩に俯伏する者を受け給へ。

次ぎて致命者讃詞。

讃美たる致命者よ、爾等は甘じて苦を受けしハリストスの苦難及び死に效ひて、
多種の苦難と死とを忍べり。故に常に光榮なる者よ、爾等是不死の生命を受け給へ

第一調 月曜日の早課 六七

第一調 月曜日の早課 六八

り。致命者讃詞

致命者よ、爾等は神聖なる愛の火を盛に己の衷に有ちて、火を畏れず、苦難の熱切
なる忍耐にて多神の凡の物質を焼き盡せり。

生神女讃詞

讃美たる童貞女、神の聘女よ、無形の者の品位は我等と共に爾を歌頌す、蓋爾は限ら
れぬ者を爾の腹に身を取りし者として生みて、産の前の如く童貞女に止まり給へり。

又無形軍の規程、其冠詞は、諸天使に奉る第一の歌。フェオファン師の作。第一調。

第一歌頌 同「イルモス」

主宰の寶座の前に 嚴に立つ至聖なる天使よ、父と同無原の者、其大なる議事の使者
に、我爾等を歌ふ者に言を嘘き入れんことを祈り給へ。二次。

しんげん ひかり かがみ さんじつ ともしび かがやき さと う したが おのれ うち う てんし
神元なる光の鏡、三日の燈の輝煌を、悟り得るに循ひて、己の衷に受くる天使の
ひんい かみ ちえ まず おもい お ぞうせい たま
品位を、神の智慧は先思念に置きて、造成し給へり。

生神女讃詞

しょうしんじょ かみ うえ ぐん しゅひん かざ もの こんいん あずか なんじ はら
生神女よ、神として上なる軍の首品を飾りし者は婚姻に與らざる爾の腹、セラフィ
ムより上なるものに入りて、變易なくして肉體と成り給へり。

第三歌頌

イルモス、ひとりひとりの性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力
を帯びて、爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖
なり。

ああ たましい た ゆ なんじ ぞうせいしゅ なんじ ひそか こと いっさい し もの まえ よ つうかい
嗚呼靈よ、起ちて行き、爾の造成主、爾の隠なる事を一切知る者の前に呼びて、痛悔
の果を示せ、洪恩の主が爾を憐みて、永遠の火より救はん爲なり。

ひとりじんじ しゅ われ ぜいり ごと おおれ もつ なんじ よ われ きよ きよ すく たま われ つみ
獨仁慈なる主よ、我税吏の如く畏を以て爾に呼ぶ、我を潔め、潔めて救ひ給へ、我罪
の多きに引かれ、罪惡の重きに屈められ、無量の耻に満たされたり。

致命者讃詞

まこと ちえ ちしき み ちめいしや ちえ ぐ な その ちえ
眞の智慧と知識とに満たされたる致命者はエルリンの智慧を愚と爲らしめ、其智慧
の奸惡を滅し、勇ましく苦を忍びて、宜しきに合ひて勝利の榮冠を受けて喜ぶ。

致命者讃詞

じゅなんしや せい おい ゆいいつしや い おい さんしや う みと しんせい しん もつ たしん ままい
受難者は性に於て惟一者、位に於て三者を承け認めて、神聖なる信を以て多神の迷
を滅し、燈と現れて、恩寵の光線にて衆人の心を照し給ふ。

生神女讃詞

しせい いたいさぎよ かみ よめ なんじ せいしや うち いこ もの ちち どう わげん こ およ ことば
至聖至潔なる神の聘女よ、爾は聖者の中に息ふ者、父と同無原なる子及び言、

第一調 月曜日の早課 六九

第一調 月曜日の早課 七〇

けいけん かれ さんえい もの せいしん もつ せい しゅ いさぎよ う たま
敬虔に彼を讃榮する者を聖神を以て聖にする主を潔く生み給へり。

又同「イルモス」

しんげん ひかり ただち ちか ら ゆたか これ あ その う はじめ こうみょう
神元の光に直に近づくセラフィム等は優に之に鑿かせられ、其受けたる元始の光明
にて盛に輝きて、第二の光と現る。二次。

しんじや われら しょてんし こうみょう うた ほつ きよ ちえ いさぎよ くち もつ かれら よ
信者よ、我等諸天使の光明を歌はんと欲して、清き智慧、潔き口を以て彼等に由り
て神より賜はる佑助を切に求めん、願はくは我等は其光照を受けん。

生神女讃詞

じゅんけつ どうていじょ えいざい ちえ よろ かな さと え よろこ
純潔なる童貞女よ、永在の智慧を宜しきに合ひて悟るを得たるガウリイルは欣ばし
き報信を爾に攜へて、明に爾に言を孕まんことを知らせ、爾の言ひ難き産を傳へ
たり。

第四歌頌

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾、神の恩寵に覆はるる山を見て、イズライ
リの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。

わ ふとう たましい われ なんじ あくじ おこな ぜんじ な もの だれ たと ほんぜい
吾が不当なる靈よ、我爾悪事を行ひて、善事を爲さざる者を誰にか譬へん。反正
して、爾の爲に甘じて貧しくなりたる者に呼べ、心を知る主よ、我を憐みて救ひ給
へ。

ほんぜい もの ため つうかい さだ じんじ きゆうせいしゅ わ いのち おわり さき これ われ あた
反正する者の爲に痛悔を定めし仁慈なる救世主よ、我が生の終らざる前に之を我に與
へ給へ。主宰よ、嘗て爾の足に接吻する淫婦に於けるが如く、我に傷感と歎息とを與
へ給へ。

致命者讚詞

ぞくしん みず み ちめいしや なんじ ら かみ またたき よ い みず かわ あらわ
屬神の水に盈たされたる致命者よ、爾等は神の瞬に由りて活ける水の川と現れて、
ハリストスの氣を以て迷の濁れる流を潤らし、信者の意思に飲ませたり。

致命者讚詞

しんせい ちめいしや なんじ ら いさおし おおい けだしなんじ ら ひ つるぎ ことごと はげ くるしみ
神聖なる致命者よ、爾等の勲は大なり、蓋爾等は火と劍と悉くの烈しき苦と
を忍び給へり。神の言よ、彼等の祈祷に由りて、信を以て爾を歌ふ者を至大なる永遠
の苦より脱れしめ給へ。

生神女讚詞

うま ちち よ な さき うま こ どうていじよ なんじ み と とき うち
生れざる父より世の無き先に生れたる子は、童貞女よ、爾より身を取りて、時の中
に生れたり、蓋日及び歳より上なる慈憐の主は地に生るる者の時に屬する仇を退け
んことを望み給へり。

又 同「イルモス」

ほうぎ だいいち さんしやう たてまつ ただち かみ ひかり う これ かがや およ
寶座は第一の讚頌を奉り、直に神の光を受けて此にて輝くヘルウィム及びセラフ
ィムは聖務を行ひて、今歌ふ、主よ、光榮は爾の力に歸す。二次。
せい せい や さんせい こえ もつ しんせい さんい ゆいいつしや うた しんがく
聖なるセラフィムは息めざる三聖の聲を以て神性の三位なる惟一者を歌ひて、神學

第一調 月曜日の早課 七一

第一調 月曜日の早課 七二

しじょう おうぎ あらわ じゆんせい おし つた
の至上なる奥義を顯し、醇正なる教を傳ふ。

生神女讚詞

じゆんけつ どうていじよ ばんぶつ いた うえ もの ちえ こ ち きせき おこな しゅ なんじ
純潔なる童貞女よ、萬物より至りて上なる者、智慧に超えて地に奇蹟を行ふ主は爾
の童貞の至淨なる腹に入り給へり。

第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリス
トスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

義なる主よ、我諸愆の朽壞に陥りて、爾の義なる審判を恐る。故に爾に祈る、我を義
とする善事を行はん爲に我を堅め給へ。

わ かみ ぞうせいしゅ なんじ わ こころ あらわ ひそか こと し しゅ しんばん とき なんじ
我が神造成主よ、爾は吾が心の顯れずして隠なる事を知る。主よ、審判の時、爾
が萬衆を審判する爲に來らん日に我を定罪する勿れ。

致命者讚詞

せい ほうしんしや ひ や おのれ しんせい あい も しめ ゆえ しょうらい ふく のぞ
聖なる捧神者は火に焚かれて、己の神聖なる愛の燃ゆるを示せり。故に將來の福の望
に涼しくせられて樂しめり。

致命者讚詞

ちめいしや ふくらく のぞみ かた いと いさ ひやくたい さ のし よわ になたい
致命者は福樂の望に堅められて、最勇ましく百體の割かるるを忍び、弱まざる忍耐

の筋にて悪謀者を縛れり。 **生神女讃詞**
神の聘女よ、能辯の口は爾の産の言ひ難き奇蹟を述ぶる能はず、蓋爾は悟られぬ者を生み、其手に萬物を有つ主を抱き給ふ。

又 同「イルモス」

神聖なる愛に燃ゆる主制、權柄、能力の品位は黙さざる口て以て神元なる唯一の性及び能力を歌頌す。 **二次。**
天使首、差役、首領の品位は無数の軍と偕に聖神に 宰られて、唯一の三位なる輝ける神性を尊まんことを明に教へらる。

生神女讃詞

至淨なる神の母よ、爾は凡の天使の美しきに超えて飾られたり。蓋諸天使の造成者及び主を孕みて、言ひ難く爾の血より身を取りし者を生み給へり。

第六歌頌

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱者の力と更新なればなり。
醫師なるハリストスよ、吾が心の慾を醫し給へ。我がイイススよ、傷感の涙にて我を凡の汚より滌ひ給へ、我が爾の慈憐を歌ひて崇め讃めん爲なり。
ハリストスよ、我滅亡の途に迷ひて、諸罪の隍に陥る者を返して、爾の尊き誠命

第一調 月曜日の早課 七三
第一調 月曜日の早課 七四

の迷はざる途に向はしめ給へ、我が爾を讚榮せん爲なり。

致命者讃詞

榮冠を冠れる光榮なる主の致命者實に價貴き石なる者は石に撃たれて、生命の石を諱まず、偶像の石を祭らざりき。

致命者讃詞

致命者は信の犁を以て靈を新にし、神聖なる神に因りて苦難の百倍の穂を生じて、福樂の糧を獲たり。 **生神女讃詞**
神の恩寵を蒙れる至淨なる童貞女、女の中に祝福せられたる者よ、爾は火焰の役者の火を生みて、彼等より上なる者と爲り、一切の造物に超ゆる者と現れたり。

又 同「イルモス」

人を愛する主ハリストスよ、無形の者の品位は爾が光榮の寶座の前に立ちて、絶えざる天使の聲を以て爾を尊む、爾は彼等の能力及び歌頌なればなり。 **二次。**
諸天使は測り難き華麗たる爾の顔、神聖なる爾の光明の奇異なる美麗を觀て照さる、爾は彼等の光及び歡喜なればなり。

生神女讃詞

至淨なる者よ、先に身なき言、全能なるに因りて、己の旨に循ひて萬有を造り、無形の者の軍を無より有と爲しし主は爾より身を取り給へり。

第七歌頌

イルモス、^{しょうしんじょ}生神女よ、^{われら しんじや なんじ み ぞくしん いろり な}我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、^{けだし せんぞ とうと}蓋先祖の尊まれて崇め
^ほ讚めらるる神は、^{しょうしや すく ごと か なんじ ほん}三人の少者を救ひし如く、^{おひ}斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。
^{むかし}昔ダニイルは徳を同棲者と有ちて獅を制せり嗚呼靈よ、^{とく どうせいしや たも しし せい ああ たましい これ なら つね しし ごと ほ}之に效ひ、常に獅の如く吼
えて爾を執へんと欲する者を、^{なんじ たら ほつ た}絶えず神を仰ぐを以て無効の者と爲せ。
^{しゅ われ おお いん もつ はなはだ たましい けが むじょう じれん たも}主よ、我多くの淫を以て甚しく靈を汚せり。無上なる慈憐を有つハリストスよ、我
^{とうし ごと う あわれ たま けだし われ うた せんぞ とうと かみ あが ほ}を蕩子の如く受けて憐み給へ、蓋我歌ふ、先祖の尊まるる神は崇め讚めらる。

致命者讚詞

^か勝たれぬ致命者は^{ちめいしや}ハリストスの^{ほう}法にて^{つよ}強く^{かた}堅められて、^{ふほう もの はかりごと やが ほう ため}不法者の謀を破り、法の爲
^しに死を致して歌へり、^{うた せんぞ とうと}先祖の尊まるる神よ、^{かみ なんじ あが ほ}爾は崇め讚めらる。

致命者讚詞

第一調 月曜日の早課 七五

第一調 月曜日の早課 七六

^{かみ おのれ まえ み しゅ ちめいしや せいさん ひかり たら}神を己の前に見し主の致命者は聖三の光に照されて、^{あきらか くるしみ やみ いざない きり ほん}明に苦の暗、誘惑の霧を拂
^{うた せんぞ とうと}ひて歌へり、^{かみ なんじ あが ほ}先祖の尊まるる神よ、爾は崇め讚めらる。

生神女讚詞

^{じゅんけつ もの せい ほう なんじ おい あらた}純潔なる者よ性の法は爾に於て新にせらる、^{けだしなんじ にくたい ほう こ}蓋爾は肉體の法に超えてハリストス
^{りっぽうしや う たま かれ ほう た およ せんぞ とうと かみ あが ほ}立法者を生み給へり。彼は法を立てて、凡そ先祖の尊まるる神は崇め讚めらると歌
^{もの すく たま}ふ者を救ひ給ふ。

又 同「イルモス」

^{ひかり ちち かがや むげん ひかり しゅさい なんじ ひかり てんし ぐん なんじ い かがやき}光の父より輝きし無原の光なる主宰よ、爾は光たる天使の軍を爾の入らざる輝
^{う かがみ つく たま なんじ せんぞ とうと あが ほ}を受くる鏡として造り給へり。爾は先祖の尊まれて崇め讚めらるる神なり。
^{ばんゆう しゅ なんじ じんるい しょうてんし そ あきらか これ すく けだしなんじ ことごと しんじや}萬有の主よ、爾は人類に諸天使を傍はしめて、明に之を救ふ。蓋爾は悉くの信者、
^{じゅんせい なんじ せんぞ とうと あが ほ}醇正に爾先祖の尊まれて崇め讚めらるる神を歌ふ者に彼等を傍はしめ給へり。
^{しゅさい なんじ しょうせき かみ かな しわざ した およ ちえ の あた けだしなんじ せんぞ とうと}主宰よ爾の諸奇蹟、神に適ふ作爲を舌及び智慧は述ぶる能はず。蓋爾先祖の尊まれ
^{あが ほ}て崇め讚めらるる神は天の軍の悉くの華麗を輝かし給へり。

生神女讚詞

^{いさぎよ もの さき はは ちち うま こ われら ため われら に もの な ほつ}潔き者よ、先に母なく父より生れし子は我等の爲に我等に肖たる者と爲らんと欲し
^{ちち なんじ み と たま むけい ぐん いま かれ ほうじ せんぞ とうと かみ}て、父なく爾より身を取り給へり。無形の軍は今彼に奉事し、先祖の尊まるる神と
^{あが ほ}して崇め讚む。

第八歌頌

イルモス、^{しょうしや いろり あ}イズライリの少者は爐に在りて、^{るつぽ あ ごと けいけん うるわ もつ}坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以
^{こがね あきらか かがや い しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ}て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讚め、歌ひて萬世に
^あ讚め揚げよ。
^{わ しょうざいしゅ じれん}我が贖罪主、慈憐なるハリストスよ、^{いま われ かく つみ くらやみ もろもろ いざない われ のが}今我を圍む罪の黑暗と諸の誘惑より我を脱れ
^{たま けだし われ よ しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ}しめ給へ。蓋我呼ぶ、主の悉くの造物は主を崇め讚めて、^{ばんせい ほ あ}萬世に讚め揚げよ。

ハリストスよ、爾が光榮の中に來りて、世界を審判せん時に、我をも爾の選びたる者と偕に立つに堪へさせ給へ。蓋我呼びて云ふ、主の悉くの造物は主を崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

致命者讃詞

聖なる致命者はハリストスの地に遷れり、蓋地に在りて多くの勳を立てて、天の生命を獲て歌ふ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

致命者讃詞

第一調 月曜日の早課 七七

第一調 月曜日の早課 七八

勝を獲たる致命者として爾等は朽壞の身を脱ぎて、不死の衣たるハリストスを衣て、高さ處より呼ぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

生神女讃詞

至淨なる者よ、諸預言者の聖にせられし聲は遙に爾が萬有を造りし神の母と爲らんことを預言せり。我等彼に歌ふ、主の悉くの造物は主を崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

又 同「イルモス」

三日の光に近く立ちて、其華麗の光線に照さるる天使の軍に效ひて、我等信者は歌はん、主の悉くの造物は主を崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

萬善の泉たる神元の能力は第一の光をうくる第二の光を無より有と爲し給へり。

彼等呼ぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めて、萬世に讃め揚げよ。

第一の智慧たる造成主は己に近づく無形なる天使の諸の智慧を造り給へり。彼等呼ぶ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

生神女讃詞

純潔なる童貞女よ、爾は言に超えて世の先に父より生れし子、言ひ難く身を取りし者を我等の爲に生み給へり。我等彼に呼ぶ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、生神女よ燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。

恒忍の主よ、我ハナネヤの婦の如く爾に呼ぶ、言よ、我を憐み給へ、我悪鬼の攻撃に惱まされ、無知にして不法の事を行ひ、神を畏るる寅畏を感じざる靈を有てばなり。

主よ、吾が靈の足を爾の誠命の石に立て、耻づるなくして我を仆さんと謀る蛇を仆して、我を其悪業より救ひ給へ、爾は仁慈にして憐深き主なればなり。

致命者讃詞

致命者よ、爾等は既に誘惑の浪たつ水と劇しき痛苦の颶風とを度り、上なる國の港に至りて、神聖なる平隱を楽しむ。

致命者讃詞

致命者よ、爾等は暮れざる光を見るに堪ふる者と爲りて、冢子の教會の中に天使の會と共に喜ぶ。彼等と偕に生命を施す主に我等の爲に祈り給へ。

生神女讃詞

第一調 月曜日の早課 七九

第一調 月曜日の早課 八〇

尊き聖物の櫃たる生神童貞女よ、爾は萬物を保つ者を保ち、萬衆に糧を賜ふ者に乳を哺ます。智慧に超ゆる爾の秘密は大にして畏るべき哉。故に我等信を以て爾を讃揚す。

又 同「イルモス」

救世主よ、爾は言ひ難き爾の光榮に與る者として、諸の無形の智慧を造り給へり。今も彼等に困りて爾の民、信と愛とを以て爾に趨り附く者を護り給へ、我等が絶えず爾主宰を崇め讃めん爲なり。

全能者よ、願はくは爾は平安の天使、爾の群を保護し、神智の教を護り、爾の力を以て悉くの異端を滅す者を遣し給はん、爾は平安と愛との起原者なればなり。全く甘美たる歌頌せらるる主宰よ、天の甘美なる光照を爾の諸教會に敷きて、之を衆人の嗣業と爲し給へ、我等が絶えず爾救世主を崇め讃めん爲なり。

生神女讃詞

至淨なる者よ、天使の品位は今黙さずして爾の産を尊み、班列に立ちて彼を仰ぎ、樂に満てられて、絶えず爾生神女を崇め讃む。

次ぎて「常に福にして」。小聯禱及び光耀歌。次に常例の聖詠。

挿句に傷感の讃頌、第一調。

靈よ、他の世界は爾を待つ、審判者は爾の隠なる事と甚しき諸罪とを顯さん、故に此等に耽る勿れ、速に審判者に向ひて呼べ、神よ、我を潔め、我を救ひ給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

我が救世主よ、罪惡の怠惰にて縛られたる我を棄つる勿れ。我が思を痛悔の爲に起し、我を爾の葡萄園の善き工人と顯し、我に第十一時の報と大なる憐とを與へ給へ。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讃詞

人人皆來りて、歌頌と屬神の詩賦とを以てハリストスの受難者を尊まん。彼等は世界の燈、教の傳道師、信者の爲に醫治を注ぐ所の常に流るる泉なり。ハリストス我が神よ、彼等の祈禱に由りて爾の世界に平安、我等の靈に大なる憐を與へ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

せい しゅうぐん せい いっさい ぞうぶつ とうと しょうしんじよ せかい じよさい ききうせいしゆ う
聖なる衆軍より聖にして、一切の造物より尊き生神女、世界の女宰、救世主を生み
し者よ、仁慈なるに因りて、爾の祈禱を以て我等を數へ難き罪及び災禍より救ひ給
へ。

次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讚詞、及び
聯禱、次ぎて發放詞。第一時課、及び最後の發放詞。



月曜日の眞福詞、第一調。

てき しょくもつ もつ らくえん ひ いた じゅうじか もつ とうぞく そのうち
敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中
に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時我を憶ひ給へと呼ばばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

ハリストス神よ、爾の慈憐に因りて我に傷感の泉、我を無數の惡の諸の汚より潔
むる者を與へて、恩主よ、我を爾の國に與る者と爲し給へ。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時
は、爾等福なり。

ハリストスよ、我等爾の天使の品位を祈禱の中に爾に進む。至仁なる主として、彼等
に因りて我等を救ひ、宥め、我等が知ると知らずして行ひし諸罪を意ふ勿れ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讚詞

せい もの なんじら おのれ ち ながれ わけい おぼ いま きせき ながれ そそ
聖なる者よ、爾等は己の血の流にて無形のファラオンを溺らせり、今は奇蹟の流を注
ぎて、諸病の淵を涸らす。故に爾等讚美せらる。

光榮

われら しんじや みな ちち ふくはい こ さんえい しせい しん かしょう よ い しせい さんしや
我等信者皆父に伏拜し、子を讚榮し、至聖神を歌頌し、呼びて云はん、至聖なる三者
よ、我等衆を救ひ給へ。 **今も、生神女讚詞。**

えいきゆう ひかり う じゅんけつ もの つね あくき しんがい くら わ たましい ひかり みちび
永久の光を生みし純潔なる者よ、常に惡鬼の侵害に昏まさるる吾が靈を光に導き
て、爾の轉達を以て將來の火を免れしめ給へ。



月曜日の晩課

「主よ爾に籲ぶ」に讚頌、第一調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

の爾の前に敬まん爲なり。
主よ、我生涯を耻づるなく放蕩に費しし不當の者は、蕩子の如く、傷感の情を以て呼ぶ、天の父よ、我罪を獲たり、我を潔めて救ひ、恣に爾より離れて、結果なき行に由りて今貧しくなりたる我を退くる勿れ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストスよ、爾は富める者にして、貧しくなりて、人人を不死と光照とに富まし給へり。故に世上の逸樂に因りて貧しくなりたる我を徳に富まし、貧しきラザリと共になして、富める者の苦、及び我の前に在る地獄より脱れしめ給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、我甚しく悪事に富める者と爲り、食を嗜み、存命の時に善を受けて、地獄に定罪せられたり。我が飢うる智慧を、ラザリの如く、顧みずして、爾に適ふ神聖なる行の門の前に投ぜり。主よ、我を憐み給へ。

又、前驅の讚頌。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

奇異なる預言者、ハリストスの授洗者及び前驅よ、爾に祈る、悪業に因りて涸れたる吾が心に、爾の祈祷を以て、常に流るる涙の川を注がしめ給へ、我多病の者が爾に救はれて、爾を大なる者と爲しし主を崇め讃めん爲なり。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

福たる預言者よ、我吾が生の悉くの憑恃を爾に負はしめて、爾に捧る、世界の無数の罪を任ふハリストス イイススに洗を授けしイオアンよ、我が心を潔めて、我を救はんことを彼に祈り給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

恩寵の睿智なる傳道師、萬民に悔改を傳へし神聖なる前驅よ、我が至りて不當なる昏まされし靈に悔改に居りて、常に主の旨を行ふを得しめ給へ、我が信と愛とを以て爾を讚榮せん爲なり。

光榮、今も、生神女讚詞。

童貞女よ、全世界の罪を任ふ羔、至大なる前驅が衆人に傳へし者に、審判の時に於て我不當の者に山羊の分を脱れしめて、我を右の綿羊に加へんことを前驅と共に祈り給へ。

次ぎて「隠なる光」。本日の提綱。聯祷。其後「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。

挿句に痛悔の讚頌、第一調。

救世主よ、我が罪の淵は深し、我罪惡の爲に甚しく沈めらるるに因りて、ペトルに於けるが如く、神よ、我に手を授けて、我を救ひ、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐れむを俟つ。

神救世主よ、我悪しき思と行とに於て定罪せられしに因りて、我に反正の意念を與へて、爾に呼ばしめ給へ、仁慈なる恩主よ、我を救ひ、我を憐み給へ。

句、主よ、我等を憐み我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり。我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讚詞

聖なる者よ、爾等が裁判の時に顯しし承認は悪鬼の力を辱かしめ、人人を迷より解きたり。故に首の斬らるるに、爾等呼べり、人を愛する主よ、願はくは吾が靈の祭は爾の前に嘉く納れらるる者と爲らん、我等爾を愛して、暫時の生命を重ぜざればなり。

光榮、今も、生神女讚詞。

讚美たる童貞女よ、モイセイは預言者の目にて燃ゆれども焚かれぬ棘の中に爾に於ける奥義を觀たり、神性の火は爾潔き者の胎を焚かざりしに因る。故に我等は爾、我が神の母に、世界の爲に平安と大なる憐とを求めんことを祈る。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、及び發放詞。



月曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イスライリを救ひし神に歌はん、彼光榮を顯したればなり

至聖至潔なる童貞女、天使等の莊飾、聖神の器、無原なる父の無玷の聘女、神の言の母よ、慶べ。

生神女・女宰よ、爾は王族より出でたる女、身にて王なる神を生みて、彼と共に王たる者にして女王なり。 光榮

第一調 月曜日の晩堂課 八七

第一調 月曜日の晩堂課 八八

純潔なるマリヤよ、聖詠者ダウイドは爾の産を歌ひ、イサイヤは爾の至淨なる胎を歌頌し、「ハリストティアニン」等は爾が生みし者を讚榮す。

今も

童貞女・神の聘女よ、教會は純正なる教と神聖なる諸事とを以て爾の産を傳へ、爾の子の人體を形る聖像に伏拜す。

第三歌頌

イルモス、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり。此の石の上にハリストスは異邦より贖ひし教會を堅め給へり。

至淨なるマリヤよ、爾は童貞の光榮を有ち、聖神の恩寵に妝はれて、生神女と現れたり。新にして最深き奥密なる哉。如何にして爾は身にて神を生みて、童貞女に止まる。

主よ、爾が爲しし作爲は孰か能く述べん、蓋彼の爾が苦の中に子を生まんと詛ひし者、爾は斯の者の子と爲り給へり。故に陥りし女の性は生神女に依りて爾神の爲に悦ぶ。

光榮

至淨なるマリヤ、唯一の生神女よ、世界の諸罪の暴風は爾に依りて鎮まる。故に我等信者は爾を救の港と有ち、讚美して、爾の偉大なるを歌ふ。

今も

潔き母よ、昔諸預言者は歌ひて云へり、爾童貞女は期届りて、期に限られぬ者、聖三者の一位なるハリストス我が神言を言に超えて生まん。教會は彼の聖像を尊む。

第四歌頌

イルモス、預言者アウワクムよ、爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼べり、年の邇づく時爾は識られん、期の届る時爾は顯れん、主よ、光榮は爾の力に歸す。

神聖なる預言者の七倍明なる鏡は多方に爾を像れり。我等は表徴の實體になりたるを見て、爾が實に生神女たるを信ず。

潔き童貞女よ、我等は宜しきに合ひて爾實に神の母たる者を尊みて讚榮し、律法と預言者との中に傳へられし爾に適ふ歌を奉る、恩寵を蒙れる者、慶べよ、主は爾と偕にす。

光榮

視よ、アウワクムの見たる神聖なる山、諸徳の繁りたる蔭なる生神女は世界に輝けり。我等昔犯罪に由りて神に離れたる者は彼に由りて亦近づくを得たり。

今も

第一調 月曜日の晩堂課 八九

第一調 月曜日の晩堂課 九〇

潔き童貞女よ、爾を讚美するに勝へたる舌は福なり。醇正の教と敬虔の行とを以て爾の子が人體を取りしことを讚榮する民は福なり。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、我等は夜より寤めて、爾我等の爲に貧しくなり、身にて十字架と死とを忍びし主を讚め歌ふ。

生神女・女宰よ、焚かれぬ棘は爾に於ける秘密をモイセイに顯せり、蓋神性の火は

爾の物性の胎を焚かざりき。
潔き生神女よ、我等爾神の言の母を歌頌し、言の禮物を爾に捧げて、爾が嘉して之を受けんことを求む。 **光榮**

至淨なる生神女よ、汚れたる口よりする讚美を斥くる勿れ、地上には宜しきに合ひて爾を歌頌するを能する者無ければなり。 **今も**

童貞女より生れし者は性に於て一位なり、無形の神、又甘じて我等の爲に人人に肖たる者と爲りし人なり。

第六歌頌

イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ、世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。

童貞女よ、預言者は爾を見て、屬神の七光の燈、明に爾の内に輝ける聖神の行動を示す者と爲す。

童貞女よ、爾は實に生を施す木と現れて、爾の果にて詭譎なる蛇を殺し、人人の爲に生命たるハリストス神を生み給へり。 **光榮**

我が神の潔き母よ、汚れたる口より爾に捧ぐる讚美は美しからず、然れども我が靈の熱望を見て、之を受け給へ。 **今も**

童貞女よ、不法の者は正教の會が爾の聖像に接吻するを見て、苦き不信に擾さる。

主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

潔き者よ、我が不當なる生命を治めよ。至りて無玷なる者よ、多くの罪に因りて淪滅の深處に跌きし靈を憐み、死の時にも我を讒する悪鬼と畏るべき詰問より脱れしめ給へ。

第七歌頌

第一調 月曜日の晩堂課 九一

第一調 月曜日の晩堂課 九二

イルモス、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、其時三人口を一にして、歌頌祝讚して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。

神の聘女よ、爾は諸徳に飾られ、童貞の光榮と尊貴とに妝はるる者と顯れしに、爾の華麗は實に最美しく輝けり、之を慕ふ主は爾を己の爲に神聖なる母と選び給へり。

潔き者よ、爾は實に直き杖、最尊き杖と顯れたり、故に神の言の果を生じ給へり。

アアロンの杖は遠くより明に斯の奇蹟を像れり。 **光榮**

潔き者よ、我多くの肉體の慾にて體と言と靈とを汚しし者は如何にして爾が諸徳の華麗を歌はん、我惑ひて畏る。然れども爾親ら爾の祈禱を以て我が爲に佑助と爲り給へ。 **今も**

ハリストスよ、我爾が身を取りしことの合成を尊みて、之を形る聖像に神に適ふが如く伏拜す。蓋爾は永遠の神にして、童貞女に藉りて實體の人と爲り、全き二性を

たも たま
有ち給へり。

第八歌頌

イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、少者よ、讚榮し、人人よ、崇めて萬世に讚め揚げよ。
世界が淪滅より救はれし神の聖事は歌はるべし、昔陥りし者は皆起きよ、マリヤが拯救なるハリストスを生みたればなり。
至淨なる神の母よ、我等爾を歌ふ、孰か爾實に慈憐にして我が靈の憑恃なる者を讚榮せざらん。故に至聖なる者よ、我が禱を納れ給へ。

光榮

信者よ、今歌ひて祝へ、天使等及び人人よ、共に讚榮せよ、蓋悪魔は仆れ、失望は消えたり、マリヤが我等の爲に拯救の憑恃を生みたればなり。

今も

瞽者よ、神性を像る勿れ、語る勿れ、其單一、無形にして、見るべからざる者なればなり。然れども我其身の像を形りて、之に伏拜し、信を以て主を生みし童貞女を讚榮す。

第九歌頌

イルモス、光を放つ雲、萬有の主が雨の天より羊の毛に降るが如く降り、始なき者が身を取りて我等の爲に人と爲りし所以の者を、我等皆我が神の潔き母として崇

第一調 月曜日の晩堂課 九三
第一調 月曜日の晩堂課 九四

ほ
め讚む。

至聖なるマリヤ、萬物の大なる奇蹟よ、慶べ、ダウイドの女、主の母よ、慶べ、ガウリイルの歌よ、慶べ、地に在る衆罪人の爲に避所と堅固と援助なる者よ、慶べ。奇異なるイオアキム及び神聖なるアンナは聖神に感ぜられて歌頌し、感謝の歌を奉る、其生みし女マリヤが地に於て造物主の母と爲るを見ればなり。神よ、彼の祈禱に因りて我等衆を救ひ給へ。

光榮

嗚呼至聖なる童貞女、至上の神の母よ、爾の産は地上に罪ある卑微の者の爲に救なり。我等爾に因りて信を以て救はれたり、爾今も世世の生命にも我を救ひ給ふ。

今も

我身を取りたれども變易せざりし言を知る、故に醇正に彼を二性一位に歌頌して、彼を眞の神及び人と傳へて、歌を奉る。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文。其他常例の如し、及び發放詞。

~~~~~

火曜日の早課

六段の聖詠の後、「主は神なり」に、若し之あらば、聖人の讚詞。光榮、今も、生神女讚詞、讚詞の調に依る。若しなくば、本日の讚詞。光榮、今も、其生神女讚詞。

第一の誦文の後に痛悔の坐誦讚詞、第一調。

不法に於て妊まれたる我放蕩の者は敢て天の高きを仰ぐを得ず。唯爾の仁愛を恃みて呼ぶ、神よ、我罪人を潔め、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我て責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。若し義者僅に救を得ば、我終日の苦勞と暑とを忍ばざりし罪人は何處にか立たん。然れども神よ、我を第十一時の傭工に加へて、我を救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神女よ、天に於て母なく生れし子を、爾は地に於て智慧と言とに超えて父なく生み給へり。彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

第二の誦文の後に坐誦讚詞、第一調。

救世主よ、急ぎて父の懐を我が爲に啓き給へ、我爾の洪恩の費されぬ富を見て、放蕩に我が生を費せり。主よ、今我の貧しくなりたる心を棄つる母れ、蓋我傷感の情を以て爾に呼ぶ、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、我を救ひ給へ。

第一調 火曜日の早課 九五

第一調 火曜日の早課 九六

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。義人等の敵はイオフの諸徳の富を見て、穿ちて盗まんと悪謀を運らしたれども、肉體の柱を折きて、屬神の財寶を盗まざりき、無玷の者の靈が武器を執れるを見たればなり、然れども我を裸體にして虜にせり。救世主よ、急ぎて、終に至らざる先に我を詭譎の者より援けて、我を救ひ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

聖なる者よ、爾等は善き軍士として、同心に信じて、苛虐者の威嚇を畏れざりき。尊き十字架を任ひ、熱心を抱きてハリストスに來り、馳すべき程を盡して、天より勝利を獲たり。光榮は爾等を堅めし者に歸す、光榮は爾等に榮冠を冠らせし者に歸す、光榮は爾等を以て衆に醫治を施す者に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

主よ、爾はニネフイヤ人の失望に先だちて、報ぜられたる懲戒を過し、爾の慈憐は怒に勝てり。今は爾の民爾の群を憐みて、權能の手を以て我等の敵を仆し、生神女の祈祷に由りて爾の慈憐を我等に垂れ給へ。

第三の誦文の後に坐誦讚詞、第一調。

慈憐の多きイイススよ、我が意念は盜賊に執はれ、智慧は盜まれ、吾が靈は諸罪に傷つけられたり、我醫されずして臥す。求む、前驅の祈祷に因りて爾の慈憐を注ぎて、吾が靈の甚しき傷を醫し給へ。

昔イオルダンの流を以て全世界の潔淨たる者に洗を授けしイオアンよ、多くの罪に溺

れたる我を引き上げて、諸の汚より洗ひ、嘉く納れらるる轉達者として、常に我が爲に人を愛する主に祈り給へ。

### 光榮、今も、生神女讃詞。

聘女ならぬ潔き生神童貞女、獨信者の轉達者及び併懨なる少女よ、凡そ爾に憑恃を負はしむる者を諸の菑害と憂愁と劇しき誘惑より脱れしめて、爾の神聖なる祈禱を以て我等の靈を救ひ給へ。

痛悔の規程、其冠詞は、ハリストスよ、我が言の禱を受け給へ。イオシフの作。第一調。

### 第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イズライリを救ひし神に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

主よ、我罪の諸慾に役せらるる者は爾に趨り附く、我を此等より解きて、熱切に爾の慈憐を讚榮する者と爲し給へ。

第一調 火曜日の早課 九七

第一調 火曜日の早課 九八

我不當の者は罪の戈に傷つけられて死せり、敵は我が臥すを見て楽しむ。死者を復活せしむる主よ、我を活かして救ひ給へ。

### 致命者讃詞

受難者の會は、肉體を衣て其苦にて朽壞を滅ししハリストスを己の百體を以て榮して、自も榮せられたり。

### 致命者讃詞

正教の柱及び垣たる光榮なる致命者よ、爾等は敵の攻撃に動かされずして止まれり。神よ、彼等の祈禱に由りて、我等衆を憐み給へ。

### 生神女讃詞

童貞女よ、爾は火の状の寶座として造物主を乗せ、生ける宮、麗しき殿として變易と混淆との外に我等と均しくなりし王を容れ給へり。

又聖なる大預言者前驅イオアンの規程、其冠詞は、福たる者よ、爾に呼ぶ者の聲を聞き給へ。第一調。

### 第一歌頌、同「イルモス」

福たる前驅よ、爾は言の聲たりき、故に爾に向ふ我等の聲を納れて爾の轉達を以て我等を諸惡より脱れしめ給へ。

爾は朝の如く、日の如く輝きて、四極を照し、凶惡なる諸神を昏ます。故に我等の靈より昏黒を掃ひ給へ。

福たる前驅よ、爾は來り給ふ吾が生命を死者に傳へたり。故に我を殺す諸慾を殺して、我を神聖なる光に與る者と爲し給へ。

### 生神女讃詞

時に限られぬ神を時屆りて人體を取りし者として生み給ひし獨至淨なる女幸よ、

わ いた ふとう たましい ときごと しょよく いや たま  
我が至りて不當なる 靈の時毎の諸慾を醫し給へ。

### 第三歌頌

イルモス、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり。此の石の上にハリストスは異邦より贖ひし教會を堅め給へり。

わが弱きを衣たる慈憐の多きハリストス救世主よ、私の弱きを見、我が靈の甚しき醜貌を見、我が聲を聆き納れて、其醜きを美しきに變じ給へ。

とうしを救ひし仁慈なるイイススよ、我獨爾の救の法を犯し、無知にして凡の罪を遂げ、意念にて爾より離れて疏ぜられし者を救ひ給へ。

### 致命者讃詞

せいなる者よ、無形者の品位は實に爾等の勇毅に驚きたり。如何にして爾等は裁判座の前に至榮に苦を受け、肉體にて仆れて、神聖なる力を以て無形の敵を悉く

第一調 火曜日の早課 九九

第一調 火曜日の早課 一〇〇

たお 仆したる。 致命者讃詞

じゆなんしや 受難者よ、爾等は猶傷の血に赤く染められ、猶血の滴に濕されて、喜びて不死の王たる主の前に榮冠を冠れる勝利者として立ち給へり。

### 生神女讃詞

かみ 神の恩寵を蒙れる者よ、父が萬世の先に生みし子を、爾は夫の誘を識らずして生み、養育者たる主を養ひ給へり。至榮なる奇蹟、新しき秘密なる哉。故に衆信者の靈は爾を讃榮す。

### 又 同「イルモス」

たい 胎の荒れて生まざる者より神妙に生れし前驅よ、爾は神聖なる行の繁き果を結ぶ者と現れたり。故に全く結果なき吾が心を善き果を結ぶ者と爲し給へ、我が中心より常に爾を讃榮せん爲なり。

ふく 福たる者よ、悪しき意念にて弱りたる吾が心を天の糧にて養ひて之を堅め、我に務めて洪恩なる神の望を行はしめ給へ、我が中心より常に爾を讃榮せん爲なり。

ふく 福たる預言者よ、爾は世界の罪を任ふ羔を傳へたり。祈る、我が罪の重き任を軽くして、諸慾の汚を潔むる痛悔を我に與へ給へ。

### 生神女讃詞

しょうしんじょ 生神女よ、人體を取りて生れし言は爾に依りて全きアダムを衣給へり。女宰よ、彼に我等を諸の患難と永遠の火より脱れしめんことを祈り給へ。

### 第四歌頌

イルモス、預言者アウクムよ、爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼べり、年の邇づく時爾は識られん期の届る時爾は顯れん、主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスよ、爾が我に賜ひし富を我不當の事を爲して悪しく費し、裸體と爲りて耻

ぶべき 行を衣たり。故に爾に呼ぶ、神聖なる恩寵を以て我に傷感の情を與へて、初始の衣にて我を飾り給へ。

ハリストスよ、我無知にして降り、甚しく陥り、劇しく病みて地に臥す。陥りし者を起す主よ、我を起して、我が心を救を施す痛悔の石に堅め給へ。

### 致命者讃詞

受難者よ、爾等は十字架に擧げられしハリストスに效ひて、傷を受けて共に楽しみ、血の雲にて拜偶像の雲を散らして、醫治の流を注ぎ給ふ。

### 致命者讃詞

第一調 火曜日の早課 一〇一

第一調 火曜日の早課 一〇二

神聖なる受難者よ、爾等は救の望に導かれて、苦難の海、苦痛の浪を渉り、上なる港に着きて、凡の樂に満てられたり。

### 生神女讃詞

童貞女・神の母よ、天使の軍は、如何にして見えざる主が爾に藉りて我等と侘しく容姿の見ゆるものと爲りたるを見て、驚きたり。信を以て爾を讃揚する衆に救を得しめんことを彼に祈り給へ。

### 又 同「イルモス」

肉體の裸なるを以て己の爲に救の衣を織りたる主の授洗者よ、祈る、凡の善事に裸なりし我に義と樂との衣を衣せ給へ。

甘味の川たるイイスス、生命を賜ふ主をイオルダンの流の中に沈めし前驅よ、慾の火に焚かる我に救の滴を注ぎ給へ、我が職として爾を讃榮せん爲なり。

天使に非ず、中保者に非ず、主親ら地に來りて、我等を救ひ給へり。福たる者よ、爾は彼の爲に直き途を備へたり、今我が爲に天國に往かしむる途を示さんことを彼に祈り給へ。

### 生神女讃詞

童貞女よ、爾は悟り難く爾の内に入り給ひし神の聖にせられし殿と顯れたり。彼に我等を罪の汚より潔めんことを祈り給へ、我等が聖神の殿及び居處と爲らん爲なり。

### 第五歌頌

イルモス、神の子よ、爾の平安を我等に與へ給へ、蓋我等は爾の外に他の神を識らず、爾の名を唱ふ、爾は生死者の神なればなり。

洪恩にして恒忍なる主宰よ、我多くの甚しき罪に満てられたり。定罪せられし我ち憐みて、爾の顔より退くる勿れ。

ハリストスよ、爾は歎息せし税吏を義と爲せり。我も彼に效ひて、膺を拊ちて爾に呼ぶ、獨慈憐にして洪恩なる主よ、我を潔め給へ。

### 致命者讃詞

主よ、爾の聖者は迷はざる光體と現れて、迷の深き夜を掃ひて、全地を奇蹟の光明にて照せり。

### 致命者讃詞

主宰よ、最尊き石たる致命者は爾生命の石を愛して、苦を以て仆れて、凡の迷の

たても の たお  
建造を 仕したり。 **生神女讃詞**  
じゅんけつ もの なんじ せいさんしゃ いつ ふたつ むねひとつ い たも もの う たま かれ  
純潔なる者よ、爾は聖三者の一を二の旨一の位を有つ者として生み給へり。彼に  
われら しゅう すく  
我等衆の救はれんことを切に祈り給へ。

又 同「イルモス」

第一調 火曜日早課 一〇三

第一調 火曜日早課 一〇四

いにしえ ごと の すま しふく ぜんく つみ よ あれの な  
古のイリヤの如く野に住ひしハリストスの至福なる前驅よ、罪に由りて荒野と爲り  
わ こころ きよ とく はな ひら もの な たま  
たる吾が心を浄めて、徳の華を開く者と爲し給へ。  
しんじゃ ため うご はしら やぶ られぬ垣たるハリストスの大なる前驅よ、詭譎の者の  
あくぼう うご わ おもい うごき もの な たま  
悪謀に動かさるる我が思念を動なき者と爲し給へ。  
ふく もの ちじょう かがや ひかり ひかり なんじ こえ もつ ししゃ ふくいん くらやみ  
福たる者よ、地上に輝きし光よりする光は爾の聲を以て死者に福音せられしに、幽暗  
お もの てら われはなはだ くら もの てら たま  
に居る者は照されたり。我甚しく味まされし者をも照し給へ。

生神女讃詞

しじょう もの なんじいさぎよ どうていじよ によおう つた ゆえ なんじ いの われ てん  
至浄なる者よ、ダウイドは爾潔き童貞女を女王として傳ふ。故に爾に祈る、我を天  
くに よつぎ な たま わ なんじ さんび ため  
の國の嗣と爲し給へ、我が爾を讃美せん爲なり。

第六歌頌

われ よげんしゃ なら よ じんじ もの わ いのち ほろび たす  
イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ、  
せかい きゅうしゅ われ こうえい なんじ き よ もの すく たま  
世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。  
わ ふとう たましい ほね お われおびただ いつらく おもみ かが ひとりしゅうじん たすけ  
我が不當なる靈の骨は折れたり、我夥しき逸樂の重量にて偃まれり。獨衆人の援助  
われ たす たま  
なるハリストスよ、我を助け給へ。  
われよく あらし う しよざい うみ おちい なんじ よ ぜんのう なんじ ゆうりよく  
我慾の暴風に打たれ、諸罪の海に陥りて、爾に呼ぶ、全能のハリストスよ、爾の有力  
て もつ われ ひ あ すく たま  
なる手を以て我を引き上げて救ひ給へ。

致命者讃詞

せい じゅなんしゃ たいすう むけい てき せんまん ふ てんじょう れいち しゃ せんまん くわ  
聖なる受難者の大數は無形の敵の千萬を踏みて、天上の靈智者の千萬に加へられた  
り。

致命者讃詞

じゅなんしゃ なんじら むしん ふち か かんび かわ しぎょう え もと わ あふ  
受難者よ、爾等は無神の淵を涸らして、甘美の川を嗣業として獲たり。求む、我が溢  
つみ か たま  
れたる罪を涸らし給へ。

生神女讃詞

せいせい まく いつらく けが わ ふとう たましい せい われ しんせい  
成聖の幕たるマリヤよ、逸樂に汚れたる我が不當なる靈を聖にして、我を神聖なる  
こうえい あずか もの な たま  
光榮に與る者と爲し給へ。

又 同「イルモス」

ちじょう かいがい つた じゅせんしゃ われ ひかり いた つた かいがい みち しめ われ まい ふち  
地上に悔改を傳へし授洗者よ、我に光に至らしむる悔改の途を示して、我を迷の淵  
のが たま  
より脱れしめ給へ。

ふち かわ ながれ しず ぜんく でんどうし わ よく ふち か われ なみだ いずみ  
淵を川の流に沈めしハリストスの前驅傳道師よ、我が慾の淵を涸らして、我に涙の泉  
あた たま  
を與へ給へ。

しゅ ぜんく たましい しよびょう からだ しよよく どせい かんなん およ もろもろ いざない うれい われ すく たま  
主の前驅よ、靈の諸病、體の諸慾、度生の艱難、及び諸の誘惑と憂愁より我を救ひ給  
へ。

生神女讃詞

いさぎよ もの われなんじかみ ほは おんな うち さんび もの せつ いの われ す なか われ あわれ  
潔き者よ、我爾神の母、女の中に讚美たる者に切に祈る、我を棄つる勿れ、我を憐  
みて、凡の害より全うして護り給へ。

第一調 火曜日の早課 一〇五

第一調 火曜日の早課 一〇六

### 第七歌頌

イルモス、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、  
其時三人口を一にして、歌頌祝讚して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。  
イオフは忍耐に慣れて、堅く建てられたる柱の如く、凶悪者の悉くの攻撃に動かさ  
れずして止まれり。嗚呼靈よ、常に彼に效ひて、聊も艱難の中に倦むこと勿れ。  
肉體の逸樂に勝たれて、我智なる者は無智と爲れり。言を以て淫婦を救ひし神の言  
よ、我不當の者を救ひ給へ、我が爾の仁慈を歌ひて崇め讃めん爲なり。

### 致命者讚詞

身を以て我等の爲に苦を受けし主の血にて贖はれたる睿智なる致命者よ、爾等は  
熱心を抱きて甘じて彼の爲に己の血を流せり。故に絶えず彼と偕に王たり。

### 致命者讚詞

睿智者よ、爾等は聖にせられし苦難を建つるを以てハリストス、唯一の王及び主の喜  
びて息ひ給ふ宮と現れたり。彼は爾等を天の居處に至らしめ給へり。

### 生神女讚詞

讚美たる者よ、ハリストスは萬族の中より獨爾を、至尊至潔なる者として、己の居處  
に選びて爾より日の如く輝きて、全地を照し給へり。

### 又 同「イルモス」

舊新約の至りて善良にして光榮なる轉達者たる授洗者よ、萬有を新にする主イイス  
スの前に轉達して、我罪に由りて全く古びたる者を新にせんことを祈り給へ。  
ハリストスの前驅及び授洗者よ、爾は地上に悔改の法を立つる者と現れたり。爾の  
祈禱を以て衆を堅めて、之を行はしめ給へ、我等が常に行へる無数の悪より救はれ  
ん爲なり。  
睿智者よ、爾は節制を盡し、狭き路を過りて、見神の光れる恩寵にて盛に輝かされ  
たり。ハリストスに禱りて、我等にも之を樂しまんことを得しめ給へ。  
我等信者は聖三者の唯一の神性、無原なる父と、子と、聖神、唯一の王たる性、唯一  
の權柄、唯一の元始、及び我等を活かす生命を讚榮す。

### 生神女讚詞

至淨なる者よ、禱を神に奉りて、彼が我等の愆尤及び無数の罪を顧みずして、我等  
を永遠の苦しむる火より脱れしめんことを求め給へ。

第一調 火曜日の早課 一〇七

第一調 火曜日の早課 一〇八

### 第八歌頌

イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、少者よ、讚榮し、人人よ、崇めて萬世に讚め揚げよ。詭譎なる蛇は悪しき勧誘を以て我を悉くの徳より裸に爲せり。救世主よ、今我を其悪業より裸にして、諸徳の衣にて飾り給へ。人類を審判する爲に來らんとする義なる審判者よ、畏るべき時に於て我を定罪して地獄の火に遣す勿れ、我を憐みて救ひ給へ。

### 致命者讚詞

至りて讚美たる主の受難者よ、患難も、苦痛も、劍も、火も、慈憐に由りて爾等を愛せしハリストスを愛する愛より敢て爾等を離す能はざりき。

### 致命者讚詞

勇敢なる受難者よ、爾等は肉體を以て肉體なき敵と戦ひて、之を斃せり。今は肉體なき者と共に樂しみて、我が靈と體との苦を醫し給ふ。

### 生神女讚詞

神の母よ、萬物を植うる者は爾を花として度生の溪に得て、爾の中に入りて、諸徳と潔淨との芳しき香を以て今我等を薫らせ給ふ。

### 又 同「イルモス」

主よ、我獨地に生れし衆人に超えて罪を犯し、獨爾の法の違反者と爲れり。祈る、前驅に由りて我を憐みて救ひ給へ。大なる議事の天使を四極に傳ふる授洗イオアンよ、爾は習俗を以て天使と均しき者と現れたり。故に我等歌を以て爾を萬世に讚榮す。ハリストスの首を水の中に沈めし福たる者よ、爾は首を非義に斬られたり。祈る、爾の祈祷を以て我等衆を堅めて、實に有害なる詭譎の者の首を踏ましめ給へ。

### 生神女讚詞

獨人類の轉達者なる童貞女よ、我を甚しき諸罪、及び火の苦と、外の幽暗と、切齒と、死せざる蟲より脱れしめ給へ。

### 第九歌頌

イルモス、光を放つ雲、萬有の主が雨の天より羊の毛に降るが如く降り、始なき者が身を取りて我等の爲に人と爲りし所以の者を、我等皆我が神の潔き母として崇め讚む。

視よ、痛悔と潔き行との時なり、視よ、晝なり。我が靈よ、光の行を爲せ、愆の暗より逃れ、悪しき煩悶の眠を退けよ、神聖なる光に與る者と爲らん爲なり。

第一調 火曜日の早課 一〇九

第一調 火曜日の早課 一一〇

我税吏の如く歎息し、淫婦の如く泣き、盜賊の如く爾に呼ぶ、洪恩なる主よ、我を念ひ給へ、蕩子の如く籲ぶ、我罪を獲たり、ハナネヤの婦の如く爾に俯伏して求む、慈憐なるハリストスよ、我を棄つる勿れ。

致命者讃詞

忍耐して體を傷及び殘忍なる死に付しし主の至りて讚美たる受難者よ、爾等は實に體の苦及び靈の痛の醫師と現れたり。故に常に讚美せらる。

致命者讃詞

ハリストスの睿智なる受難者の忍耐は日の光よりも盛に輝けり。彼等は恩寵を以て幽暗の魁を滅し、無神の夜を散じ、信者の心を照し給へり。

生神女讃詞

生神童貞女よ、爾の聖なる腹より輝きて、地の極を照しし言の光明なる光線を以て、逸樂の暗と諸慾の怠惰とに因りて味まされし吾が靈を照し給へ、我が信を以て爾を歌頌せん爲なり。

又 同「イルモス」

視よ、度生の暗に在る者に輝ける燈、視よ、衆人に春を報ずる聲の美しき燕、ハリストスの大なる前驅、舊新約の中保者なり。願はくは我等は彼の祈禱に因りて常に護られん。

前驅よ、多くの罪を有てる我は爾新娶者の友を今彼の前に祈禱者として進めて、爾に呼ぶ、至福なる者よ、我に債の赦を予へ、怠惰に由りて全く滅えたる吾が靈の燈を燃し給へ。

前驅よ、無形の天使と偕に、尊き使徒と偕に聖なる受難者と偕に、又預言者と偕に絶えず至仁なる神に祈りて、我等常に爾を慈憐なる轉達者として有つ者に永遠の福を獲しめんことを求め給へ。

美しき燕、貴き鶯、大好き鳩、野を愛する鳩、主の授洗者、野の植物よ、荒野と爲りて實を結ばざる吾が靈を善の實を繁く結ぶ者と爲し給へ。

生神女讃詞

神の恩寵を蒙れる者よ、爾はヘルワームの寶座の如く、萬有を載する者を載せ、我等を養ふ者を養ふ。潔き者よ、絶えず彼に祈りて、爾の牧群が常に地震、疫病、外攻、及び諸の患難より救はれんことを求め給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に痛悔の讃頌、第一調。

靈よ、他の世界は爾を待つ、審判者は爾の隠なる事と甚しき諸罪とを顯さ

第一調 火曜日の早課 一一一

第一調 火曜日の早課 一一二

ん。故に此等に耽る勿れ、速に審判者に向ひて呼べ、神よ、我を潔め、我を救ひ給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

我が救世主よ、罪悪の怠惰にて縛られたる我を棄つる勿れ。我が思を痛悔の爲に起し、我を爾の葡萄園の善き工人と顯し、我に第十一時の報と大なる憐とを與へ給へ。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

致命者讃詞

大なる王の此の軍士等は苛虐者の命に逆ひ、勇毅にして苦を輕じ、一切の迷を踐みて、宜しきに合ひて榮冠を冠れり。今救世主に我等の靈の爲に平安と大なる憐とを求む。

光榮、今も、生神女讃詞。

我諸罪を以て淫婦と蕩子とに勝り、盜賊と税吏とニネワイヤ人とに超えたり。嗚呼、我如何にせん、我不當の者は如何に苦を脱れん。潔き者よ、爾に俯伏す、爾の子が彼等を救ひし如く、爾の憐を以て我を宥め給へ。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。讃詞、聯禱、及び發放詞。次に第一時課、常例の聖詠、其他、及び最後の發放詞。



火曜日の眞福詞、第一調。

敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。神よ、我日日に罪を行ひ、爾の戒を犯す者を正しきに反して、苦より脱れしめ給へ、我が爾人を愛する主の言ひ難き爾憐を讃榮せん爲なり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

神の前驅よ、爾は光れる雲より言ひ難く我等に輝きし暮れざる光に先だつ燈臺と現れたり。常に彼に我等の靈を憐みて救はんことを祈り給へ。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讃詞

第一調 火曜日の眞福詞 一一三

第一調 火曜日の晩課 一一四

讃美たる致命者よ、爾等は種種の苦を忍びて、天上の福を受くるに勝ふる者と爲り給へり。故に常に衆人より讃頌せらる。

光榮

我等皆三位に於て唯一の截られざる神性を知る、父と、子と、生活の神、始なく、混淆

なく、世に永在する唯一の神なり。

今も

永貞童女よ、爾は産の前の如く、産の後に潔き者として護られたり、身にて神を生み  
たればなり。至浄なる者よ、祈る、彼に我等を靈と體との苦より救はんことを求  
め給へ。



火曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十字架の讃頌、第一調。

句、主よ若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾  
の前に敬まん爲なり。

ハリストス神よ、爾は人として十字架に釘せられて、人の性を神成し、悪の張本た  
る蛇を殺し、慈憐の主として、詛と爲りて、我等を木に縁る詛より釋きたり。爾は衆  
に降福と大なる憐とを賜はん爲に來給へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

洪恩なる主宰よ、爾は一切の尊貴より最高き者にして、甘じて耻辱を受け、木に釘  
せられて耻づべき死を忍び給へり。之に因りて人類は不死を獲、初始の生命を受け  
たり、爾全能者が身にて死したればなり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

最尊き十字架、衆信者の潔浄、諸王の權柄よ、爾に伏拜して、ハリストスを讃榮す  
る衆人を聖にせよ。主は言ひ難き慈憐に由りて、爾の上に至浄なる手を伸べて、地  
の四極を一に集め給へり。

又、生神女の讃頌、第一調

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼  
はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

潔き母よ、爾は己の子及び神の十字架の側に立ちて、其恒忍を觀て、哭きて云へ  
り、甘愛なる子よ、哀しい哉、神の言よ、何ぞ非義に此の苦を受くる、人類を救

第一調 火曜日の晩課 一一五

第一調 火曜日の晩課 一一六

はん爲なり。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

夫に與らざる聘女よ、爾は十字架の側に立ちて、苦に傷つけられて呼べり、吾が子、  
神の言よ、爾を生みし我を子なき者と爲す勿れ、父と同永在なる獨一子よ、我を獨遺  
す母れ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

言よ、爾が不義の定に因りて十字架に釘せらるるに、童貞女は哭きて痛ましく呼べり、我が爾を生みし時、聊も苦を覚えざりき、如何ぞ、今苦を受くる。哀しい哉、人を愛する主よ、我爾が十字架に擧げられしを觀るに忍びず。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

潔き母よ、爾は昔爾の子及び主宰が十字架に手を伸べ、脅の戈にて刺さるるを見る時、號泣して呼べり、哀しい哉、人人を苦より釋き給ふ仁愛の主よ、如何ぞ苦を受くる。

次ぎて「隱なる光」。本日の提綱。「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」、及び聯禱。

挿句に十字架の讚頌、第一調。

十字架は髑髏の處に樹てられて、我等の爲に不死の花を發けり、救世主の脅より常に流るる泉に因りてなり。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

救世主の尊き十字架は我等の爲に壞られぬ垣なり、我等皆彼を恃みて救はるればなり。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讚詞

嗚呼聖なる者よ、爾等の貿易は善なる哉、蓋血を與へて、天の者を嗣ぎ、暫時苦しみて、永遠に楽しむ。實に爾等の貿易は善なり、朽壞の者を棄てて、不朽の者を受けたればなり。今諸天使と偕に祝ひて、絶えず一體の聖三者を歌ふ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

無玷なる童貞女は羔が十字架に擧げられしを見て、哭きて呼べり、我が甘愛なる子よ、何ぞ是れ新にして至榮なる顯現や、如何ぞ手に萬有を有つ者は身にて木に釘せらるる。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讚詞、

第一調 火曜日の晩課 一一七

第一調 火曜日の晩堂課 一一八

及び發放詞。



火曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イスライリ人の爲に新なる深水の路を開きたればなり。

純潔なる少女よ、天の軍にも悟られぬ者は爾の身より身を取りて、初始の犯罪に因りて朽ちたる身を新にし給へり。

信者よ、言に超えて神の言の母と爲りし者を歌を以て讚美せん。蓋斯の至りて無玷なる童貞女は地上の者の爲に莊飾と顯れ、凡そ罪を行ふ者の爲に轉達者と爲り給へり。

### 光榮

母・永貞童女よ、爾は天よりも廣き者と顯れたり、萬有の造成主を容れたればなり。故に我爾に呼ぶ、神の恩寵を蒙れる者よ、我を凡そ死を致す狭き事より援け給へ。

### 今も

潔き者よ、患難の浪に打たる我等に援助を與へ、我等の悪敵の高慢を墜し、敬虔に爾を讚榮する衆に救を施し給へ。

### 第三歌頌

イルモス、獨人の性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力を帯びて、爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。

充滿の者は我等の爲に虚しくせられ、始なき者は、至りて無玷なる童貞女よ、爾より始を受け、見えざる者は見られ、萬有を養ふ者は乳にて養はる、人人を新にせんと謀り給へばなり。

婚姻に與らざる童貞女よ、我等の苦痛を醫し給へ、爾は醫を施す主、恩寵を以て我等に生に入る門を示しし者を生みたればなり、彼に爾の諸僕を憐みて救はんことを絶えず祈り給へ。

### 光榮

至聖にして讚美たる童貞女、獨性に超えて人の性を神成せし純潔なる者よ、爾より生れし者に我等に諸罪の赦と永遠の歡喜とを賜はんことを祈り給へ。

第一調 火曜日の晩堂課 一一九

第一調 火曜日の晩堂課 一二〇

### 今も

至淨なる者よ、我怠慢に生を費して、爾に俯伏す。爾が常に神に捧ぐる祈禱を以て我が智慧を起して、痛悔の光照を以て我全く味まされし者を照し給へ、我が信と愛とを以て爾を讚榮せん爲なり。

### 第四歌頌

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾神の恩寵に覆はるる山を見て、イスライリの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。

潔き者よ、我等爾を言の神聖なる宮として知る。彼は身にて爾の中に入りて、慾に由りて朽ちたる我等を新にし給へり。故に我等爾神の母を尊みて爾より生れし者

を讚榮す。

童貞女よ、身を取り給ふ言は爾の腹に入りて、先に人の性の中に入りたる詛を遠ざけ、己の神聖なる體合を以て神に適ふが如く之を神成し給へり。故に我等爾を歌頌す。

光榮

純潔なる者よ、アダムは朽つる果を嘗めし時より死に服せり、今は爾の産に由りて生かされて、樂園の居處に入れらる。故に我等職として爾を歌頌す。

今も

潔き者よ、爾は不死の泉たるハリストス神を生みて、死の流を停めたり。神の恩寵を蒙れる者よ、彼に我が靈を殺しし諸愆を醫して、我を救はんことを祈り給へ。

第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリストスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

至りて無玷なる者よ、入らざる日は爾の腹より輝き出でて、全く黒暗を散じ、神を識る知識を以て地を照せり。故に我等醇正に爾を歌頌す。

至淨なる童貞女よ、我等天使の聲を以て爾に呼ぶ、慶べよ。蓋爾は大なる議事の天使、父と同無原の者、人を救はん爲に肉體と成りし言を生み給へり。

光榮

潔き者よ、主は爾の腹に入りて、敬虔に彼を信ずる者を敵の權より救ひ給へり。故に我等皆大なる聲にて爾至淨なる者を歌頌す。

今も

純潔なる者よ、主宰は我を衣て、爾より出でて、朽ちたる性を神成し給へり。神の母よ、彼に我を凡の罪より裸にせんことを祈り給へ。

第一調 火曜日の晩堂課 一二一

第一調 火曜日の晩堂課 一二二

第六歌頌

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

純潔なる者よ、爾は種なく神を胎内に孕みて、神妙なる産の後に童貞女に止まれり。故に至淨なる者よ、我等爾に因りて詛より脱れし者は歌を以て爾を讚榮す。

至りて無玷なる者よ、爾はイアコフの見し梯、樹蔭繁き山、神聖なる光の光明の雲、獨神の過りし門、女の中に祝福せられし者なり。

光榮

婚姻に與らざる童貞女よ、爾は天然の法の外に實性の神の言、我等の痛傷を醫す者を生み給へり。彼に我等衆を救はんことを切に祈り給へ。

今も

至聖至榮至潔なる者よ、我諸罪に由りて病める我が靈を捧げて、爾に呼ぶ、爾の轉達

を以て我を醫して救ひ給へ、我が爾の保護を歌ひて崇め讃めん爲なり。

主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

至淨なる者よ、爾の轉達を有ち、爾の祈祷にて艱難より救はれ、爾の子の十字架にて何處にも護られて、我等皆職として敬虔に爾を崇め讃む。

第七歌頌

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。至淨至潔なる者よ、律法の影と、神言を宣ぶる先知者の觀察とは明に爾の種なき産を預言せり。我等之を歌ひて、先祖の崇め讃めらるる神を尊む。神の恩寵を蒙れる潔き者よ、爾は衆信者を照し、悪の夜を退くる東旭を生み給へり。故に我等先祖の崇め讃めらるる神を尊む。

光榮

純潔なる者よ、昔焚かれぬ棘は爾の腹を象れり、蓋神性の火は聊も爾を焚かざりき。故に爾に祈る、潔き者よ、滅えざる火より我を救ひ給へ、我が黙さずして爾の偉大なるを歌はん爲なり。

今も

神の母、信者の援助、罪を犯す者の潔淨、萬善の賦予者よ、我泣きて爾に來り、俯伏

第一調 火曜日の晩堂課 一二三

第一調 火曜日の晩堂課 一二四

して我が諸罪の赦を求むる者を慈憐を以て受け給へ。

第八歌頌

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

童貞女よ、律法の預象と觀察とは明に爾潔き主の母を預言せり。我等今事の應へるを見て、同心に爾を歌ひて萬世に崇め讃む。

純潔なる者よ、爾は比倫なく神妙なる華麗にて飾られたり、蓋神の言、信を以て彼を萬世に讃頌する衆の心を神聖なる美麗にて妝ふ者を生み給へり。

光榮

純潔なる者よ、諸預言者は聖なる聲を以て遠くより爾が主宰神の母と爲らんことを述べたり。我等皆彼に呼ぶ、悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて彼を世世に讃め揚げよ。

今も

童貞女よ、爾は美しき者、至りて善なる者にして、並なく美しく、限なく善なるハリストスを潔く生み給へり。我等皆彼に呼ぶ、悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて彼を世世に讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。童貞女よ、先に定罪せられし地上の者の性は、爾が性に超ゆる神聖なる産に因りて不死を獲、曩の美しきを受けて、欣ばしき歌を以て同に爾を歌ふ。尊き成聖の匱たる生神童貞女よ、爾は萬有を載する者を載せ、萬衆に糧を予ふる者を乳にて養ふ。智慧に超ゆる爾の秘密は大にして畏るべき哉。故に我等皆爾を崇め讃む。

光榮

至淨なる者よ、我怠慢の暗に臥す者に今光を輝かして、我を味ます諸慾の意念を拂ひ、深き平安を我が靈の内に入れ給へ、我が爾純潔なる者を常に讃榮せん爲なり。

今も

純潔なる者よ、我公平なる審判、知らざる所なき審判者を畏る、諸慾に耽り、怠惰に生を耗して、無数の罪を犯したればなり、生神女よ、我を憐みて救ひ給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文、「天に在す」の後に讃詞。其他常例の如し、及び發放詞。



第一調 火曜日の晩堂課 一二五  
第一調 水曜日の早課 一二六

水曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讃詞、第一調。

ハリストスよ、爾十字架に釘せられしに、暴虐は滅び、敵の力は踏まれたり、天使に非ず、人に非ずして、主よ、爾親ら我等を救ひ給ひしに因る。光榮は爾に歸す。句、主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。人を愛する主よ、我等爾の十字架の木に伏拜す。蓋爾は、萬衆の生命よ、其上に釘せられて、信を以て爾に就きし盜賊の爲に樂園を啓き、爾を承け認めて、主よ、我を憶ひ給へと呼ぶ者を福樂に勝へさせ給へり。救世主よ、彼の如く我等をも受け給へ、我等衆罪を犯せり、爾の慈憐に因りて我等を棄つる勿れと呼べばなり。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

恒忍なる言よ、牝羊は羔たる爾が十字架に盜賊と共に釘せられて、戈にて脅を刺さるるを見て、母として呼びて云へり、我がイイススよ、斯の驚くべく畏るべき秘密、言ひ難く行はるる者は何ぞ、像り難き神よ、如何ぞ墓に隠るる。吾が甘愛なる子よ、爾を生みし我を遣つる母れ。

第二の「カフィズマ」の後に坐誦讃詞、第一調。

主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、我が皇帝に敵に勝たしめ、爾の十字架にて爾の住處を守り給へ。

句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

十字架の武器は昔敬虔なるコンスタンティン帝に、戦の時に敵に對して、信に由る勝たれぬ勝と顯れたり。仇敵の軍は之に慄く、此れ信者の爲には救、パウエルの爲には誇と爲れり。

句、神よ爾は爾の聖所に於て嚴なり。

### 致命者讃詞

人を愛する主よ、祈る、聖なる者が爾の爲に受けし痛傷に由りて、我等の悉くの痛傷を醫し給へ。

### 光榮、今も、十字架生神女讃詞。

至淨なる者よ、爾の轉達を有ち、爾の祈祷にて艱難より救はれ、爾の子の十字架にて何處にも護られて、我等皆職として敬虔に爾を崇め讃む。

### 第三の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

言よ、日は爾光榮の日が大慈憐に由りて、甘じて十字架の木に身にて懸けられし

第一調 水曜日の早課 一二七

第一調 水曜日の早課 一二八

を靚る時、狂妄に忍びずして晦みたり。祈る、イイススよ、我が味まされし靈を爾の近づき難き光を以て照して、我を救ひ給へ。

洪恩なる主よ、爾は十字架の上にて手を伸べて、爾より遠く在りし異邦民を集め給へり、爾の多くの仁慈を讚榮せん爲なり。祈る、爾の嗣業を眷みて、我等と戦ふ者を爾の尊き十字架にて斃し給へ。

### 光榮、今も、十字架生神女讃詞。

無玷なる牝羊は羔及び牧者が木に懸けられて死せしを見て、哭きて言ひ、母として呼べり、吾が子、至仁なる神よ、如何にして我言に超ゆる爾の謙卑と自由なる苦とを忍ばん。

尊貴にして生命を施す十字架の規程、其冠詞は、我苦を受けし主宰の十字架に由りて救はる。イオシフの作。第一調。

### 第一歌頌

イルモス、イズライリは苦しき奴隷より脱れて、渉られぬ處を陸の如くに過れり。敵の溺るるを見て、恩主たる神、高き臂を以て奇蹟を行ふ者に歌を奉る、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスよ、爾は十字架に擧げられて、陥りし人を己と偕に擧げ、悉くの敵の力を墜し給へり。故に言よ、我爾苦を受けて、我を諸の苦より救ひし者の苦を歌ふ。

神聖なる行爲の栽培者よ、爾光榮の主にして、人に光榮を冠らせし者は、棘を冠らせられたり、荆棘を生ずる我等の性を善き果を結ぶ者と爲さん爲なり。

### 致命者讃詞

ほう ため くるしみ う せいしゃ しせい かい せい ち ながれ もつ いっさい ぞうぶつ せい  
法の爲に 苦を受けし聖者の至聖なる會は、聖なる血の流を以て一切の造物を聖にし、  
あくき ささ けがら まつり かみ ちち よ ほろぼ  
悪鬼に捧ぐる汚はしき祭を神父に因りて滅せり。

### 致命者讃詞

しせい ちめいしゃ くなん くも なんじ ら にんたい いさおし かく せえ なんじ ら ひ こうせん  
至聖なる致命者よ、苦難の雲は爾等の忍耐の勳功を隠さざりき。故に爾等は日の光線  
よりも盛に顯れて、明に救の光を輝かせり。

### 生神女讃詞

しじょう もの なんじ ほこ おのれ こ さ み とき つるぎ なんじ たましい つらぬ  
至淨なる者よ、爾が戈にて己の子の刺さるるを見る時、劍は爾の靈を貫けり、  
こ しんじや ため らくえん い せいにゆう きん つるぎ しりぞ もの さ  
此れ信者の爲に樂園に入る聖人を禁ずる劍を退くる者が刺されたればなり。

又、至聖なる生神女の規程、第一調。

### 第一歌頌

第一調 水曜日の早課 一二九

第一調 水曜日の早課 一三〇

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮  
あらわ その ぜんのう よ てき ほろぼ じん ため あらた ふかみ みち ひら  
を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イズライリ人の爲に新なる深水の路を開  
きたればなり。

つみ けがれ あら さ いづみ う じゅんけつ もの われ たましい なみだ ながれ あた わ いのち  
罪の汚を洗ひ去る泉を生みし純潔なる者よ、我に靈の涙の流を與へて、我が生を  
つうかい むか たま  
痛悔に向はしめ給へ。

いさぎよ もの なんじ 身 と かみ う ぞうぶつ いと たか もの な てき われ なんじ いの  
潔き者よ、爾は身を取る神を生みて、造物より最高き者と爲れり。敵に我爾に祈る、  
しよく だろ われ おこ むよく しんせい たかみ のぼ たま  
諸慾の泥より我を起して、無慾の神聖なる高處に升せ給へ。

いさぎよ もの いの しんぱん ひ わ ため じれん もの あらわ たま しじょう じよさい なんじ  
潔き者よ、祈る、審判の日に我が爲に慈憐なる者と顯れ給へ。至淨なる女宰よ、爾  
おおい した はし つ われ おそ ひだり かた た はなはだ くるしみ のが たま  
の庇蔭の下に趨り附く我を畏るべき左の方に立つことと甚しき苦より脱れしめ給  
へ。

しじょう しょうしんじよ つみ くらやみ おお おちい われ おこ けがら おこない せん  
至淨なる生神女よ、罪の黒暗に蔽はれて陥りし我を起して、汚はしき行を洗ふべ  
なみだ あめ われ あた たま われら ひりなんじ ほごしゃ たも  
き涙の雨を我に與へ給へ、我等獨爾を保護者と有てばなり。

### 第三歌頌

イルモス、死すべき者は己の智慧と富とを以て誇るべからず、主を信ずる信を以て誇  
ただ しかみ よ つね うた しゅさい なんじ いましめ いし われ かた  
りて、正しくハリストス神に呼びて、常に歌ふべし、主宰よ、爾の誠の石に我を固  
たま  
め給へ。

わ しょうしんじよ ふほう もの なんじはじめ て もつ い がた ひと つく もの て あし うが  
我がイイススよ、不法の者は爾始に手を以て言ひ難く人を造りし者の手と足とを穿  
ただなんじ かみ くるしみ もつ しゅう もろもろ くるしみおよ きゅうかい と たま  
てり。唯爾は、ハリストス神よ、苦を以て衆を諸の苦及び朽壞より釋き給へり。  
つきおよ ひ とど もつ よ じゅうじか うえ み くるしみ う しゅさい その  
月及び日は停まるべしとイイスス呼びて、十字架の上身に苦を受けし主宰、其  
くるしみ こうたい くら もの かたど これ よ くらやみ きょうあく かしら はず  
苦にて光體を晦ます者を像れり。此に因りて幽闇の凶悪なる魁は辱かしめられたり。

### 致命者讃詞

こうえい ちめいしゃ いさ いたみ しの きず つよ へび きず  
光榮なる致命者は勇ましく苦痛を忍び、傷つけられて、強く蛇ワエリアルに傷つけた  
ゆえ かみ しき よ つね わ たましい いたみ いや たま  
り。故に神の指塵に因りて、恒に吾が靈の痛傷を醫し給ふ。

### 致命者讃詞

致命者よ、爾等は苦と勇敢とを以て悪鬼の宮と寺とを壊ち、恩寵を以て己の爲に  
至榮にして父と、子と、聖神との居處なる殿を建て給へり。

### 生神女讃詞

潔き童貞女よ、爾は人の子より美しき者が苦の時に姿容もなく威嚴もなきを見て、  
痛ましく呼びて云へり、哀しい哉、衆人を苦より救はんと欲する子よ、如何ぞ苦  
を受くる。

又

第一調 水曜日の早課 一三一

第一調 水曜日の早課 一三二

イルモス、獨人の性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力  
を帯びて爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖な  
り。

萬有の王たる主の殿と爲りし至淨なる者よ、靈を滅す盜賊の巢と爲りし我を其苦惱  
より引き出して、神聖なる神の潔き居處と現し給へ。二次。

生神女、仁慈の隱なる海たるハリストス我が神を生みし讚美たる童貞女よ、祈る、我  
に涙の雨を遣して、我が悪しき行の流を涸らし給へ。

神の恩寵を蒙れる者よ、我等の爲に堅固と動かざる柱、盾と勝たれぬ武器、無形の敵  
の隊を我等より退くる者と爲り給へ、我等信と愛とを以て爾至淨なる生神女を尊め  
ばなり。

### 第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、昔アウワクムは爾の奇妙なる風聲ち聞きて、懼れて呼べ  
り、神は南より來り、聖なる者は樹蔭繁き山より來りて、其膏つけられし者を救は  
ん。主よ、光榮は爾の力に歸す。

ハリストスよ、爾は痛傷と瘡痕とを忍びて、我が心の瘡痕を醫し、苦き膽を嘗めて、  
逸樂の甘味の害を除き、木の上に釘せられて、古の詛を滅し給へり。

恒忍なる主よ、爾は十字架に擧げられて、爾より遠く離れたる異邦民を近づかしめ、  
中保者として中間に立ち、地の中に耻づべき苦を忍びて、我等を父と和睦せしめ給  
へり。

### 致命者讃詞

神福たる者よ、爾等の血の海に無形のファラオンは其悉くの軍と共に陥りて溺れ  
たり。故に爾等は救はれて歡喜を以て許約の地に來りて、天の國民と爲れり。

### 致命者讃詞

福たる者はハリストスの苦に感激して、其尊き身にて諸の苦を受くるに勝ふる者  
と爲れり。故に彼等を歌ひて、常に讚め揚ぐる者の靈と體との慾を絶ち給ふ。

### 生神女讃詞

ハリストスよ、爾を生みし者は不義なる屠殺を見て、哭きて爾に呼べり、義なる子、  
昔違反に因りて定罪せられて、朽壞に陥りし者を義とせんと欲する主よ、如何にし

て非義に定罪せられたる。

又

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾、神の恩寵に覆はるる山を見て、イズライ  
リの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。  
仁慈なる者よ、我悪鬼の誘惑にて強く神の誠より引き離さるる者を棄つる勿れ。

第一調 水曜日の早課 一三三

第一調 水曜日の早課 一三四

祈る、至淨なる者よ、爾の慈憐に趨り附く我を憐みて、其誘惑に悩まされざる者と  
爲し給へ。二次。

獨慈憐なるハリストス神よ、爾を生みし者の祈祷に因りて、爾を頼む者を憐み、宥  
め、爾の誠の光に導きて、永遠の生命を得しめ給へ。

至淨なる者よ、祈る、我寝ねて死し、失望の柩に臥し、我が罪の鐵柙にて縛られた  
る者を、爾の眠らざる祈祷を以て起して、痛悔に向はしめ給へ。

第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、我等信を以て爾を歌ふ者の心に爾の入らざる光を輝か  
して、智慧に超ゆる平安を我等に與へ給へ、我等が爾の光に由りて無知の夜より日  
に趨りて、爾人を愛する主を讚榮せん爲なり。

救世主よ、日は爾地を水の上に懸けし者が裸にして木に懸かれるを觀て、光より裸  
になり、磐は十字架が磐の上に立てられしに感じて、畏懼に因りて裂け、基は震へ  
り。

恒忍なる主よ、爾は木に擧げられ、釘にて打ち着けられて、指は血に塗れ、戈にて肋  
を刺されて、アダムの傷、其肋骨に聽きて、之を造りし主に背きしに由りて獲たる者  
を醫し給へり。致命者讚詞

致命者の大數は樂園と顯れて、其中に生命の樹たるハリストスを有てり。彼等はハ  
リストスの爲に勇ましく耻づべき死を忍びて、食を以て原祖を殺しし蛇を神聖なる力  
にて殺せり。致命者讚詞

ハリストスの受難者よ、爾等は血の滴を以て無神の淵を涸らし、奇蹟の神聖なる流  
にて靈と體との諸慾の流を塞ぐ。故に宜しきに合ひて讚美せらる。

生神女讚詞

無玷なる者はハリストスが甘じて木に擧げられしを觀て、驚きて、哭きて呼べり、吾  
が子及び神よ、我産の時に苦を免れたり、今不法の者より爾が非義に釘せらるる  
を觀て、痛く苦しむ。

又

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリス  
トスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

至淨なる者よ、多くの罪の河は我を衝きて、吾が靈の家を倒せり。列祖の改易なる

しょうしんじょ われ なんじ ぼく おこ たま  
生神女よ、我爾の僕を起し給へ。二次。

じょさい われ ふとう もの しょよく ぬま おちい おお つみ あらし おぼ もの て さず  
女宰よ、我不當の者、諸慾の沼に陥りて、多くの罪の暴風に溺らざる者に手を授  
け、我を引き上げて痛悔の港に向はしめ給へ。

第一調 水曜日の早課 一三五

第一調 水曜日の早課 一三六

いの なんじ きとう もつ われ たましい けがれ きよめ たま われ からだ しょびよう いや われ かく  
祈る、爾の祈祷を以て我に靈の汚の潔淨を賜ひ、我を體の諸病より醫し、我を圍  
める甚しき煩悶より援け給へ。

### 第六歌頌

イルモス、われ ぜんしん むりよう よく かく しょあく ふち おちい いの かみ さき  
イルモス、我全身無量の慾に圍まれて諸悪の淵に陥れり。祈る、神よ、曩にイオナ  
を救ひし如く、我を淪滅より引き上げて、信に由りて我に無慾を賜へ、我が讚美の聲  
と眞實の神とを以て爾を祭らん爲なり。

ひと あい しゅ て うえ あ とき なんじ き うえ て の きょうあくしや ゆうがい  
人を愛する主よ、モイセイは手を上に挙げし時、爾木の上に手を伸べて、凶悪者の有害  
なる權を滅しし者の苦を像れり。故に我等爾を贖罪者及び主なりと識りて、崇め歌  
ふ。

なんじ き あ し しの われら ころ もの ころ なんじ て ぞうぶつ  
ハリストスよ、爾木にに挙げられ死を忍びて、我等を殺しし者を殺し、爾の手の造物  
を活かし給へり。戈にて脅を刺されて、爾二の旨を有つ者として歌頌せらるる主は  
赦罪の二の川を流し給へり。

### 致命者讚詞

せい もの なんじら し しゅ まえ どうと なんじら おのれ どうと くるしみ しゅ さんえい きょうあく  
聖なる者よ、爾等の死は主の前に尊し、爾等は己の尊き苦にて主を讚榮し、凶悪  
なるワエリアル、苛虐を盡して爾等衆を倒さんと謀りし者を辱かしめたり。

### 致命者讚詞

えいち もの なんじら たましい まった おのれ ことごと くるしみ わた まった じんせい き しゅ  
睿智なる者よ、爾等は靈を全くして己を悉くの苦に付して、全き人性を衣たる主  
の爾等に賜ふ援助を得たり。故に百體寸斷せられ、火に擲たれて樂しめり。

### 生神女讚詞

しじょう もの なんじ じゅうじか てい み よ こ み ところ おどろ あらわれ  
至淨なる者は爾が十字架に釘せられしを見て呼べり、子よ、見る所の驚くべき顯見  
は何ぞ、病者の苦を醫すハリストスよ、如何にして斯くの如き苦を忍ぶ、諸敵は  
爾恩主に其受けたる恩寵の爲に何をか報いたる。

### 又

イルモス、いま かぎり ふち われら かく のが もの われら としよ ひつじ ごと わ  
イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾  
が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

しじょう もの なんじ たね たい うま もの ほこ もつ わ つみ かきつけ やぶ なんじ しんせい  
至淨なる者よ、爾の種なき胎より生れし者の戈を以て我が罪の書券を破り、爾の神聖  
なる庇蔭に趨り附く我を選ばれたる者の書に録さるるに勝ふる者と爲し給へ。二次。

なんじ う もの きとう よ なんじ しょぼく きよ ひとり じんじ しゅ  
ハリストスよ、爾を生みし者の祈祷に因りて、爾の諸僕を潔め、獨仁慈なる主とし  
て諸罪の赦を降し給へ、爾は凡そ爾を頼む者の救主及び贖罪主なればなり。

いのち たま しゅ う しじょう どうていじよ われ しょよく ころ もの いま なんじ きとう もつ  
生命を賜ふ主を生みし至淨なる童貞女よ、我諸慾に殺されし者を今爾の祈祷を以て

第一調 水曜日の早課 一三七

生かして、悪敵に勝つ者と顯し給へ、我等は獨爾を神の前に我等を助くる者として有てばなり。

第七歌頌

イルモス、昔敬虔に由りて明に聖なる者と現れし少者は、婚筵の宮を過るが如く、爐の堪へ難き焰を涉り、聲を合せて歌を歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

我がイイススよ、我敵の奴隷と爲りし者を釋かんと欲して、爾は主宰にして奴隷より打撃を受け、十字架に釘せられて、我を救ひて歌はしむ、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

仁慈なる主よ、爾釘せられしに、萬物は震ひ、爾戈にて刺されしに、敵は全體に傷を受け、傷つけられしアダムは愈えて呼べり、我が先祖の神は崇め讃めらる。

致命者讃詞

十字架にて衛らるる受難者の光榮なる軍は恩寵を以て敵の隊を滅し、勝利の榮冠を受けて呼べり、我が先祖の神は崇め讃めらる。

致命者讃詞

火よりも至りて強き熱心を獲たる受難者よ、爾等は火に投ぜられて、焚かれずして、拜偶像の教を焚きて呼べり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

生神女讃詞

童貞女よ、爾の産は至榮にして萬世を生み、十字架に擧げられて、陥りし者を偕に擧げ、天の居住者と爲して呼ばしむ、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

又

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。

至淨なる者よ、生命の泉を生みし者として、生を施す手を以て我が死せし靈を起して、我を心の傷感を以て呼ぶに勝ふる者と爲し給へ、先祖の尊まるる神よ、爾は崇め讃めらる。二次。

世世の先なる神は甘じて爾の潔き血より新なるアダムとして生れ給へり。彼に今我古びたる者を新にせんことを祈り給へ、蓋我呼ぶ、我が先祖の尊まるる神よ、爾は崇め讃めらる。

生神女讃詞

敵は慾の道を以て來りて、無慙に我が卑微なる靈を執へんと欲す。至淨なる者よ、其悪謀を破りて、我を宥め給へ、蓋我歌ふ、先祖の尊まるる神よ、爾は崇め

讃めらる。

第八歌頌

イルモス、昔火と露との爐は天然に超ゆる奇蹟の象を示せり、蓋火は少者を焚かず

して、ハリストスの童貞女よりの種なき神聖なる産を顯せり。故に我等歌ひて呼ば  
ん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。  
命を以て天を張りたる者は甘じて十字架に擧げられ、愆に由りて跌きし始めて造ら  
れたるアダムを起さんと欲する者は釘にて著けられたり。故に我等歌ひて呼ぶ、悉  
くの造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。  
神の言よ、石の如く心の頑なる會は爾石たる者を磐に樹てたる十字架に擧げしに、  
山は動き、地は震へり。揺ける靈は神聖なる生命に堅められて恒に呼ぶ、悉くの  
造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。

### 致命者讃詞

聖なる受難者は勇ましく裸體にして苦を受け、傷に覆はれて、己の爲に救の衣を織  
りたり。故に歌ひて呼ぶ、悉くの造物は主を崇めて、世世に彼を讃め揚げよ。

### 致命者讃詞

受難者は無情に鐵塔にて搔かれ、無慙に寸斷せられ、種種の苦に遇はせられて、偶像  
に祭を捧げず、信者の爲に勇敢の柱と顯れて呼べり、悉くの造物はハリストスを崇  
めて、世世に彼を讃め揚げよ。

### 生神女讃詞

爾を惡む無智の會が爾を地より去らんと定めし後、我子なき者と爲りて哀しみ、母  
として心痛めりと、夫に與らざる者は昔爾が十字架に擧げられしを見て呼べり。イ  
イススよ、彼と共に造物は爾衆の贖罪主を世世に讃榮す。

又

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以  
て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に  
讃め揚げよ。

光の門なる潔き者よ、我が心の眼を照して諸愆の雲と深き暗とを散らし給へ、  
我が歌はん爲なり、主の悉くの造物は主を歌ひて、世世に彼を讃め揚げよ。

二次。

潔き女宰、純潔なる童貞女よ、爾を神の母として呼ぶ衆人の爲に絶えず祈りて、歌  
はしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

第一調 水曜日の早課 一四一

第一調 水曜日の早課 一四二

救の縁由たるハリストスを言ひ難く生みし讚美たる童貞女よ、衆の爲に祈りて、切  
に呼ばしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、及び躬拜。

### 第九歌頌

イルモス、童貞女の秘密は言ひ難し、蓋彼は天と現れ、ハリストス神全能者のヘル  
ワームの寶座及び光を放つ宮と現れたり。我等敬虔に彼を生神女として崇め讃む。

救世主よ、善智なる盜賊は昔爾無量の水の上に地を懸けし者が木に懸けられしを見て、信を以て爾に呼べり、我を憶ひ給へと。彼と偕に我等は敬虔に爾の苦を讚榮す。

イイスよ、爾は十字架に釘せられて、地の基を震はせ、戈にて刺されて、不死の滴なる血及び水、人類を諸愆より潔むる者を流し給へり。故に我等爾を歌ひて崇め讚む。

### 致命者讚詞

聖なる勇敢者は苦の中に樂しみて、互に甘味を勸むるが如く、相勵まして呼べり、視よ、ハリストスは購すべき途を啓けり、今其愛する者に榮冠を與へ給ふ。

### 致命者讚詞

衆信者は慶賀して、勝たれぬ致命者の無数の苦と傷とを尊む。此等に由りて受難者は疾なき生命と永遠の福樂とを受くるに堪ふる者と爲れり。

### 生神女讚詞

人を愛する言を言ひ難く生みし、少女は、彼が甘じて人人より苦しめらるるを見て、呼べり、是れ何ぞや、苦に與からざる神は苦を受く、信を以て彼に伏拜する者を苦より脱れしめん爲なり。

又

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。

讚美たる生神女よ、我が諸罪の重き任を取りて、我に爾の子及び神の至りて輕き軛を負はしめて、上なる完全に登らしむる途を履むに勝ふる者と爲し給へ。二次。

純潔なる者よ、我ハリストスの降臨の畏るべき日を思ひて慄く、吾が一生は罪の中に終り、吾が靈は愆に充ちたればなり。我を憐みて、彼の時に定罪を免れしめ給へ。

第一調 水曜日の早課 一四三

第一調 水曜日の早課 一四四

至淨なる女宰よ、爾の不當なる僕の禱を受けて、我が靈と體との騷擾を深き隱靜に變じ給へ、我が救はれて爾を讚美せん爲なり。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。小聯禱、光耀歌。次に常例の聖詠。

### 挿句に十字架の讚頌、第一調。

我等は爾身にて木の上に釘せられて、我等に生命を賜ひし者を、救世主及び主宰として、絶えず歌ふ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

ハリストスよ、爾の十字架に因りて諸天使及び人人は一の牧群と爲り、天と地とは一の會に於て樂しみて呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

至りて讚美たる致命者よ、憂患も、困苦も、飢渴も、窘逐も、創痍も、猛獸の猛きも、刀劍も、烈しき火も爾等を神より離すこと能はざりき。爾等は更に彼を愛する愛を燃して、他人の身に在るが如く闘ひて、性を忘れ、死を顧みざりき。故に宜しきに合ひて、爾等の苦の報を受け、天國の嗣と爲れり。息めずして我が靈の爲に祈り給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

神の言よ、牝羊たる爾の無玷の母は爾の十字架の側に立ちて、哭きて呼べり、哀しい哉、子よ、如何ぞ十字架に死する、哀しい哉、我が甘き光、衆人より最美しき者よ、爾の美麗は今何處にか隠れたる。

次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」、聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。司祭聯祷を誦す、及び發放詞。次に第一時課、常例の聖詠、及び最後の發放詞。

~~~~~

水曜日の眞福詞、第一調

敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時、我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。
仁慈なるハリストスよ、爾は耻づべき苦を忍びて、我等の悉くの耻を除き、爾の降臨に伏拜する我等を上なる國に與る者と爲し給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん

第一調 水曜日の眞福詞 一四五

第一調 水曜日の眞福詞 一四六

時は、爾等福なり。

ハリストスよ、爾はアダムの裸體を覆ひて、自ら裸體と爲り、十字架に上りて、我等を惡の深處より上げ給へり。故に言よ、我等爾の聖なる降臨を讚榮す。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

至りて讚美たる致命者よ、爾等は己の聖なる傷にて惡鬼の大數に傷つけ、恩寵を以て恒に人人の傷と痛とを實に醫し給ふ。

光榮

聖三者は切に之を尊みて、其分れざる權柄を有つ者なるを識る衆人を照し給ふ。我等彼に呼ばん、聖三者よ、愛を以て爾を歌ふ者を救ひ給へ。

今も

純潔なる者は十字架の側に立ち、ハリストスが身にて釘せられしを見て、歎息して呼

べり、光榮の主、慈憐なる者よ、爾の美麗は今何處にか隠れたる。



水曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に聖使徒の讚頌、第一調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

光榮なる使徒、神に召されたるハリストスの門徒、世界の教師よ、爾等は主神及び人人の中保者に遇ひて、神に合ふが如く彼に就き、彼を神及び完全なる人として明に世界に傳へたり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

至りて睿智なる使徒、神に召されたるハリストスの門徒、世界の教師よ、爾等の祈禱を以て、神聖なる教を謹みて聽かん爲に我を堅め、常に狭き路を行くを我に助け給へ、我が最廣き樂園の居處に至るを得ん爲なり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

首座たるペトル、及びパウエル、イアコフ、アンドレイ及びフィリップ、シモン、ワルフオロメイ及びフオマ、福音を録ししマトフェイ及びイオアン、マルコ及びブルカ、神に選ばれたる會を、他の七十人と偕に、言の實見者及び傳道者として崇め歌ふ

又、大なる成聖者及び奇蹟者ニコライの讚頌、第一調。

第一調 水曜日の晩課 一四七

第一調 水曜日の晩課 一四八

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

教會の花を飛び遶る天使の上なる巢の雛たる三重に福なるニコライよ、爾は常に患難及び誘惑の中に在る衆人の爲に神に呼びて、爾の祈禱を以て彼等を救ひ給ふ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

至りて聖にせられし神父よ、爾は天の華麗を巡り視て、聖人等の莊嚴なる光榮を盡く悟れり。故に我等にも天の事を顯し、我が心を勵まして、地上の諸事より天に向はしめ給ふ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

捧神なる神父よ、爾は聖にせられし衣の裝飾を己の盛徳を以て更に輝ける者と爲せり。故に我等の爲にも聖務を行ひて、ハリストスに因りて光榮なる奇蹟を以て我等を諸難より救ひ給ふ。

光榮、今も、生神女讚詞。

神の母よ、我諸罪の海に荒さるる者は平隱の港なる爾の至りて潔き祈禱に趨り附

きて、爾に呼ぶ、純潔なる者よ、爾の強き手を爾の僕に伸べて、我を救ひ給へ。

次ぎて「隠なる光」。本日の提綱。其後「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」及び聯禱。

挿句に使徒の讃頌、第一調。

使徒の調和したる籥、聖神に動かさるる者は、悪鬼の汚らはしき祭を虚しくして、唯一の主を傳へ、異邦民を偶像の迷より脱れしめて、一性なる三者に伏拜せんことを教へたり。

句、天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

ペトル及びパウエルを同心に崇め讃め、ルカ、マトフェイ、マルコ、イオアン、アンドレイ、フォマ、ワルフオロメイ、シモン、カナニト、イアコフ、フィリップ及び悉くの門徒の會を宜しきに合ひて讃め揚ぐべし。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に驚き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに驚き足れり。

致命者讃詞

至りて讃美たる致命者よ、地は爾等を隠さず、天は爾等を受けたり、樂園の門は

第一調 水曜日の晩課 一四九

第一調 水曜日の晩堂課 一五〇

爾等の爲に啓かれ、爾等は其内に入りて、生命の樹を以て慰む。我等の靈に平安と大なる憐とを賜はんことをハリストスに祈り給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

先祖の喜悅、使徒と致命者との歡樂、我等爾の諸僕の庇蔭なる童貞女よ、慶べ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、及び發放詞。

~~~~~

水曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イズライリを救ひし神に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

神の母よ、棘は爾を像れり、蓋爾は實に堪へ難き火を宿して、焚かれずして止まれり。故に我等敬信の聲を以て常に爾を讃頌す。

至淨なる者よ、神言は人を衣て、悟り難く爾より生れ給へり。故に凡そ呼吸ある者は爾を讃榮し、爾に伏拜し、職として爾を尊む。

光榮

至淨なる者よ、爾は地の四極を持つ言ひ難き言を孕みて、之を生み給へり。切に彼に我等を憐まんことを祈り給へ。

今も

時に限られぬ神を時届りて人體を取りし者として生み給ひし獨至淨なる女宰よ、我が慾に耽る靈の時毎の諸慾を醫し給へ。

第三歌頌

イルモス、第二の天を水の上に固め、地を水に基づけし全能のハリストス神よ、願はくは我が心は爾の旨に固められん。

潔き童貞女よ、神は人類を神成せん爲に言及び智慧に超えて、爾に依りて人と爲り給へり。故に我等信者は同心に爾を讃揚す。

神の恩寵を蒙れる潔き者よ、性に於て像られぬ主は爾より身を取りて像られたり。彼に爾を讃美する者の靈を宥めて照さんことを絶えず祈り給へ。

光榮

至聖なる生神女、信者の扶助者よ我が果を結ばざる思念の荒れたるを盡く除きて、我が靈を諸徳の果を結ぶ者と顯し給へ。

第一調 水曜日の晩堂課 一五一

第一調 水曜日の晩堂課 一五二

今も

我等の爲に暮れざる光を生みし至りて無玷なる者よ、我を凡の侵害、蛇の多くの誘惑、永遠の火及び幽暗より脱れしめ給へ。

第四歌頌

イルモス、預言者アウラクムよ、爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼べり、年の邇づく時爾は識られん、期の届る時爾は顯れん、主よ、光榮は爾の力に歸す。

至聖なる女宰よ、ハリストスは爾の至淨なる胎に入り、靈ある身を受けて、我等を神成し給へり。故に我等爾潔き母、女宰、世界の扶助者を醇正に歌頌す。

聖なる生神女、人人に似んと欲せし至聖なる主を身にて生みし者よ、我等を聖にし給へ。至淨なる者よ、爾の祈祷を以て我等衆を天の國に與る者と顯し給へ。

光榮

生神童貞女、無玷の幕なる者よ、諸罪に汚されし我を今爾の洪恩の潔き灑にて浄め、我に援助の手を授けて、呼ばしめ給へ、主よ、光榮は爾の能力に歸す。

今も

童貞女よ、爾は智慧に超えて爾の中に入りし神の爲に聖にせられし殿と顯れたり。彼に我が諸罪の汚を浄めんことを祈り給へ、我等が聖神の殿及び居處とならん爲なり。

第五歌頌

イルモス、神の子よ、爾の平安を我等に與へ給へ、蓋我等は爾の外に他の神を識ら

ず、爾の名を唱ふ、爾は生死者の神なればなり。  
昔エデムの中に悪しき食は我を死者と爲せり。生命を生みし潔き者よ、其時木に縁りて死せし者を生かし給へ、我が爾を讚榮して歌頌せん爲なり。  
純潔なる者よ、我を甚しき害より救ひ、汚はしき諸愆より起し、愛を以て爾を尊む者を悪鬼に執はれて害せらるることより脱れしめ給へ。

### 光榮

潔き童貞女母よ、我等爾を雲と、樂園と、光の門、筵と、羊の毛と、世界の甘味なる「マンナ」を内に籠むる壺として識る。 **今も**  
至りて無玷なる者よ、爾は慈憐に因りて人と爲りし神エムマヌイルを生み給へり。潔き者よ、其仁愛の主なるに因りて、彼に罪を犯しし人人を宥めんことを祈り給へ。

### 第六歌頌

第一調 水曜日の晩堂課 一五三

**イルモス**、ハリストス神、人を愛する主よ、我爾に籲ぶ、預言者イオナを救ひし如く、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、生命と不朽と能力とは爾に在ればなり。  
爾仁慈無玷の幕なる者に祈る、我多くの罪に汚されたる者を爾の轉達を以て凡の汚より滌ひ給へ。

第一調 水曜日の晩堂課 一五四

潔き者よ、我度生の諸難の浪たつ海に荒らさるる者の爲に舵師と爲りて、救の港に導きて、我を救ひ給へ。 **光榮**

意念の騷擾、諸愆の攻撃、諸罪の深處は我が不當なる靈を溺らす。聖なる女宰よ、我を援け給へ。 **今も**

成聖の幕たる神の聘女マリヤよ、逸樂に汚されたる吾が不當なる靈を聖にして、我を神聖なる光榮に與る者と爲し給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

童貞女及び聖三者の一位の養育者、美しき樂園、地上の者の拯救よ、敬虔に爾を歌頌する者を爾の庇護にて救ひ給へ。蓋爾は諸預言者を以て言ひし者を生み、萬有を持つ者を手に抱き給へり、ハリストス神の母なればなり。

### 第七歌頌

**イルモス**、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、其時三人口を一にして、歌頌祝讚して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。  
潔き神の母よ、原始なき父の子は爾の腹に入りて、原始を受けたり、神なるに因りて、我等彼に伏拜する者を幽暗の悪原より脱れしめん爲なり。  
神聖なる諸徳に妝はれたる潔き童貞女よ、爾は父と同無原なる言、實に其諸徳を以て天を蔽へる者を生み給へり。彼に我等を宥めんことを常に祈り給へ。

### 光榮

神の母童貞女よ、我等の意念を聖にし、我等衆の靈を堅めて、善なる戒を行はしめ給へ、無原なる父の言、爾より身を取りし主の言ひ難き慈憐に因りてなり。

### 今も

至りて無玷なる者よ、多くの慾にて殺されし我が智慧を生かして、我を神の悦ぶ所を行はん爲に堅め給へ、我が爾「ハリストティアニン」等の保護者及び倚頼なる者を常に崇め讃めん爲なり。

### 第八歌頌

第一調 水曜日の晩堂課 一五五

第一調 水曜日の晩堂課 一五六

イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、少者よ、讚榮し、人人よ、崇めて萬世に讃め揚げよ。

至りて無玷なる者よ、我等爾を、祝讃せられて神の恩寵を蒙れる生神女と識る者は、神に捧ぐる爾の眠らざる祈祷に因りて諸の誘惑より救はる。

至淨なる者よ、肉體なき者は神に適ふが如く爾より肉體を取り給ふ。我が肉體の慾を殺して、罪に殺されし吾が靈を生かさんことを彼に祈り給へ。

### 光榮

塵土のアダムの毀傷を醫しし救世主及び神を生みし至淨なる者よ、甚しく病める吾が靈の創痕を醫さんことを彼に祈り給へ。

### 今も

潔き者よ、悪の深處に臥す我を起して、今我と戦ふ諸敵、不當なる逸樂を以て我が靈を殘ふ者に勝ち給へ。祈る、我を棄つる勿れ、憐みて我を救ひ給へ。

### 第九歌頌

イルモス、光を放つ雲、萬有の主が雨の天より羊の毛に降るが如く降り、始なき者が身を取りて我等の爲に人と爲りし所以の者を、我等皆我が神の潔き母として崇め讃む。

父より輝ける神聖なる光を生みし清淨無垢なる者よ度生の誘惑に味まされて諸敵の晒と爲りし我が靈を宥めて、救を致す痛悔の光に與らしめ給へ。

純潔なる者よ、イサイヤは爾を光れる雲と見たり、義の日は此より我等に輝きて、奥密に造物を照せり。故に我等信を以て爾女の中に至りて美しき者を歌頌す。

### 光榮

潔き者よ、我罪に耽りて怠惰に生を送る者は公平なる審判に慄く。童貞女・神の聘女よ、爾の聖なる祈祷を以て我を其時に定罪せらるるなく護り給へ、我が常に爾を保護者として讚美せん爲なり。

### 今も

童貞女よ、我地上にに多くの罪を行ひし者は審判及び爾の子の見ざる所なき目に慄く。故に爾に呼ぶ、至りて慈憐なる潔き女幸よ、我を助けて、定罪せらるるなく其時

の危難より脱れしめ給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文、「天に在す」の後に讃詞。其他常例の如し、及び發放詞。



第一調 水曜日の晩堂課 一五七  
第一調 木曜日の早課 一五八

木曜日の早課

第一の誦文の後に使徒の坐誦讃詞、第一調。

全世界の睿智なる漁者、神より恩寵を受けし者よ、今も我等の爲に祈り給へ。蓋我等呼ぶ、主よ、聖使徒に因りて皇帝と爾の城邑とを救ひ、我等の靈を圍める諸悪より解き給へ。

句、其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至る。

ハリストスの美音の角、無神の海を亂しし馬、深處よりするが如く人人を引き出して、聖神の恩寵を以て救の神聖なる港に着かしむる睿智なる使徒を、我等信者は歌を以て尊むべし。

光榮、今も、生神女讃詞。

信者よ、我等壞られぬ垣として生神女マリヤを獲て、來りて彼に叩拜俯伏せん。彼は己より生れし者の前に勇敢を有ち、祈りて、我等の靈を怒及び死より救ひ給ふ。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

漁者は十字架の杖を以て辯論者の言語の緻密なる網を裂きて、異邦民に敬虔にして爾眞の神を讃榮することを教へたり。故に我等は爾彼等を堅めし主に歌を奉りて呼ぶ、光榮は父及び子に歸す、光榮は同一性の神に歸す、光榮は彼等を以て世界を照しし神に歸す。

句、主よ諸天は爾の奇異なる事を讃榮せん。

全福なる使徒等よ、時に與からずして光より輝きし光は時届りて身にて地に現れ、爾等を以て世界を照し給へり。故に我等皆爾等の神聖なる教に照されて、爾等の聖なる記憶を尊む。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

我等皆愛を抱き、信を以てハリストスの致命者に來りて、彼等に祈らん。蓋彼等は我が救の爲に求む、彼等は恩寵の醫治を流す、彼等は悪鬼の隊を退く、教の守護者なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

「ハリスティアニン」等の倚頼たる至聖なる童貞女よ、爾が智慧と言語とに超えて生み

し神に爾を歌頌する者の爲に絶えず祈りて、信と愛とを以て恒に爾を讃揚する我等  
に悉くの罪の赦及び生命の改易を賜はんことを求め給へ。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

第一調 木曜日の早課 一五九

第一調 木曜日の早課 一六〇

靈智なる光體、救世主の光明なる門徒よ、爾等は火の如く神聖なる教を以て全地を照  
せり。故に我祈る、全福なる者よ、幽暗に在る吾が靈を爾等の輝ける光線にて照  
し給へ。

成聖者神父ニコライよ、爾は有形にミラに居りて、無形に屬神の香料を抹られたる者  
と現れたり。故に爾の奇蹟の香料を以て世界を薫らせ、爾に於ける芳しき歌頌と爾  
の記憶とを以て永遠に流るる香料を注ぎ給ふ。

光榮、今も、生神女讃詞。

童貞女よ、諸預言者は明に爾を神の母として預象し、神聖なる使徒は爾を世界に傳  
へ、我等は信ぜり。故に我等皆敬虔に爾を尊みて歌ひ、常に眞の生神女と稱ふ。

聖使徒の規程、フェオファンの作。第一調。

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮  
を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅しイズライリ人の爲に新なる深水の路を開  
きたればなり。

光榮にして光明なる使徒よ、爾等は三日の光の神聖なる光線に照されて宜きに合ひ  
て諸神と名づけられたり。故に我等職として信を以て爾等を尊む。二次。

使徒よ、爾等は慈憐に因りて肉體を以て地に現れし言の嘉する役者、又其一切の誠命  
の忠信なる實行者と爲れり。故に常に尊まる。

常に福なる者よ、至聖神の光明なる光線を以て、我諸罪の暗に蔽はるる者を全く照  
して、痛悔の途に向はしめ給へ。 生神女讃詞

使徒等の悦なる神の母、至りて潔き女宰よ、彼等の中に神に適ふが如く言ひし者  
の母として、彼等と偕に我を地獄の火より脱れしめんことを祈り給へ。

又、我が聖神父奇蹟者ニコライの規程、其冠詞は、ニコライよ、我爾に第一の歌を奉  
る。イオシフの作。第一調。

第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イズライリを救ひ  
し神に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

義なる榮冠に飾られて、恩寵の寶座の前に立てるニコライよ、今歌を以て忠信に爾  
を飾る者を爾の祈禱にて常に救ひ給へ。

醫治の恩寵を受けし全福なるニコライよ、祈る、爾の祈禱を以て我が靈の傷を

第一調 木曜日の早課 一六一

癒して、我に逼る諸の誘惑より救ひ給へ。  
ニコライよ、祈る、爾の強き祈祷を以て諸罪に因りて弱りたる吾が靈を醫して、我を悪を嗜む者の度生より脱れしめ給へ。

生神女讃詞

純潔なる者よ、爾の光にて我が智慧の昏昧を退けて、我を永遠の暗より救ひ給へ、我が常に爾の偉大なるを歌はん爲なり。

第三歌頌

イルモス、獨人の性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力を帯びて、爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。

至福にして神聖なる使徒よ、獨見えざる神は肉體を取りて見らるる者と爲り、爾等を選びて門徒と爲し、爾等は彼の名及び至大なる光榮を全世界に傳へ給へり。二次。ハリストスよ、我獨爾の前に罪を犯し、獨爾の前に不法を行ひ、悪事を以て靈を汚せり。獨寛容なるイイススよ、爾の慈憐を以て我を淨めて救ひ給へ、爾の睿智なる使徒の禱に因りてなり。

至りて讚美たる使徒よ、爾等は慈憐なる者として、我を諸慾の汚の苦と諸罪の苦より救ひ、己の心に神聖なる甘を慰む者として、我が靈に痛悔の慰を與へ給へ。

生神女讃詞

婚姻に與らざる童貞女よ、無形なる役者と共に、悉くの上なる軍と共に、致命者及び使徒と共に、爾が己の潔き血より身を取りし者として生みたるハリストスに爾の諸僕の救はれんことを祈り給へ。

又

イルモス、第二の天を水の上に固め、地を水に基づけし全能のハリストス神よ、願はくは我が心は爾の旨に固められん。

司祭長等の飾、聖神の馨香たる睿智なるニコライよ、我愛を以て祈る、爾の馨しき祈祷にて我が心の悪臭の諸慾を遠ざけ給へ。

ハリストスよ、我怠惰の中に我が生を費して、爾の畏るべき審判に慄く、之に及びて我を辱かしむる勿れ、ニコライの聖にせられし轉達に因りてなり。

神聖なる恩寵にて飾られたる全福なる成聖者神父ニコライよ、常に爾の庇蔭の下に趨り附く者を種種の誘惑及び菑害より救ひ給へ。

生神女讃詞

我等の爲に暮れざる光を生みし至りて無玷なる者よ、我を凡の侵害、蛇の多くの誘惑、永遠の火及び幽暗より脱れしめ給へ。

第四歌頌

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾、神の恩寵に覆はるる山を見て、イズライ  
リの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。

神に選ばれたる使徒、ハリストスの馬たる者よ、爾等は己の驕するを以て無神と不信  
との海を亂して、無形の敵を溺らし、溺らされたる人人を救の爲に引き出せり。二  
次。

聖神の光の器たる神福なる聖使徒等よ、諸慾の器と爲りし我が味まされたる靈を  
痛悔の光にて照し給へ。

至りて讚美たる使徒等、生命の水を雨らしし雲よ、諸慾の早に由りて枯れたる我が靈  
を神の恩寵を以て潤して、救を爲す諸徳の穂を生長せしめ給へ。

生神女讚詞

諸預言者、讚美たる使徒、致命者よ、贖罪主の母と偕に切に祈りて、我等が諸罪と永遠  
の苦、諸の誘惑と菑害と憂患より救はれんことを求め給へ。

又

イルモス、預言者アウワクムよ、爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼  
べり、年の邇づく時爾は識られん、期の届る時爾は現れん、主よ、光榮は爾の力  
に歸す。

神の一切の誠命の實行者たる成聖者神父ニコライよ、爾の祈禱を以て我等に救に導  
く地上の法を守らんことを助けて、我等に逼る諸の誘惑を免れしめ給へ。

馳すべき程を盡してハリストスに就きたる捧神者神父ニコライよ、我等の途を彼に向  
はしめ給へ、我等が無道の迷を逃れて、救を致す全備に至らん爲なり。

神聖なる徹醒を以て敵の悉くの悪謀を眠らせし睿智なる神父ニコライよ、我等衆覺  
め興きて、神を歌頌し、爾を轉達者として彼に進むる者に神の恩寵を得しめ給へ。

生神女讚詞

潔き者よ、預言者は神の神に感ぜられて、爾を樹蔭繁き山と像れり。生神女よ、  
我等多くの罪の暑熱に疲れたる者を今爾の庇蔭と恩寵とを以て涼しくし給へ。

第五歌頌

第一調 木曜日の早課 一六五

第一調 木曜日の早課 一六六

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリス  
トスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

至榮なる使徒よ、爾等は甘味と美しき樂とを滴らす山、敵の都ての苦味を除き、信者  
を慰むる者と現れたり。二次。

言の神聖なる使徒よ、爾等は己に屬する者に來りしハリストスを受けて、熱心に之  
に就きたり。祈る、疎き者の害より我を救ひ給へ。

洪恩なる主よ、爾の神聖なる降臨と、苦と、墓よりの復活とを世界に傳へし者の祈禱

に因りて、我が靈の隠れたる傷を醫し給へ。

### 生神女讃詞

生神童貞女よ、爾より肉體を取りて生れし神言に無形の衆軍と共に祈りて、爾の諸僕が無知なる行と肉體の諸愆より解かれんことを求め給へ。

又

イルモス、人を愛する主宰、ハリストス我が神よ、朝に爾が誠の定の事を考ふる我等を永遠の明なる光にて照し給へ。

成聖者神父ニコライよ、爾は主の庭に植えられて、實の繁き橄欖樹の如く、爾の功勞の油たる恩寵にて今衆の面を潤し給ふ。

神父ニコライよ、爾の諸僕の爲に今禱を捧げ給へ、我等が諸罪の赦を受けて、凡そ我等を圍む患難と困苦より脱れん爲なり。

聖なるニコライよ、爾主の前に善なる轉達者に祈る、我等を援助なく遺さずして、爾の熱切なる祈禱を以て我等を救ひ給へ。

### 生神女讃詞

ハリストスの光明の殿たる神の恩寵を蒙れる少女よ、爾の祈禱を以て我等をも父と、子と、聖神の爲に殿と爲して、聖なる事を行はしめ給へ。

### 第六歌頌

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

嗚呼神福なる使徒よ、爾等は言の網を以て異邦民を捕へて、人人の爲に現れし嚮導者を知る知識に就かしめたり。彼に熱切に世界の爲に祈り給へ。二次。

我が卑微なる靈、不當なる靈、悔いざる靈よ、悔いてハリストスに呼べ、我罪を犯せり、人を愛する主宰よ、至仁なるを以て、爾の使徒の祈禱に因りて我を潔め給へ。

昔イズライリの爲に磐より水を流しし全能なるハリストスよ、憐深き主なるを

第一調 木曜日の早課 一六七

第一調 木曜日の早課 一六八

以て、爾の使徒の祈禱に因りて我が昏昧を解きて、涙の流を捧げしめ給へ、我が爾の仁慈を歌ひて崇め讃めん爲なり。

### 生神女讃詞

至聖なる童貞女よ、仁慈に因りて爾より甘じて生れ給ひし者に、其造物主及び神なるを以て、常に憑恃を爾に負はしむる者を誘惑及び患難より救はんことを祈り給へ。

又

イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ。世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。

慈憐の多きハリストスよ、ニコライの祈禱に因りて我が惡の多きを遠ざけて、常に罪の浪に荒らさるる我が生を治め給へ。

睿智なるニコライよ、爾は敵を踐みて之に勝てり。爾を神聖なる轉達者として獲たる我等をも爾の祈禱を以て堅めて、之を破らしめ給へ。  
ミラ城の人人の爲に眞實なる司祭首たりし神父ニコライよ、我等の靈の感覺を薰らせて、常に我等と戦ふ悪臭の諸愆を遠ざけ給へ。

### 生神女讃詞

神の恩寵を蒙れる潔き者よ、ハリストスは爾に大なる事を成せり。常に彼に其豊なる慈憐を我等の中に大にせんことを祈り給へ。

### 第七歌頌

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。門徒よ、生命の泉たる主イイススは、全地に神を識る知識の水を飲ましむる川として爾等を遺して、歌はしめたり、尊まるる先祖の神は崇め讃めらる。二次。  
門徒よ、爾等は心の中に無形の火たる神聖なるハリストスの恩寵を有ちて、無神の物質を焚きたり。祈る、我、尊まるる先祖の神は崇め讃めらると、呼ぶ者の物質の諸愆を焚き給へ。  
主神よ、爾の光榮なる門徒の祈禱に因りて我を火の苦より拯ひて、爾の顔より退くる母れ、蓋我痛悔して呼ぶ、尊まるる先祖の神は崇め讃めらる。

### 生神女讃詞

不朽にして童貞女神の母より生れし主よ、我を朽壞せしむる罪と愆より救ひ給へ、

第一調 木曜日の早課 一六九

第一調 木曜日の早課 一七〇

爾は凡そ尊まるる先祖の神は崇め讃めらると歌ふ者に不朽を賜へばなり。

### 又

イルモス、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、其時三人口を一にして、歌頌祝讃して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。  
睿智なるニコライよ、爾の熱心なる祈禱を以て、我が心の足を光明なる神の誠の石に堅く立てて、絶えず我を悪の魁なる敵の悪謀より救ひ給へ。  
衆信者の保護者、成聖者の基なる聖にせられしニコライよ、我等の爲に多くの罪の赦さるること、度生の危き網と種種の誘惑より解かることを求め給へ。  
用いん爲に受けたる賚を藏しし悪しき僕は我にして、彼處の審判を畏る。萬有の神審判者よ、其時に及びて、聖ニコライの祈禱に因りて、我を定罪する勿れ。

### 生神女讃詞

至聖至潔なる者よ、爾の諸僕は常に晝に夜に傷める意念を以て祈りて、爾潔き者の祈禱に因りて、我等に諸罪の赦を賜はんことを求む。

### 第八歌頌

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以

て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

使徒よ、大なる日は爾等を光線の如く全地に發して、衆を輝かして、信を以て歌はしむ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。二次。

靈智なる牧者とし、牧者の羔とし、羔たる我等の贖罪主ハリストスの羊として、神を見し使徒等よ、我を無形の狼より脱して、救はるる者の分を得しめんことを絶えず祈り給へ。

至りて不當なる靈よ、歎息して主に呼べ、我衆に超えて罪を犯し、甚しく不法を爲せり。洪恩なる主よ、善く受けらるる使徒の祈祷に由りて、我を淫婦の如く、税吏の如く、盜賊の如く潔めて、救ひ給へ。

### 生神女讃詞

神の母よ、天使と偕に、使徒及び致命者と偕に、預言者と偕にハリストスに祈りて、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて世々に讃め揚げよと、呼ぶ者を救はん

第一調 木曜日の早課 一七一

第一調 木曜日の早課 一七二

ことを求め給へ。

### 又

イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、少者よ、讃榮し、人人よ、崇めて萬世に讃め揚げよ。

ニコライよ、爾は神聖なる諸徳の山に立ちて、高尚なる奇蹟の顯見を以て四極に知らるる者と爲れり。故に凡の民は爾を萬世に尊む。

克肖者よ、爾は神聖なる甘味を嘗めて、慾と逸樂との苦味を悪めり。ハリストスに祈りて、我等を此等より脱れしめて、我等に逼る諸の誘惑を防ぎ給へ。

動かされぬ柱にして、信者の固たる全福なるニコライよ、爾の祈祷を以て、我常に度生の困難と悪鬼の攻撃とに動かさるる者を固め給へ。

### 生神女讃詞

萬衆の醫師を生みし至淨なる童貞女よ、ハリストスに祈りて、我が心の諸慾を愈して、我を義者の分に與る者と爲し給へ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、及び躬拜。

### 第九歌頌

イルモス、生神女よ燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して常に爾を崇めさせ給へ。

福たる者よ、爾等は聖神の神妙に輝ける燈臺と現れて、尊くして睿智なる傳教の光にて全地を照して、偶像の幽暗を退け給へり。二次。

光榮なる使徒よ、爾等は神聖なる葡萄樹の枝と爲り、神聖なる房を生長せしめて、救の酒を流せり。故に我を諸慾の酔より脱れしめ給へ。

わがハリストスよ、我不當の者は彼の爾の畏るべき審判を思ひて慄く、蓋今耻づべく忌はしき行に溺れて、審判の前に定罪せられたり。祈る、爾の諸使徒の祈祷に因りて我を宥め給へ。

生神女讃詞

純潔なる童貞女よ、爾獨身を取りし言を生みて、人人を神成し給へり。潔き者よ、使徒及び致命者と偕に、信を以て爾を尊みて讚美する我等の爲に彼に祈り給へ。

又

イルモス、光を放つ雲、萬有の主が雨の天より羊の毛に降るが如く降り、始なき者が身を取りて我等の爲に人と爲りし所以の者を、我等皆我が神の潔き母として崇め讚む。

神父よ、我等爾をハリストスの成聖者、輝ける星、奇蹟の實行者、醫治の泉、憂

第一調 木曜日の早課 一七三

第一調 木曜日の早課 一七四

に在る者の扶助者、患難の中に爾を呼ぶ者の最篤き保護者として、屬神の歌を以て崇め讚む。

ニコライよ、我等爾大なる牧師、一切に於て牧師長ハリストスに效ふ者に切に祈る、聖なる高處より爾の諸僕を牧して、常に諸の度生の患難より救ひ給へ。

嗚呼吾が靈よ、終は已に近づけり、何ぞ怠る、胡爲れぞ神の悦ぶ所の如く度生せんことを務めざる。是より務めて興きて呼べ、人を愛する主よ、我を宥め、仁慈なるを以て、ニコライの祈祷に因りて我が生を治め給へ。

生神女讃詞。

神聖なる光を生みし純潔なる者よ、我凶悪者の種種の誘惑に味まされ、氣倦みて度生し、神を怒らする者を照して、善き行に導き給へ、爾は一切の善事の縁由なればなり。

次ぎて「常に福ににして」、及び躬拜。小聯祷、光耀歌、常例の聖詠。

挿句に使徒の讚頌、第一調。

光榮なる諸使徒、全地を照しし者よ、常に神に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

ペトル及びパウエルを同心に崇め讚め、ルカ、マトフェイ、マルコ、イオアン、アンドレイ、フォマ、ワルフオロメイ、シモン、カナニト、イアコフ、フィリップ及び悉くの門徒の會を宜しきに合ひて讚め揚ぐべし。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

致命者讃詞

致命者よ、主の爲に樂しめ、蓋爾等は善き戰を戰へり。諸王に逆ひ、苛虐者に勝ち、火をも、劍をも、爾等の體を食ふ猛獸をも畏れざりき。諸天使と偕にハリストスに歌を捧げて、天より榮冠を受けたり。世界に平安、我等の靈に大なる憐を賜はんことを祈り給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神童貞女よ、慶べ、全世界の榮譽よ、慶べ、恩寵を蒙れる至淨なる神の母よ、慶べ。

第一調 木曜日の早課 一七五

第一調 木曜日の眞福詞 一七六

次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」、聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。聯禱、及び發放詞。

次ぎて第一時課、常例の聖詠、及び最後の發放詞。



木曜日の眞福詞。第一調。

敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時、我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

爾等は己の教の神聖なる光線にて四極を照して、甚しき無神の昏昧を散し、入らざる光に移りて、常に讚美せらる。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストスの門徒よ、爾等を智ならしむる父と一體なる睿智を有ちて爾等は傳道の愚を以て世界を智ならしめて、神を知る知識に就かしめ給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讚詞

至りて讚美たるハリストスの受難者よ、爾等は無形の者の如く苦を忍びて、勇ましく凡ての無形の敵に勝てり。故に宜しきに合ひて世世に讚揚せらる。

光榮

我等信者は聖三者なる父と、子と、義なる神、分れず、離れず、同一寶座たる惟一者に伏拜して呼ばん、聖、聖、聖なる哉至りて尊き三者や。

今も

至淨なるものよ、爾が預言せし如く、我等爾を讚美す、蓋爾は身を取りし神、使徒の會の傳へし主を生み給へり。歌はるる者よ、彼等と偕に我等の爲に諸罪の赦を求め給へ。



木曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に尊貴にして生命を施す十字架の讚頌、第一調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

ハリストスよ、爾は十字架に爾の至淨なる手を伸べて、爾より遠く離れたる者を

第一調 木曜日の晩課 一七七

第一調 木曜日の晩課 一七八

呼びて、己の側に立て給へり。故に我爾に祈る、愆の囚と爲りし我を釋きて、我に諸愆の汚を潔むる痛悔を予へ給へ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

人を愛するハリストスよ、爾は己の至淨なる手を十字架に擧げて、爾の指を血に染めたり、爾の神聖なる手の工作たるアダム、犯罪に因りて死の國に囚はれたる者を釋かんと欲したればなり。全能者よ、爾は己の權を以て彼を起し給へり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

無原なる救世主よ、爾は性に於て變易なく、神性に於て苦に與からざる者にして、苦を忍べり、罪なきハリストスよ、爾は犯罪者と偕に十字架に釘せられたり。日は狂妄に勝へずして晦み、地は盡く震へり、爾を世界の造成者と知りたればなり。

又、十字架生神女の讚頌、同調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

昔無玷なる童貞女は種なき腹より生みし者が木に在るを覩て、心の刺さるるに忍びず、痛く歎きて云へり、萬物を手に持つ者は如何にして十字架に擧げられたる、人類を救はんと欲する者は如何ぞ定罪せられたる。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

又、同讚頌を誦すべし。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至淨なる者は云へり、嗚呼無原なる父の言ひ難き子よ、我は吾が産の十字架に在るを覩て、恩を知らざる人人が何に由りて此等を爾に報いたるを曉らず。然れども爾は、慈憐なる者よ、己の造物を救はん爲に來りしに因りて、恒忍を以て一切を忍び給ふ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

童貞女は哭きて云へり、最甘き子よ、爾は木に上げられ、膽と醋とを嘗めて、アダムの古の食の苦きを甘くし給へり。故に義なる審判者よ、全能者なるに因りて復活して、爾の醫を施す苦を以て我の苦きを甘くし給へ。

次ぎて「隠なる光」。本日の提綱。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」、及び聯禱。

挿句に十字架の讃頌、第一調。

第一調 木曜日の晩課 一七九

第一調 木曜日の晩課 一八〇

十字架は髑髏の處に樹てられて、我等の爲に不死の花を發けり、救世主の脅より常に流るる泉に因りてなり。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。救世主の尊き十字架は我等の爲に壞られぬ垣なり、我等皆彼を恃みて救はるればなり。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讃詞

主よ、衆聖人及び生神女の祈禱に因りて、爾の平安を我等に與へ、我等を憐み給へ、爾獨洪恩の主なればなり。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

ハリストスよ、童貞女は爾が非義に屠らるるを觀て、哭きて爾に呼べり、最甘き子よ、如何にして義なき苛虐を受くる、全地を水の上に懸けし者は如何にして木に懸れる。慈憐の深き恩主よ、祈る、我爾の母及び婢を獨にして遺す勿れ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讃詞、及び發放詞。



木曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、イズライリは苦しき奴隸より脱れて、渉られぬ處を陸の如くに過れり。敵の溺るるを見て、恩主たる神、高き臂を以て奇蹟を行ふ者に歌を奉る、彼光榮を顯したればなり。

女宰生神女よ、我吾が罪の多きと審判者に對する答とを思ひて、失望に陥る。祈る、爾我の爲に神聖なる轉達者と爲りて、爾の慈憐を以て審判者を和らげ給へ。

「ハリストティアニン」等の避所、陥る者の提起、罪を犯す者の潔淨たる至淨なる者よ、我に畏るべき詰問と滅えざる火とを逃れしめて、永遠の生命を與へ給へ。

第一調 木曜日の晩堂課 一八一

光榮

潔き童貞女よ、我等信者皆獨爾を堅固なる保護者として獲たり、爾神を生み給ひしに因る。故に爾の言の如く、我等地の諸族皆讃歌を以て爾を讃揚す。

今も

至淨至潔なる者は造物主及び己の子を十字架に観て、驚に勝へずして云へり、子よ、是れ何ぞ、不虔の者は爾が彼等に施しし諸善の爲に、如何ぞ悪を爾に報いたる。

第三歌頌

イルモス、世の無き前に分離なく父より生れし子、末の日に種なく童貞女より身を受けしハリストス神に呼ばん、我等の角を高くせし主よ、爾は聖なり。

預言者は皆爾神の母を至榮なる預徴を以て傳へたり。我等明に其應ひたるを見て、信じて、爾に因りて神聖なる平隱を得んことを求む。

世界の女宰、信者の救及び防護なる潔き者よ、心の深處より發する我が歎息と涙の流とを受けて、多くの罪に縛られたる我を解きて救ひ給へ。

光榮

至淨至潔なる者よ、母としてハリストス神に勇敢を有ちて、我等が諸敵と種種の艱難より救はれんことを常に祈りて、感謝の心を抱きて、彼を讃榮するを得しめ給へ。

今も

至淨なる者は己の子が十字架に擧げられしを見て、歎息し、心の痛に於て呼びて曰へり、子よ爾の賜に暨きたりし不虔不法の者は何をか爾に爲したる。

第四歌頌

イルモス、イエッセイの根より生ぜし枝及び其花なる讃美たるハリストスよ、爾は童貞女より出で給へり。形なき者且神よ、爾は夫に適かざる者より身を取りて、樹蔭繁き山より來給へり。主よ、光榮は爾の力に歸す。

純潔なる者よ、凶悪なる敵の我に對する殘忍と悪謀とを破り、爾の堅固なるを我に衣せて、常に害なく、動なく、欣ばしく爾を歌頌する者として、全くして護り給へ。

潔き女宰よ、慾に溺るる我は、肉體の法に勝たれて、不義不法の事を行ひ、敢て目を擧げて爾を視るを得ず。然れども爾は慈憐の法を以て我不當の者を救ひ、我を救ひ給へ。

光榮

女宰よ、我等信者は獨爾を神と偕に耻を得ざる憑恃及び防護として有つ。爾の祈祷を以て我等を見ゆると見えざる諸敵、艱難と諸の誘惑より救ひ給へ、我が絶え

ず爾を讃榮せん爲なり。

今も

純潔なる者は種なくして生みし子が十字架に釘せられしを見て、母として哭き、呼びて云へり、吾が子よ、此の我が見る所の爾に於ける新にして至榮なる悟り難き奇蹟

は何ぞ。

第五歌頌

イルモス、和平の神、仁慈の父よ、爾我等に和平を賜ふ爾の大なる議事の使者を遣し給へり。故に我等神を知る光に導かれて、夜過ぎて朝に爾人を愛する主を崇め讃む。

爾の諸僕の爲に眠らずして侍り、篤く之を保護する童貞女よ、我等度生の諸の患難に遇ふ者を速に援けて、救ひ給へ、我等が悲哀に嚙まれて囚びざらん爲なり。神の居處たるマリヤよ、我汚はしき行に由りて悪鬼の居處と爲りて、其狂妄なる旨を行ふ者を、痛悔に由りて神の居處と爲し給へ。

光榮

慈憐なる者且神の母なるに因りて、靈にも體にも諸罪の愆を痛く病める我等を醫し給へ、爾は實に靈體の大なる醫師ハリストス、生命の盡きざる泉を生みたればなり。

今も

至りて無玷なる者は子が十字架の木に在るを觀て、心裂かれ、涙と共に呼べり、吾が子よ、我新なる奇蹟を見て、爾の恒忍に驚く、無罪の者にして如何ぞ非義なる死を忍ぶ。

第六歌頌

イルモス、海の猛獸はイオナを受けしまま産兒の如く腹より出せり。童貞女に入りて身を受けし言は其傷なきを守りて通れり、蓋自ら壞に従はず、生みし者をも伎はずして守り給へり。

至聖なる神の聘女よ、爾は萬善の馨香を以て全地を薫らせし屬神の香料たる神性の器と爲り給へり。故に爾の祈祷の芳しきを以て吾が靈より諸罪の悪臭を盡く拂ひ給へ。

逸樂の火は甚しく我を焼き、我が卑微なる心を惱まし、我を不義不法を行ふ者と爲す。神聖なる火を生みし神の聘女、我が拯救なる者よ、速に之を滅し給へ。

光榮

讚美たる童貞女、神の母よ、我等正教を以て爾を實に生神女と承け認むる者を見

第一調 木曜日の晩堂課 一八五

第一調 木曜日の晩堂課 一八六

ゆると見えざる諸敵の侵害より脱れしめて、護り給へ、爾は萬有を造りし主を生みしに因りて、常に權能を有ち給へばなり。

今も

至りて無玷なる者は十字架の側に立ち、己の子が身に懸れるを觀て、悲哀にて心を焦し、涙を流して呼べり、子よ、衆人に於ける爾の慈憐は實に言ひ難し。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第一調。

無玷なる牝羊は 羔 及び牧者が木に懸けられて死せしを見て、哭きて言ひ、母として呼  
べり、吾が子、至仁なる神よ、如何にして我言に超ゆる爾の謙卑と自由なる 苦と  
を忍ばん。

### 第七歌頌

イルモス、偕に敬虔に養はれし少者は、不虔の命を顧みずして、火の嚇を恐れず、  
乃 焰の中に立ちて歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。  
我悪鬼の攻撃と誘惑とに堪へず、肉體の逸樂の焰が我が智慧を味ませばなり。祈る、聖  
なる生神女よ、我憑恃を爾に負はせし者を棄つる勿れ。  
聘女ならぬ童貞女、至聖なる神の聘女・女宰よ、爾の祈祷を以て我が諸罪の縛を解  
き、我をハリストスの愛に配せて、諸徳の果を結ばしめ給へ。

### 光榮

潔きマリヤよ、爾は世に在る 悉くの「ハリストティアニン」の爲に防護と垣牆と耻  
を得ざる避所なり。故に我等信を以て爾を尊みて、ハリストスに呼ぶ、我が先祖の神  
よ、爾は崇め讃めらる。 **今も**  
至聖なる童貞女は己の子が十字架に懸れるを覩て、驚駭に勝へずして云へり、我爾  
生命の首及び生命を賜ふ者の殺されしを見て、如何ぞ之を忍ばん。

### 第八歌頌

イルモス、昔火と露との爐は天然に超ゆる奇蹟の象を示せり、蓋火は少者を焚かず  
して、ハリストスの童貞女よりの種なき神聖なる産を顯せり。故に我等歌ひて呼ば  
ん、 悉くの造物は主を崇めて萬世に讃め揚げよ。  
世界の女宰生神女よ、我肉體の逸樂と世俗の愛着とに因りて、悪の深處に溺れて囚  
むる者を、獨爾の慈憐を以て引き上げ給へ、潔き者よ、我他に救の望なく、全身失望  
に陥りたればなり。  
言ひ難き状にて神を生みし者よ、爾は衆人の救なり。生神女よ、爾は信者の

第一調 木曜日の晩堂課 一八七

第一調 木曜日の晩堂課 一八八

援助、警者の相、陥る者の提起なり。故に我等爾を讃揚してハリストスに呼ぶ、 悉  
くの造物は主を崇め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

### 光榮

神の母よ、我等爾を至りて堅固なる垣として獲て、我等の救の憑恃を爾に負はしめ  
たり。爾の諸僕の爲に港及び壊られぬ垣と爲りて、絶えず呼ばしめ給へ、 悉くの造物  
は主を崇めて世世に彼を讃め揚げよ。

### 今も

潔く生みし者は爾を十字架に覩て、母の心裂かれ、多くの涙を流し、痛く歎きて呼  
べり、吾が子よ、我産の時に 苦を免れしに、今爾の姿容の華榮なきを見て、 苦に堪  
へず。

## 第九歌頌

イルモス、童貞女の秘密は言ひ難し、蓋彼は天と現れ、ハリストス神全能者のヘル  
ワームの寶座及び光を放つ宮と現れたり。我等敬虔に彼を生神女として崇め讃む。  
我不當の者は忌はしき慾を以て吾が心を擾し、靈を滅す慾を以て體を汚せり。  
至淨至潔なる者よ、爾慈憐の多きを以て我を潔め給へ。  
潔き女宰よ、我爾の外に避所を得ず、地上に他の堅固なる保護及び庇蔭を識らず。故  
に熱心に爾に趨り附きて、爾に依りて諸罪の赦を得んことを求む。

## 光榮

讚美たる者よ、爾は今慈憐を以て上より爾の諸僕を眺みて、敬虔の教の中に之を護  
り、爾の祈祷を以て、爾を實の潔き生神女として尊む我等を諸の危難より救ひ給  
ふ。

## 今も

人を愛する主よ、種なく爾を生みし者は爾が十字架の木に懸れるを觀て呼べり、吾  
が子及び全能なる神よ、人人を救はんと欲して、如何ぞ今十字架に釘せられたる。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。聖三祝文、「天に在す」の後に讚詞。其他常例  
の如し、及び發放詞。

~~~~~

第一調 木曜日の晩堂課 一八九
第一調 金曜日の早課 一九〇

金曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第一調。

ハリストスよ、爾十字架に釘せられしに、暴虐は滅び、敵の力は踏まれたり、天使
に非ず、人に非ずして、主よ、爾親ら我等を救ひ給ひしに因る。光榮は爾に歸す。

句、主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。

人を愛する主よ、我等爾の十字架の木に伏拜す。蓋爾は、萬衆の生命よ、其上に釘
せられて、信を以て爾に就きし盜賊の爲に樂園を啓き、爾を承け認めて、主よ、我
を憶ひ給へと呼ぶ者を福樂に勝へさせ給へり。救世主よ、彼の如く我等をも受け給へ、
我等衆罪を犯せり、爾の慈憐に因りて我等を棄つる勿れと呼べばなり。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

無玷なる牝羊は 羔及び牧者が木に懸けられて死せしを見て、哭きて言ひ、母として呼
べり、吾が子、至仁なる神よ、如何にして我言に超ゆる爾の謙卑と自由なる苦と
を忍ばん。

第二の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第一調。

十字架の武器は昔敬虔なるコンスタンティン帝に、戦の時に敵に對して、信に由る
勝たれぬ勝と顯れたり。仇敵の軍は之に慄く、此れ信者の爲には救、パウエルトロバリの爲

には誇と爲れり。

句、神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

昔塵土を以てアダムを造りし洪恩の主よ、爾は塵土の手にて頬を打たれ、十字架に釘せらるると、汚辱と、創痕とを忍べり。嗚呼奇蹟や、嗚呼多くの爾の恒忍や。主よ、光榮は爾の生を施す苦に歸す、爾は此を以て我等を救ひ給へり。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

主よ、光榮なる受難者は爾より苦の報賞たる尊き榮冠にて飾られたり、蓋創痕を忍ぶを以て不法の者に勝ち、神聖なる能力を以て天より勝利を獲たり。救世主よ、彼等の祈祷に因りて、我等をも見えざる敵より脱れしめて、我等を救ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

ハリストスよ、純潔なる母は爾が十字架に上げられて死せしを觀て呼べり、父及び聖神と同無原なる吾が子よ、斯の爾の言ひ難き攝理は何ぞ、洪恩なる主よ、爾

第一調 金曜日の早課 一九一

第一調 金曜日の早課 一九二

は此を以て爾の至淨なる手の造物を救ひ給へり。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

言よ、日は爾光榮の日は大慈憐に由りて、甘じて十字架の木に身にて懸けられしを觀る時、狂妄に忍びずして晦みたり。祈る、イイススよ、我が味まされし靈を爾の近づき難き光を以て照して、我を救ひ給へ。

洪恩なる主よ、爾は甘じて十字架に釘せられて、我等の朽ちたる性を神成し、殺人なる蛇を殺せり。祈る、爾の尊き十字架を以て正教を平安の中に堅め、異端者の興るを止め給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

至淨なる者よ、我等爾の保護を獲て、爾の祈祷に由りて患難より救はれ、爾の子の十字架にて常に諸方に護らる、故に皆職として敬虔に爾を崇め讃む。

尊貴にして生命を施す十字架の規程、其冠詞は、我主宰の尊き苦を崇め讃む。

イオシフ師の作。第一調。

第一歌頌

イルモス、我等凱歌を以て、エジプトにモイセイを助けて、彼を以てファラオンを全軍と偕に溺らしし神に謳はん、彼光榮を顯したればなり。

性に於て苦に與らざる言よ、爾は我等の爲に苦を忍び、盜賊と偕に十字架に釘せられて、惡の魁たる蛇を殺し、爾に伏拜する者を救ひ給へり。

東の東たるイイススよ、爾は西なる我等の退けられたる性に來り給へり。日は爾が十字架に釘せらるるを見て、己の光を隠せり。

致命者讃詞

光榮なる受難者よ、爾等は巧に暫時の死を以て永遠の生命に易へて、天國を獲たり。
故に讚榮讚美せらる。 **致命者讚詞**

聖なる致命者よ、爾等は勇ましくハリストスの苦に效ひて、奥密なる行動を以て地上
の者の苦を醫し、言を以て悪鬼を遠ざけ給ふ。

生神女讚詞

牝羊は羔たるハリストスが十字架に上げられしを見て、歎きて呼べり、無原なる子、
恒忍の主よ、爾の華麗は何處にか隠れたる。

又、至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イズライリを救ひ
し神に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

第一調 金曜日の早課 一九三

第一調 金曜日の早課 一九四

時に限られぬ神を時届りて人體を取りし者として生み給ひし獨至淨なる女幸よ、
我が至りて不當なる靈の時毎の諸慾を醫し給へ。

至淨なる童貞女よ、慈憐の者として、爾の祈祷を以て、我が靈の毀傷、心の迷惑、思
の昏昧、智慧の屈從を除き給へ。

光たる我が贖罪主を生みし至淨なる者よ、我を幽昧と永遠の苦より脱れしめ給へ、
我が救はれて爾の仁慈を歌頌せん爲なり。

至淨なる者よ、我諸罪の海に溺れ、諸慾の暴風に打たるる者は爾の平隱を呼ぶ、我
を救ひ給へ、爾は信者の港なればなり。

第三歌頌

イルモス、第二の天を水の上に固め、地を水に基づけし全能のハリストス神よ、願は
くは我が心は爾の旨に固められん。

主宰よ、爾は十字架に手を伸べ、神聖なる指を血に染めて、爾の手の造工たるアダ
ムを兇殺の手より救ひ給へり、獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

主宰よ、爾は戈を以て脅腹を刺されて、肋骨に由る蹟を起し、木に擧げられて、昔木
の果に由りて患難に遭ひし者を善智なる盜賊と偕に樂園に入れ給へり。

致命者讚詞

教會の固、正教の前柱、敵を滅しし者、主の致命者を、我等潔き念を以て歌頌し
て讚美すべし。 **致命者讚詞**

無形の葡萄樹の神聖なる枝たる致命者は、我等の爲に衆信者の心を樂しましむる忍耐
の酒を流す房を生じたり。 **生神女讚詞**

至りて讚美たる童貞女よ、爾の腹の果は祝福せられたり。彼は木の果に由りて朽ち
たる我等を、己の十字架に由りて、神聖なる恩寵を以て、不朽に與る者と爲し給へ
り。

又 同「イルモス」

至聖なる生神女、信者の扶助者よ、我が果を結ばざる思念の荒れたるを盡く除きて、我が靈を諸徳の果を結ぶ者と顯し給へ。

我等の爲に永遠の光を生みし至りて無玷なる者よ、我を凡の侵害、蛇の多くの誘惑、永遠の火及び幽暗より脱れしめ給へ。

潔き者よ、我畏るべき審判に於て答ふべきことなきに因りて、彼の滅えざる火に定罪せられん。至淨なる女宰よ、急ぎて我爾の僕を救ひ給へ。

潔き童貞女よ、神は人類を神成せん爲に爾に依りて、言と思とに超えて人と爲り給へり。故に我等衆信者は同心に爾を讃揚す。

第一調 金曜日の早課 一九五

第一調 金曜日の早課 一九六

第四歌頌

イルモス、預言者言へり、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れ、爾の作爲を悟りて爾の力を讃榮せり。

恩者なる主よ、爾は義なる立法者にして、罪犯者と偕に算へられて、木に擧げられたり、衆を義と爲さん爲なり。

爾日なる者が十字架に擧げらるるを見て、天使の衆軍は驚き、幽暗の首領は勝たれたり。

致命者讃詞

屬神の諸恩賜の中より醫治の恩賜を汲みたる致命者は、神の恩寵を以て、衆の爲に靈を滅す慾を洗ふ。

致命者讃詞

受難者は怠惰の眠を去りて、神聖なる徹醒と信とを以て猛獸の奮迅を眠らせて、喜びて苦を受けたり。

生神女讃詞

童貞女は哭きて云へり、哀しい哉子よ、是れ何ぞ、如何にして我爾生命を賜ふ者が木に擧げられて、非義に殺さるるを見る。

又

イルモス、預言者アウワクムよ、爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼べり、年の邇づく時爾は識られん、期の届る時爾は顯れん、主よ、光榮は爾の力に歸す。

生神童貞女、無玷の幕なる者よ、諸罪に汚されし我を爾の洪恩の潔き灑にて淨め、我に援助の手を授けて、呼ばしめ給へ、潔き神の聘女よ、光榮は爾に歸す。

童貞女よ、爾は智慧に超えて爾の中に入りし神の爲に聖にせられし殿と顯れたり。彼に我が諸罪の汚を淨めんことを祈り給へ、我等が聖神の殿及び居處とならん爲なり。

生神女、獨慈憐の泉を生みし者よ、我を憐みて、我が靈の甚しき毀傷と心の迷惑とを解き、終の至らざる先に我に涙の流と感傷と諸罪の赦とを與へ給へ。

聖なる生神女、人人に似んと欲せし至聖なる主を身にて生みし者よ、我等を聖にし給へ。至淨なる者よ、爾の祈祷を以て我等衆を天の國に與る者と顯し給へ。

第五歌頌

イルモス、人を愛する主宰、ハリストス我が神よ、朝に爾が誠の定の事を考ふる我等を永遠の明なる光にて照し給へ。

萬衆の審判者、獨慈憐なる主ハリストス我が神よ、爾は身にて十字架に擧げられて、爾を識らざる諸民を爾を識る知識に召し給へり。

第一調 金曜日の早課 一九七

第一調 金曜日の早課 一九八

義なる主よ、爾不義なる審判に立ちしに、先に定罪せられしアダムは義とせられて呼ぶ、恒忍なる主よ、光榮は爾が十字架に釘せらるることに歸す。

致命者讃詞

致命者よ、爾等は神の植えつけし樂園の如き者と顯れたり、爾等の尊き苦は、芳しき花の如く、衆信者の靈を薫らす。 致命者讃詞

美しき花及び繁き實の樹たる主の致命者、信の不死の果を盛に生じ、姦惡の根を絶しし者を我等歌頌せん。 生神女讃詞

凋まざる花を開きし尊き杖たる者は彼が木に擧げらるるを見て呼べり、主宰よ、我を子なき者と爲す勿れ。

又

イルモス、神の子よ、爾の平安を我等に與へ給へ、蓋我等は爾の外に他の神を識らず、爾の名を唱ふ、爾は生死者の神なればなり。

昔エデムの中に悪しき食は我を死者と爲せり。生命を生みし潔き者よ、其時木に縁りて死せし我を今生かして、感傷を與へ給へ。

純潔なる者よ我を甚しき菑害より救ひ、諸慾の汚より起し、爾の不當なる僕を悪鬼に執らはれて害せらるることより脱れしめ給へ。

至潔至淨なる者よ、我が靈の眸子を照して、常に我に神聖なる光明と爾の光榮とを仰がしめ給へ。我が慈憐と永遠の光榮とを獲ん爲なり。

潔き童貞女母よ、我等爾を雲と、樂園と、光の門、筵と、羊の毛と、世界の甘味なる「マンナ」を内に籠むる壺として識る。

第六歌頌

イルモス、人を愛する主よ、爾は預言者を鯨より救へり。祈る、我をも罪惡の深處より引き上げ給へ。

一切の尊貴より最高きハリストスよ、爾は汚辱を忍びて、十字架に擧げられたり、人人を尊貴なる者と爲さん爲なり。

ハリストス、吾が至仁なる神よ、爾は葦にて撃たれて、我詭譎者の奴隷と爲りたる者の爲に釋かるることを記す。 致命者讃詞

聖なる者よ、爾等は苦の病にて病なき終に就きて、言ひ難き欣喜を獲たり。

致命者讃詞

睿智なる者よ、爾等はハリストスを愛する愛の蕪炭に燃されたり、故に火に擲たれて焚かれざりき。

生神女讃詞

爾は産の前の如く、産の後にも純潔なる者として止まれり、木にて人を救ひし神

第一調 金曜日の早課 一九九

第一調 金曜日の早課 二〇〇

を生みたればなり。

又

イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ。

世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。

爾仁慈無玷の幕なる者に祈る、我多くの罪に汚されたる者を爾の轉達を以て凡の汚より滌ひ給へ。

潔き者よ、我度生の諸難の浪たつ海に荒らさるる者の爲に舵師と爲りて、永遠の港に導きて、我を救ひ給へ。

意念の騷擾、諸慾の攻撃、諸罪の深處は我が不當なる靈を溺らす。聖なる女幸よ、我を援け給へ。

成聖の幕たる神の聘女マリヤよ、逸樂に汚されたる吾が不當なる靈を聖にし給へ。

第七歌頌

イルモス、救世主よ、爐は露を注がれ、少者は樂しみて歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

爾は十字架に釘せられて造物を震はせ、殺されて蛇を殺し給へり。ハリストス、

我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

恒忍なる主は瞻を飲ませられて、我甘き食に縁りて樂園の糧を奪はれたる者の爲に救の甘味を流し給ふ。

致命者讃詞

致命者は鐵搭にて搔かれて、死に屬する者の羸笨を去りて、神より神聖なる華麗を受け給へり。

致命者讃詞

勇敢なる致命者は其苦を以てハリストスの至淨なる苦に倣ひて、敵より受くる傷を輒く忍び給へり。

生神女讃詞

無玷なる生神女は主の十字架に釘せらるるを見て云へり、吾が子よ、哀しい哉、信者の生命及び憑恃よ、如何ぞ死する。

又

イルモス、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、

其時三人口を以て、歌頌祝讃して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。

至淨なる神の聘女よ、諸慾に汚されたる吾が靈を聖にし給へ。潔き者よ、我が智慧の囚を釋き、心の迷惑、悪鬼の侵害を速に除き給へ。

至りて無玷なる者よ、肉體の慾に殺されし我が智慧を生かして、我を神の悦ぶ所

第一調 金曜日の早課 二〇一

おこな ため かた たま わ なんじ さんび つね なんじ じれん さんえい ため
 を行はん爲に堅め給へ、我が爾を讚美して、常に爾の慈憐を讚榮せん爲なり。
 ひとりかみ う どうていじよ はは わ にくたい よく ころ わ たましい けがれ すみやか あら われ きけつ
 獨神を生みし童貞女母よ、我が肉體の慾を殺し、吾が靈の汚を速に洗ひ、我を詭譎
 あくき くるしめ のが すく たま
 なる悪鬼の苛虐より脱れしめて、救ひ給へ。
 しんせい しょとく よそお いさぎよ どうていじよ なんじ ちち どう わげん ことば じつ その しょとく もつ
 神聖なる諸徳に妝はれたる潔き童貞女よ、爾は父と同無原なる言、實に其諸徳を以
 てん おお もの う たま かれ われら なた つね いの たま
 て天を蔽へる者を生み給へり。彼に我等を宥めんことを常に祈り給へ。

第八歌頌

いりり うち かしょう しょうしゃ すく はげ ほのお つゆ へん かみ うた
 イルモス、爐の中に歌頌せし少者を救ひて、烈しき焰を露に變ぜしハリストス神を歌
 ひて、萬世に讚め揚げよ。
 きゆうせいしゅ なんじ じゅうじか てい とき ぞうぶつ ふる ひ こうせん とど いわ さ じごく
 救世主よ、爾が十字架に釘せられし時、造物は震へり、日は光線を停め、磐は裂け、地獄
 なんじ けんとう た いそ そのとりこ
 は爾の權能に勝へずして、急ぎて其虜を還せり。
 こうおん しゅ なんじ とお もの ていざい ため ていざい う はだか おぼ もの ため
 洪恩なる主よ、爾は遠ざけられし者の定罪の爲に定罪を受け、裸なるを覚えし者の爲
 はだか き かか なんじ けんとう ごうにん おおい かな
 に裸にして木に懸りたり。爾の權能と恒忍とは大なる哉。

致命者讚詞

むけい もの どうじゅうしや ぐんし じゅうじか よろい ごと ぐそく てき たたか うるわ
 無形の者の同住者たるハリストスの軍士は十字架を鎧の如く具足し、敵と戦ひて、美
 しき足にて之を踏みたり。 致命者讚詞

ゆうかん もの てつかせ さいばん しょ なか た ひやくたい すんだん まよい たてもん こぼ あくき
 勇敢なる者は鐵楯にて裁判所の中に立ち、百體寸斷せられて、迷謬の造築を毀ち、悪鬼
 の祭壇を壊れり。 生神女讚詞

てん たか もの ゆいいち しじょうしや き あ てき おごり たお み こうせい かれ
 天より高き者は唯一至上者が木に擧げられて、敵の驕傲を倒すを見て、高聲にて彼を
 かしょう
 歌頌せり。

又

しよてんし ことごと ぐん ぞうぶつしや およ しゅ おそ もの しさい かしょう
 イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、
 しょうしや さんえい ひとびと あが ぼんせい ほ あ
 少者よ、讚榮し、人人よ、崇めて萬世に讚め揚げよ。

しじょう もの にくたい もの かみ かな ごと なんじ にくたい と たま わ にくたい よく ころ
 至淨なる者よ肉體なき者は神に適ふが如く爾より肉體を取り給ふ。我が肉體の慾を殺
 つみ ころ わ たましい い かれ いの たま
 して、罪に殺されし吾が靈を生かさんことを彼に祈り給へ。

しじょう もの なんじ いたみ いや きゆうせいしゅ およ かみ う たま
 至淨なる者よ、爾は塵土のアダムアダムの毀傷を醫す救世主及び神を生み給へり。
 はなはだ や わ たましい きず いや くれ いの たま
 甚しく病める吾が靈の創痕を醫さんことを彼に祈り給へ。

いさぎよ もの あく ふかみ ふ われ おこ いまわれ たたか てき か たま しじょう もの ふとう
 潔き者よ、悪の深處に臥す我を起して、今我と戦ふ敵に勝ち給へ。至淨なる者よ、不當
 いつらく なる 逸樂にて残はれたる我が靈を棄てずして、我を憐みて救ひ給へ。

しじょう もの われら なんじ しゆくさん かみ おんちやう こうむ しょうしんじよ し もの かみ ささ
 至淨なる者よ、我等爾を、祝讚せられて神の恩寵を蒙れる生神女と識る者は、神に捧
 なんじ ねむ きとう よ もろもろ いざない すく
 ぐる爾の眠らざる祈禱に因りて、諸の誘惑より救はる。

次ぎて生神女の歌、「我が靈は主を崇め」、及び躬拜。

第九歌頌

イルモス、モイセイが見し焚かれぬ棘 イアコフが見し活ける梯、ハリストス我が神

が過りし天の門たる 潔き母よ、我等歌を以て爾を崇め讃む。
嗚呼如何ぞ不順の民は爾を十字架に付したる。獨恒忍なる主よ、爾が甘じて貧しく
なりて、苦を受け給ひしは、陥りしアダムの子孫を悉く苦より救はん爲なり。
ハリストスよ、爾が身にて耻づべき十字架の釘殺を受けしは、無知なる慾に汚され
て、古の華麗を失ひし人を尊き者と爲さん爲なり。光榮は智慧に超ゆる爾の慈憐
に歸す。

致命者讃詞

入らざる日ハリストスよ、爾は夙に爾に奉事して、苦の暗を過ぎたる者を、爾の指塵
を以て爾の言ひ難き光榮と光照との光に導き給へり。求む、彼等の祈祷に由りて我等
を照し給へ。

致命者讃詞

聖にせられし致命者の隊は無形の萬萬の敵に勝ち、聖なる萬萬の軍に合せられて、
全能者の指塵を以て常に吾が靈の萬萬の苦を醫し給ふ。

生神女讃詞

童貞女よ、身にて爾より輝きし光の光照を以て我が智慧を輝かし、心を照して、罪
の暗を逐ひ、我が煩悶の幽暗を盡く掃ひ給へ。

又

イルモス、光を放つ雲、萬有の主が雨の天より羊の毛に降るが如く降り、始なき者
が身を取りて我等の爲に人と爲りし所以の者を、我等皆我が神の潔き母として崇め
讃む。

潔き者よ、我罪に耽りて怠惰に生を送る者は公平なる審判に慄く。至淨なる神の
聘女よ、爾の聖なる祈祷を以て我を其時に定罪せらるるなく護り給へ、我が常に爾
を我の轉達者として讃美せん爲なり。

童貞女よ、我地上に多くの罪を行ひし者は審判及び爾の子の見ざる所なき目に慄く。
故に爾に呼ぶ、至りて慈憐なる潔き女宰よ、我を助けて、其時の患難より脱れしめ
て、我を救ひ給へ。

生神女よ、審判の日は如何にか畏るべき、應答は如何にか難き、患難は如何にか苦し
き、至淨なる女宰よ、其時孰か能く立たん。潔き者よ、我が多慾なる靈を憐みて、終
の至らざる先に我に赦を與へ給へ。

父より輝ける神聖なる光を生みし清淨無垢なる者よ、度生の誘惑に味まされて、

第一調 金曜日の早課 二〇五

第一調 金曜日の早課 二〇六

諸敵の哂と爲りし我が靈を宥めて、救を致す痛悔の光に與らしめ給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び躬拜。小聯禱、光耀歌。次に常例の聖詠。

挿句に十字架の讃頌、第一調。

我等は爾身にて木の上に釘せられて、我等に生命を賜ひし者を、救世主及び主宰と
して絶えず歌ふ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を楽しませ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

ハリストスよ、爾の十字架に因りて諸天使及び人人は一の牧群と爲り、天と地とは一の會に於て樂しみて呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主、吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。

致命者讚詞

人人皆來りて、歌頌と屬神の詩賦とを以てハリストスの受難者を尊まん。彼等は世界の燈、教の傳道師、信者の爲に醫治を注ぐ所の常に流るる泉なり。ハリストス我が神よ、彼等の祈祷に由りて爾の世界に平安、我等の靈に大なる憐を與へ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

牝羊たる純潔なる女宰は羔が美しき姿容なく、華榮なくして十字架に在るを觀て、哭きて云へり、哀しい哉最甘き者よ、爾の華榮は何にか隠れたる、最愛すべき吾が子よ、華麗は何にか在る、爾の姿容の輝ける恩寵は何にか在る。

~~~~~

### 金曜日の眞福詞、第一調。

敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時、我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

罪なきハリストスよ、爾は十字架に釘せられて、衆人の罪を取り、脅を刺されて、救の泉なる水と血とを流して、朽ちたる者を生かし給へり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

洪恩なる主イイスス神よ、爾は木に釘せられて、アダムの苦しき意念を悉く去り、爾の尊き傷にて悪鬼の大數に傷つけ給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

第一調 金曜日の眞福詞 二〇七

第一調 金曜日の眞福詞 二〇八

### 致命者讚詞

甘じて身にて苦を受けし主の苦に效ひたる光榮なる致命者よ、爾等は常に屬神の力を以て醫し難き苦を醫し、人人より諸病を退け給ふ。

### 光榮

我等は同能同尊なる三者を讚榮し、無原なる神父と、子と、聖神、唯一にして三位なる神元を熱信に崇め讚む。

### 今も

ハリストス<sup>かみ</sup>神<sup>み</sup>よ、身<sup>なんじ</sup>にて<sup>う</sup>爾<sup>もの</sup>を生<sup>なんじ</sup>みし者<sup>じゅうじか</sup>は爾<sup>てい</sup>が十字架<sup>み</sup>に釘<sup>な</sup>せられしを見て、哭<sup>い</sup>きて云へり、嗚呼<sup>ああ</sup>吾<sup>わ</sup>が子<sup>こ</sup>よ、法<sup>ほう</sup>に<sup>もと</sup>戻<sup>も</sup>る<sup>も</sup>エウレイ<sup>かい</sup>の會<sup>な</sup>は何<sup>むく</sup>をか爾<sup>い</sup>に報<sup>い</sup>いたる。

~~~~~

「主は神なり」を歌ふ時の「スポタ」の晩課早課及び聖體禮儀^{リトゥルギヤ}の奉事^{ミネヤ}の事^{ステイヒラ}。

金曜日には、晩課の常例の誦文の後に、「主よ、爾に籲ぶ」に月課經の聖人の讚頌^{ミネヤ}六章を歌ふ。光榮、若し之あらば、聖人の自調。若しなくば、光榮、今も、本調の第一の生神女讚詞。挿句に八調經の本調の致命者讚詞三章。光榮、若し之あらば、聖人の。若しなくば、光榮、今も、生神女讚詞。次に「主宰よ、今爾の言に循ひて云云」、及び聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讚詞。光榮、今も、本調の生神女讚詞。聯禱及び發放詞。

知るべし、若し使徒の一、或は大聖人の一、或は讚詞のあらざる聖人に遇はずば、「主は神なり」を歌はずして、「アイルイヤ」を第二調に据りて歌ふ。早課に六聖詠の後に「主は神なり」を歌ふ、聖人の讚詞^{トロバリ}の調に据る、及び其讚詞二次。光榮、今も、第一の生神女讚詞、聖人の讚詞^{トロバリ}の調に据る。次に第十六「カフィズマ」、「主我が主に謂へり云云」を誦文す、常例の如し。誦文の後に聯禱。八調經の致命者の二坐誦讚詞^{セダレン}、第一及び第二。光榮、今も、本調の第一の生神女讚詞。並に誦讀。其後「ネポロチニ」「道に玷なくして云云」を歌ふ。此の時司祭爐儀を行ふ。「ネポロチニ」の後に致命者の二坐誦讚詞^{セダレン}、第三及び第四、並に死者讚詞。光榮、今も、生神女讚詞。又誦讀。及び第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて云云」。次に規程三篇^{カノン}を歌ふ、即月課經

第一調 「主は神なり」を歌ふ時の「スポタ」の奉事 二〇九

第一調 「主は神なり」を歌ふ時の「スポタ」の奉事 二一〇

の聖人の、「イルモス」と共に六章、「イルモス」二次、讚詞^{トロバリ}四章（蓋「スポタ」に於ては常に此の規程を先にす）、其後聖人の堂の四章、終に八調經の致命者の四章。蓋死者の規程は金曜日の晩堂課に歌ふ。規程には歌頌、「主に歌はん」を附唱す。第三歌頌の後に月課經の聖人の坐誦讚詞^{ミネヤ}。光榮、今も、生神女讚詞。第六歌頌の後に、若し之あらば、聖人の小讚詞^{コンダク}及び同讚詞^{イコス}。并に祭日略解^{プロログ}を読む。第九歌頌の後に光耀歌、先に若し之あらば、聖人の。次に光榮、八調經の。今も、生神女讚詞。若しなくば、八調經の光耀歌、即「神として死者と生者とを司り云云」。光榮、今も、「生神女よ、我等は爾を以て誇り云云」。「凡そ呼吸ある者」に八調經の讚頌を歌はずして挿句に之を歌ふ。若し「凡そ呼吸ある者」に聖人の讚頌なくば、其時誦す、「主我等の神よ、光榮は爾に歸す云云」。若し「凡そ呼吸ある者」に聖人の讚頌あらば、其時「主我等の神よ、光榮は爾に歸す云云」を誦せずして、讚頌の後直に誦す、「光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す」。「至高には光榮神に歸し云云」。其後聯禱、「我等の朝の禱

を増して主に獻らん云云。次に挿句の讚頌を歌ふ、即八調經の「凡そ呼吸ある者」の三の致命者讚詞、第一、第二、第三を常例の附唱と共に歌ふ、其一「主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ云云」、其二「願はくは主吾が神の恵は我等に在らん云云」。一を措く。第四の死者讚詞はダマスキンリトルギヤの作。光榮、若之あらば、聖人の自調。若しなくば、光榮、今も、其生神女讚詞。「スポタ」の挿句の讚頌は之を用いず、此れ唯大齋の左の「スポタ」の早課に歌ふ、即第二第三第四の「スポタ」に、或は「ア Riluya」を歌ふに遇ふ時なり。其時挿句の讚頌を其死者の附唱と共に歌ふ。次に「至上者よ、主を讚榮し云云」、及び聖三祝文。「天に在す」の後に聖人の讚詞。光榮、今も、早課の生神女讚詞、聖人の讚詞の調に据る。聯禱、第一時課、發放詞、萬壽詞。之を終へて後前院に於て熱衷公禱を歌ふ、常例の如し。

聖體禮儀リトルギヤに眞福詞オクトイホは八調經の六章。若し聖體禮儀に聖人の歌頌あらば、其時聖人の第三歌頌四章、及び八調經の本調の四章。聖人の後に諸讚詞を誦すること左の如し、ハリストス或は生神女の堂ならば、先に堂の讚詞。次に本日の讚詞、トロバリ「使徒、致命者、及び預言者云云」。其後順序の聖人の讚詞、及び其小讚詞コンダク。若し讚詞及び小讚詞を有つ他の聖人あらば、之を誦せよ。若し「スポタ」に一の聖人にも讚詞或は小讚詞なくば、其時本日の讚詞の後に死者の爲の讚詞を誦す、「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。若し聖人或は聖女の堂ならば、「スポタ」に此の堂の讚詞を誦せず、蓋衆聖人は本日の讚詞の中に唱へられたり。光榮、小讚詞、「ハリストスよ、

第一調 「主は神なり」を歌ふ時の「スポタ」の奉事 二一
第一調 「主は神なり」を歌ふ時の「スポタ」の奉事 二二

爾が諸僕の靈を諸聖人と偕に云云。今も、「主よ、全世界は捧紳なる致命者を云云」。若し聖人或は聖女の堂ならば、其時聖人の後に諸讚詞トロバリを誦すること左の如し、先に本日の、「使徒、致命者、及び預言者云云」、次に順序の聖人の讚詞及び小讚詞トロバリ。若し之なくば、「主よ、仁慈なるに一因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。光榮、「ハリストスよ、爾の諸僕の靈を諸聖人と偕に云云」。今も、「主よ、全世界は捧紳なる致命者を云云」。ハリストス或は生神女の堂ならば、祭前期及び祭後期の外、同じく終に堂の小讚詞にあらずして、此の本日の小讚詞、今も、「主よ、全世界云云」を誦す。蓋「スポタ」に於てはハリストス及び生神女の堂の小讚詞を用いず、唯若し大聖人に遇はば、其時今も、生神女の堂の小讚詞コンダク。生神女の堂の小讚詞ボロキメンあらずば、「ハリストスティアニン等の辱を得ざる轉達云云」を誦す。提綱、使徒、ア Riluya、福音經、及び領聖詞は先に聖人の、次に本日の、蓋使徒及び福音經は主の祭日の外、常に聖人のを先にす。「スポタ」に「主は神なり」の歌はるる時、常に斯の奉事を行ふ。若し「スポタ」に主宰の祭日に遇はば、其時必祭日の全奉事を歌ふ。

~~~~~

### 「スポタ」に「アイルイヤ」を歌ふ時の奉事

金曜日の晩課に第十八「カフィズマ」を誦文す。次に「主よ、爾に籲ぶ」に月課經の聖人の讚頌三章、八調經の致命者讚詞三、即第二第三第四なり、第一を措く。光榮、今も、本調の主日の生神女讚詞。「隱なる光」。其後提綱。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩云云」。挿句に第一の致命者讚詞、及び死者讚詞二、ダマスクのイオアン師の作。光榮、今も、生神女讚詞。次に「主宰よ、今爾の言に循ひて云云」、及び聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、第二調、「使徒、致命者、及び預言者云云」。光榮、「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。今も、生神女讚詞、「言ひ難き光の聖なる母よ云云」。聯禱及び發放詞。并に常例の如く前院に出づ。

早課には、常例の始及び六聖詠の後に、「主は神なり」に代へて、第二調に据りて「アイルイヤ」を歌ふこと三次。次に第一句、「主よ、爾が選トバリび近づけし者は福なり」。第二句、「彼等の記憶は世に在らん」。第三句、「彼等の靈は福に居らん」。讚詞、第二調、「使徒、致命者、及び預言者云云」、二次。光榮、「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。今も、生神女讚詞、「言ひ難き光の聖なる母よ云云」。次に第十六「カフィズマ」。常例の聯禱。其後八調經の致命者の三坐誦讚詞の中第二及び第三を誦す、第一を措く。次に句、「神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり」、并に第四の致命者の坐誦讚詞を誦す。第一の生神女讚詞を措く。次に句、「主よ、爾が選

第一調 「スポタ」に「アイルイヤ」を歌ふ時の奉事 二一三

第一調 「スポタ」に「アイルイヤ」を歌ふ時の奉事 二一四

び近づけし者は福なり」、并に本調の死者の坐誦讚詞を誦す。光榮、今も、第二の生神女讚詞。并に誦讀。其後直に「道に玷なくして云云」、附唱、「主よ、爾は崇め讃めらる云云」と共に第二調に据りて歌ふ。「カフィズマ」を二段に分つ。第一段の後には光榮、今も、を誦せずして、左の句を歌ふ、「若し爾の律法我の慰とならざりしならば云云」、三次。并に司祭（輔祭あらば輔祭）寝りし者の爲に聯禱を誦す、「我等復又云云」。詠隊、主憐めよ、一次。又、寝りし神の諸僕（某）の靈の安息の爲云云」。詠隊、主憐めよ、一次。「主神が彼等の靈を云云」。詠隊、主憐めよ、一次。「彼等に神の憐と天國と云云」。詠隊、主賜へよ。輔祭、主に禱らん。司祭、「諸の靈神と諸の肉體との神云云」。詠隊、主憐めよ、四十次。高聲「蓋爾は、ハリストス、我等の神よ云云」。詠隊、「アミン」。次に第二段を歌ふ、「我爾に屬す、我を救ひ給へ云云」。附唱、「救世主よ、我を救ひ給へ」。終は、「願はくは我が靈生きて爾を讚榮せん云云」、三次。次に「主よ、爾は崇め讃めらる云云」。並に安息の爲の讚詞を歌ふ、「聖人の群は生命の泉と云云」、其他。畢りて後に司祭或は輔祭上に記しし安息の爲の聯禱を誦して、寝りし者を記憶す。詠隊、主憐めよ、四十次を歌ひて、司祭が祝文、「諸の靈神と諸の肉體との神云云」を誦し畢るに至る。高聲の後に坐誦讚詞、第五調、「我が救世主よ、爾の諸僕を義人等と偕に云云」。光榮、今も、生神女讚詞、「童貞女より世

界に輝き云云」。并に誦讀。第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて云云」。次に規程、先に月課經の、「イルモス」と共に六章、次に本堂の四章、及び八調經の第一の規程四章。第三歌頌の後に常例の聯禱。小讚詞及び坐誦讚詞は月課經の。并に誦讀。第六歌頌の後に小讚詞、第八調、「ハリストスよ、爾の諸僕の靈を諸聖人と偕に云云」、及び同讚詞、并に祭日略解。第九歌頌の後に八調經の光耀歌。「凡そ呼吸ある者」に致命者讚詞四章。光榮、死者讚詞。今も、生神女讚詞。挿句に死者の讚頌、フェオファン師の作。光榮、今も、生神女讚詞。次に「至上者よ、主を讚榮し云云」、及び聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、第二調、「使徒、致命者、及び預言者云云」。光榮、「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。今も、生神女讚詞、「言ひ難き光の聖なる母よ云云」。并に聯禱。次に司祭、「永在の主ハリストス我等の神は云云」。詠隊、「神よ、我が今上皇帝云云」。第一時課、發放詞。時課には讚詞、「使徒、致命者、及び預言者云云」。光榮、「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。今も、時課の生神女讚詞。「天に在す」の後に小讚詞、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を諸聖人と偕に云云」。并に發放詞。

**聖體禮儀に**、眞福詞は八調經の六章。聖入の後に讚詞、「使徒、致命者、及び預言者云云」。并に「主よ、仁慈なるに因りて爾の諸僕の靈を記憶し云云」。光榮、小讚詞、

第一調 「スポタ」に「ア ril イヤ」を歌ふ時の奉事 二一五

第一調 死者祈禱禮儀 二一六

「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を諸聖人と偕に云云」。今も、生神女讚詞、「生神女、聘女ならぬ聘女、信者の救よ云云」。提綱、第六調、「義人よ、主の爲に喜び樂しめ」。句、「不法を赦され、罪を蔽はれたる人は福なり」。安息の爲に提綱、「彼等の靈は福に居らん」。使徒は「スポタ」の順序の誦讀、又安息の爲の。「ア ril イヤ」、第八調、「義人は呼ぶに云云」。句、「主よ、爾が選び近づけし者は福なり云云」。福音經は「スポタ」の順序の誦讀、又安息の爲の。領聖詞は「義人よ、主の爲に喜べ云云」、又、安息の爲の、「主よ、爾が選び近づけし者は福なり云云」。

~~~~~

死者祈禱禮儀

金曜日晚課の發放詞の後、司祭は祭袍を、輔祭は祭衣を衣、香爐及び乳香を執りて、前院に出づ、幫堂者燭臺を持して前行す、衆彼等に隨ふ。前院には檯上に糖飯の置けるあり、司祭、我等の神は祝讚せらる云云と誦して、糖飯の四周に爐儀を行ふ。誦經第九十聖詠至上者の覆の下に居る者は云云を誦す。（若し晚課或は早課の後にあらずして、他の時に行はば、始は常例の如し、即聖三祝文、「天に在す」の後に司祭高聲、「蓋國及び權能」、次に主憐めよ、十二次、光榮今も、來れ、我等の王神に叩拜せん、三次、後第九十聖詠。）畢りて後光榮、今も、「ア ril イヤ」三次、并に死者の聯禱。

われら あんわ しゅ いの
我等安和にして主に祷らん。

詠隊、主憐めよ。

うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に祷らん。

ふく きおく おい うつ もの しよざい ゆるし ため しゅ いの
福たる記憶に於て移りし者の諸罪の赦の爲に主に祷らん。

つね きおく およ かみ しよぼく あんそく へいおん ふく きおく ため しゅ いの
常に記憶せらるる神の諸僕(某)の安息と、平隠と、福たる記憶の爲に主に祷らん。

かれら およ じゆう ふじゆう つみ ゆるし ため しゅ いの
彼等に凡そ自由と不自由との罪の赦さるるが爲に主に祷らん。

かれら ていざい こうえい しゅ おそ ほうざ まえ た ため しゅ いの
彼等が定罪せられずして光榮の主の畏るべき寶座の前に立つが爲に主に祷らん。

な かな なぐさめ う のぞ もの ため しゅ いの
嘆き哀しみてハリストスより慰藉を受くるを望む者の爲に主に祷らん。

かれら およそ やまい かなしみ なげき と かみ かんばせ ひかり かがや ところ い
彼等が凡の病と、悲と、歎息より釋かれて、神の顔の光の輝く處に入れらるる
が爲に主に祷らん。

しゅ わ かみ かれら たましい ひかり ところ しげ くさば あんそく ところ しゅうぎ ひと お ところ い
主我が神が彼等の靈を光る處、茂き草場、安息の處、衆義人の居る處に入る

第一調 死者祈祷禮儀 二一七

第一調 死者祈祷禮儀 二一八

るが爲に主に祷らん。

かれら しろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
彼等がアウラアムとイサアクとイアコフとの懷に算へ置かるるが爲に主に祷らん。

われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
我等諸の憂愁と、忿怒と、危難とを免るるが爲に主に祷らん。

かみ なんじ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

かれら およ われら しゅうじん ため かみ あわれみ てんごく しよざい ゆるし もと ことごと われら
彼等及び我等衆人の爲に神の憐と、天國と、諸罪の赦とを求めて、悉くの我等の
生命を以てハリストス神に委託せん。

詠隊、主爾に。

しゅ なんじ けだしなんじ われら かみ おむ なんじ しよぼく つね きおく こ
司祭高聲、蓋爾は、ハリストス我等の神よ、寝りし爾の諸僕、常に記憶せらるる斯
の聖堂の建立者、我等の諸父及び兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の「ハリ
ステアニン」等の復活と、生命と、安息なり。我等光榮を爾と、爾の無原の父と、
しせい しぜん いのち ほご なんじ しん けん いま なにとき よよ
至聖至善にして生を施す爾の神とに獻ず、今も何時も世々に、「アミン」。

次ぎて「ア ril イヤ」三次、第八調。句を誦すること左の如し。

しゅ なんじ えら ちか もの さいわい
第一句、主よ、爾が選り近づけし者は福なり。

かれら きおく よよ あ
第二句、彼等の記憶は世世に在らん。

かれら たましい ふく お
第三句、彼等の靈は福に居らん。

次に讚詞、第八調。

ゆいいち ぞうせいしゅ ふか ちえ じんじ もつ ばんじ おさ しゅうじん こと たま しゅ なんじ
惟一の造成主、深き智慧と仁慈とを以て萬事を治め、衆人に益ある事を賜ふ主よ、爾
の諸僕の靈を安ぜしめ給へ、蓋彼等は爾造物主と造成主と我が神に恃頼を負はせ
たればなり。二次。

光榮、今も、生神女讚詞。

しょうしんじょ よめ よめ しんじや すくい われら なんじ かき みなと およ なんじ う かみ まえ
生神女、聘女ならぬ聘女、信者の救よ、我等は爾を垣牆と港、及び爾が生みし神の前
に嘉く納れらるる祈祷者として有つ。

其後第十七「カフィズマ」、「道に玷なくして」、附唱、主よ、爾の諸僕の靈を憶ひ給

へ、第二調に依りて歌ふ。左列詠隊第二句を歌ふ。斯く、兩爾詠隊 ^{かわるがわる} 更 相續ぎて以下の句を歌ふ。「カフィズマ」を二段に分つ、第一段の後には光榮今もを誦せずして、直に左の句を誦す。

若し爾の律法我の慰とならざりしならば、我は我が禍の中に及びしならん。

我永く爾の命を忘れざらん、爾此を以て我を生かせばなり。三次。

次に司祭（輔祭あらば輔祭）先に寝りし者の爲に聯禱を誦す。

我等復又安和にして主に禱らん。

詠隊、主憐めよ。

第一調 死者祈禱禮儀 二一九

第一調 死者祈禱禮儀 二二〇

又寝りし神の諸僕（某）の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と不自由との罪の赦されんが爲に禱る。詠隊、主憐めよ。

主神が彼等の靈を諸義人の安息する所に入れ給はんことを禱る。

詠隊、主憐めよ。

彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜はんことをハリストス我が死せざる王及び神に求む。詠隊、主賜へよ。

輔祭、主に禱らん。詠隊、主憐めよ。四十次。

司祭祝文を黙誦す。

諸の靈神と諸の肉體との神、死を滅し、悪魔を虚しくし、爾の世界に生命を賜ひし主よ、爾親ら寝りし爾の諸僕（某）の靈を光る處、茂き草場、平安の處、病と悲と歎息との遠ざかりし處に安息せしめ、善にして人を愛する神なるに因りて、彼等が或は言、或は行、或は思にて犯し悉くの罪を赦し給へ。蓋人一も生きて罪を行はざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠の義、爾の言は眞實なり。

高聲、蓋爾は、ハリストス我等の神よ、寝りし爾の諸僕云云

兩詠隊第二段の諸句を更歌ふ、附唱、主よ、爾の諸僕の靈を安ぜしめ給へ。終りて後に句、願はくは我が靈生きて云云 終に至るまで歌ふこと三次。

次に安息の爲の諸讚詞、第五調に依りて歌ふ。

附唱、主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。

聖人の群は生命の泉と天堂の門とを得たり、願はくは我も痛悔を以て道を得んことを。我は及びし羊なり、救世主よ、我を呼び返して救ひ給へ。

主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。

神の羔を傳へ、己も羔の如く屠られて、老いざる永久の生命に移りし聖なる致命者よ、我等に罪債の赦を賜はんことを切に祈り給へ。

主よ爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。

狭く苦しき路を過りて、生ける中十字架を衡の如く負ひ、信じて我に従ひし衆人よ、來りて、爾等の爲に備へたる褒賞と天の榮冠とを樂しめよ。

主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。
我は罪惡の創を負へども、爾が言ひ難き光榮の像なり。主宰よ、爾の造りし者に憐
を垂れ、爾の恵にて淨め、切に望める生國を我に與へて、我を復樂園に住む者と
爲し給へ。

主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。

第一調 死者祈祷禮儀 二二一

第一調 死者祈祷禮儀 二二二

昔我を無より造りて、爾が神たる像にて飾り、戒を犯すに因りて復我を我が出で
し地に歸し主よ、我を神の肖に適ふ位に升せ、古の華麗を以て我を改め給へ。
主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓へ給へ。
神よ、爾の諸僕を安ぜしめて、聖人の群と義人が日の如く光れる樂園に入れ給へ。爾
の眠りし諸僕を安ぜしめて、其悉くの過を思ふ勿れ。

光榮、聖三者讃詞。

一の神性の三の光を敬み歌ひて呼ぶ、無原の父と、同無原の子と、聖神よ、爾は聖
なり。我等信を以て爾に勤むる者を照して、永遠の火を免れしめ給へ。

今も、生神女讃詞。

衆人の救の爲に身にて神を生みし潔き者よ、慶べ、人の族は爾に因りて救を得た
り。潔くして讃美たる生神女よ、願はくは我等爾に因りて樂園を得んことを。

次ぎて「ア riluiヤ」、三次。其後聯禱、司祭寝りし者を記憶す、上に「ネポロチニ」
の中間に記ししが如し。若し「ネポロチニ」を歌はずば、其時「ア riluiヤ」の後に讃詞、
「惟一の造成主」、及び其生神女讃詞を歌ひて、直に「主よ、爾は崇め讃めらる、」
並に讃詞、「聖人の群は」、其他。後に司祭寝りし者を記憶す、上に示ししが如し。

高聲の後に死者の坐誦讃詞、第五調。

我が救世主よ、爾の諸僕を義人等と偕に安ぜしめて、録しし如く、之を爾の庭に居
らしめ給へ。爾の仁慈なるに因りて、其自由と自由ならざる、其凡そ知ると知らざ
る罪を恕し給へ、爾は人を愛する主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

童貞女より世界に輝き、彼を以て光の諸子を顯ししハリストス神よ、我等を憐み給
へ。

次ぎて第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。

其後八調經の中にある本調の死者の規程、四句を立つ。第三歌頌の後に「イルモス」
及び聯禱、司祭は寝りし者を記憶す、上に「ネポロチニ」の中間に記ししが如し。高
聲、「蓋爾は、ハリストス我等の神よ」。

次ぎて坐誦讃詞、第六調。

誠に物皆虚し、生命は影なり、夢なり、凡そ地に生れし者は徒に忙し、聖書に云
ひしが如く、我等全地を獲るも遂に墓に入らん、彼處には諸王と貧しき者と共に在り。

ゆえ 故にハリストス神よ、世を逝りし爾の諸僕を安ぜしめ給へ、爾は人を愛する

第一調 死者祈祷禮儀 二二三

第一調 死者祈祷禮儀 二二四

主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

至聖なる生神女よ、我が生ける中我を棄つる勿れ、我を人の轉達に委ぬる勿れ、親ら我を護りて救ひ給へ。

第六歌頌の後に「イルモス」及び聯禱、司祭寝りし者を記憶す、前に示ししが如し。

高聲、「蓋爾は、ハリストス我等の神よ」。

次ぎて小讃詞、第八調。

ハリストスよ、爾が諸僕の靈を諸聖人と偕に、疾も悲も歎もなくして、終なき生命のある處に安ぜしめ給へ。

同讃詞

人を造りし主よ、爾は獨死せざる者なり、我等地の者は、土より造られて、復土に逝かん、爾我を造りし主の命じて我に言ひしが如し、爾土にして土に歸らんと。我等人人皆彼處に往き、墓の上に哭きて歌ひて云はん、「アイルイヤ」、「アイルイヤ」。「アイルイヤ」。

第九歌頌の後に司祭誦す、生神女及び光の母を歌を以て讃め揚げん。詠隊、主よ、諸神と義人等の靈とは爾を崇め讃めん。並に第九歌頌の「イルモス」を歌ふ。

次に聖三祝文、「天に在す」の後に左の讃詞を歌ふ、第四調。

人を愛する救世主よ、死せし義人等の靈と偕に爾の諸僕の靈を安ぜしめて、彼等を爾に在る福樂の生命に護り給へ。

讃詞、同調。

主よ、爾の諸聖人の安息する處に爾の諸僕の靈を安ぜしめ給へ、爾獨人を愛する主なればなり。

光榮

爾は地獄に降りて繋がれし者の鎖を釋きたる神なり、親ら爾の諸僕の靈をも安ぜしめ給へ。

今も、生神女讃詞。

獨潔く玷なき童貞女、種なくして神を生みし者よ、彼等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次に司祭（輔祭あらば輔祭）聯禱を誦す。

神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ。

詠隊、主憐めよ。三次。

又寝りし神の諸僕（某）の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と不自由との罪の

第一調 死者祈祷禮儀 二二五

赦されんが爲に禱る。 詠隊、主憐めよ。 三次。
主神が彼等の靈を諸義人の安息する所に入れ給はんことを禱る。

詠隊、主憐めよ。 三次。
彼等に神の憐と天國と諸罪の赦とを賜はんことをハリストス我が死せざる王及び神に求む。

詠隊、主賜へよ。
輔祭、主に禱らん。

司祭祝文、「諸の靈神と諸の肉體との神」。斯の中に古世より死せし吾が諸父兄弟、此處と諸方とに葬られたる正教の「ハリストティアニン」等を記憶す。高聲、「蓋爾は、ハリストス我等の神よ」。

次ぎて司祭或は輔祭誦す、睿智。詠隊、「ヘルワイムより尊く」。司祭、ハリストス神我等の特よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。詠隊、光榮、今も、主憐めよ。 三次。福を降せ。

司祭發放詞を誦す、

死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、克肖棒神なる吾が諸神父、及び諸聖人の祈祷に因りて、我等に別れし其諸僕の靈を諸義人の住所に入れ、アウラムの懷に安ぜしめ、諸義人の列に加へ、及び我等を憐み給はん、善にして人を愛する主なればなり。

發放詞の後に輔祭高聲にして誦す。

主よ、寝りし爾の諸僕(某)に其福たる寝に永遠の安息を與へて、彼等に永遠の記憶を爲し給へ。

詠隊歌ふ、永遠の記憶。 三次。

輔祭のなき處には詠隊歌ふ、寝りし神の諸僕(某)に永遠の記憶。

斯の祈祷禮儀は毎金曜日に行ふべし、其時寝りし我が諸父兄弟の記憶の爲に糖飯を備ふ。



「スポタ」に多燭詞ある聖人に遇ふ時の奉事の事

金曜日の晩課に、第一「カフィズマ」「悪人の謀に行かず云云」の第一倡和詞を歌ふ。
「主よ、爾に籲ぶ」に聖人の讚頌六章。光榮、聖人の自調。今も、本調の第一の生神女讚詞。

第一調 「スポタ」に多燭詞ある聖人に遇ふ時の奉事の事 二二七

第一調 「スポタ」に多燭詞ある聖人に遇ふ時の奉事の事 二二八

若し徹夜禱ある大聖人にして聖務長が徹夜禱を行はんと欲せば、左の如し。

小晩課に聖人の讚頌四章を歌ふ。光榮、聖人の自調。今も、常例の生神女讚詞、聖人の調に据る。挿句に聖人の讚頌。光榮、若し之あらば、聖人の。若しなくば、光榮、今も、生神女讚詞。聖三祝文の後に聖人の讚詞。光榮、今も、生神女讚詞、本調に据る。小聯禱、主日の晩課に指定せしが如し、并に發放詞。

大晩課には、「悪人の謀に行かず」の後に「主よ、爾に籲ぶ」に聖人の讚頌八章。光榮、聖人の。今も、本調の第一の生神女讚詞。若し祭前期或は祭後期ならば、「主よ、爾に籲ぶ」に祭日の讚頌三、及び聖人の五。光榮、聖人の。今も、本調の生神女讚詞。聖入。本日の提綱。聖人の喩言三篇。熱衷公禱に本堂の、及び聖人の讚頌。光榮、聖人の。今も、生神女讚詞、聖人或は祭日の調に据る。挿句には聖人の讚頌。光榮、聖人の。今も、生神女讚詞、聖人或は祭日の調に据る。餅の祝福の時に聖人の讚詞、二次、及び「生神童貞女よ、慶べよ云云」、一次。「願はくは主の名は崇め讃められて云云」を歌ふこと三次。第三十三聖詠、「我何の時に主を讃め揚げん云云」、終は「唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし」。聖人の傳を読む。

早課には、「主は神なり」に聖人の讚詞、二次。光榮、今も、本調の第一の生神女讚詞。若し祭前期或は祭後期ならば、祭日の讚詞、二次。光榮、聖人の。今も、祭日の。次に第十六「カフィズマ」。聯禱。聖人の坐誦讚詞、二次。光榮、今も、生神女讚詞。并に誦讀。其後第十七「カフィズマ」、「道に玷なくして云云」。之を誦する時、司祭爐儀を行はずして、多燭詞の時に行ふ。次に聖人の坐誦讚詞、二次。光榮、今も、生神女讚詞。并に誦讀。其後聖人の多燭詞、及び坐誦讚詞、二次。光榮、今も、生神女讚詞。并に誦讀。品第詞、第四調の第一偈和詞。聖人の提綱。「凡そ呼吸ある者」。福音經。第五十聖詠。畢りて後聖人の讚頌。次に「神よ、爾の民を救ひ云云」。司祭高聲、「爾が獨生子の仁慈と慈憐云云」。詠隊、「アミン」。其後生神女の規程、「イルモス」と共に六章を歌ふ、「イルモス」二次、讚詞四章。若しハリストス或は生神女の堂、又若し祭前期或は祭後期ならば、同じく規程「イルモス」と共に六章を歌ひ、并に聖人の八章を歌ふ。共頌は規定の如し。第三歌頌の後に祭前期或は祭日の小讚詞。次に聖人の坐誦讚詞、二次。光榮、今も、其生神女讚詞、或は祭日の。第六歌頌の後に聖人の小讚詞及び同讚詞。次に祭日略解を読む。第九歌頌の後に聖人の光耀歌、二次。光榮、今も、其生神女讚詞、或は祭日の。「凡そ呼吸ある者」に聖人の讚頌四章。若し祭後期ならば、「凡そ呼吸ある者」に六章、即當日の挿句の祭日の三、及び聖人の三なり。光榮、聖人の自調。今も、生神女讚詞、聖人の、或は祭日の調に据る。大詠頌。次に聖人の讚詞。光榮、今も、本調の主日の生神女讚詞、或は祭日の。聯禱、發放詞及び第一時課。第一時課に聖人の讚詞。若し祭前期或は祭後期ならば、祭日の

第一調 「スポタ」に多燭詞ある聖人に遇ふ時の奉事の事 二二九

第一調 「スポタ」に多燭詞ある聖人に遇ふ時の奉事の事 二三〇

の讚詞。光榮、聖人の。今も、時課の生神女讚詞。「天に在す」の後に聖人の小讚詞。若し祭前期或は祭後期ならば、祭日の小讚詞を更 誦す。最後の發放詞。

リトウルギヤ

聖體禮儀には、眞福詞は聖人の、第三及び第六歌頌。若し祭後期ならば、祭日の順序の歌頌、及び聖人の第六歌頌。聖入の後にハリストスの、或は生神女の堂の讃詞、次に本日の聖人の。光榮、其小讃詞。今も、生神女の堂の。生神女の堂のあらざる所には、今も、「ハリストティアニン等の辱を得ざる轉達云云」。祭前期或は祭後期ならば、今も、祭前期の、或は祭日の小讃詞。若し主の祭の祭前期或は祭後期にして、堂がハリストスのならば、其時堂の讃詞及び小讃詞を誦せずして、祭前期或は祭後期の讃詞及び小讃詞を誦す。生神女の堂のは主の祭の祭前期或は祭後期に誦せず。聖人の提綱、使徒、ア rilルイヤ、福音經、及び領聖詞は徹夜禱の聖人の。若し多燭詞あらば、本日のをも加ふ。



金曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に聖致命者と成聖者と克肖者との讃頌、第一調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

致命者の凱旋は大なる哉、彼等は勇ましく苦を受けて、己の血の流にて悪鬼の大數を溺らし、諸の汚はしき祭を止め、偶像の迷を破れり。今は我等の靈に平安と大なる憐とを賜はんことをハリストスに祈り給ふ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

聖にせられし諸牧師は睿智なる言と教とを以て、衆人に惟一の神性の中に三位を讃榮して、敬みて位を混淆するなく分離するなからんことを教へたり。今は我等の靈に平安と大なる憐とを賜はんことを祈り給ふ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

克肖者の會は肉體の慾を眠らせ、希望を制し、天使と均しき度生を顯せり。故に今日の居處に樂しみて、我等の靈に平安と大なる憐とを賜はんことをハリストスに祈り給ふ。

又、致命者の讃頌、同調。

第一調 金曜日の晩課 二三一

第一調 金曜日の晩課 二三二

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

主よ、衆聖人及び生神女の祈禱に因りて、爾の平安を我等に與へ、我等を憐み給へ、爾獨洪恩の主なればなり。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

聖なる者よ、裁判に於ける爾等の承認は悪魔の力を辱め、人人を迷より解きたり。故に爾等は首の斬らるる時呼べり、人を愛する主よ、願はくは我が靈の祭は爾の前に嘉く納れられんことを、我等爾を愛して、暫時の生命を顧みざればなり。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

嗚呼聖なる者よ、爾等の貿易は善なる哉、蓋血を與へて、天の者を嗣ぎ、暫時苦しみて、永遠に歡ぶ。實に爾等の貿易は善なり、朽壞の者を棄てて、不朽の者を受けたればなり。今諸天使と偕に祝ひて、絶えず一體の聖三者を歌ふ。

光榮、今も、生神女讃詞。

人より生れて主宰を生みし全世界の光榮と天の門なる童貞女マリヤ、諸天使の歌、諸信者の飾なる者を讃め歌ふべし。彼は天と均しく、神の宮と均しき者として顯れたり、彼は仇の隔を破りて和睦を締む、國を開けり。我等は彼を信の固と爲し、彼より生れし主を扨ぎ衛る者と爲す。勇めよ、神の民よ、勇めよ、主は敵に勝たん、全能者なればなり。

次ぎて「穩なる光」。

挿句に致命者讃詞、第一調。

至りて讚美たる致命者よ、地は爾等を隠さず、天は爾等を受けたり、樂園の門は爾等の爲に啓かれ、爾等は其内に入りて、生命の樹を以て慰む。我等の靈に平安と大なる憐とを賜はんことをハリストスに祈り給へ。

死者の讃頌

孰の生命の喜か哀を聞へざらん、孰の榮か變なく地に住まらん、皆影よりも儂く、皆夢よりも虚し、瞬く間に死は皆之を奪ふ。ハリストスよ、爾が顔の光と爾が美麗の樂との處に選びし者を安んぜしめ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

死者の讃頌

獨不死なる者よ、人人の中に一も罪なき者なし。唯爾は罪なし、故に洪恩なる神として、爾の諸僕を天使の品位と共に光の中に入れ給へ。爾の慈憐に由りて不法

第一調 金曜日の晩課 二三三

第一調 金曜日の晩堂課 二三四

を顧みずして、彼等に赦を與へ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

神の聘女よ、諸預言者が傳へし爾の産の大事は實に智慧に超えて神妙なり。讚美たる者よ、爾の受孕と産とは皆至榮にして曉り難く、言ひ難し、神は仁慈なるに因りて、此を以て世界を救ひ給へり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、及び發放詞。



金曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第一調。

第一歌頌

イルモス、我等皆凱歌を以て、高き手にて神妙なる奇蹟を行ひて、イスライリを救ひし神に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

至淨なる生神女よ、爾を呼ぶ者の爲に爾は救の港及び庇蔭なり。故に我も靈を全くして熱切に爾に呼ぶ、女宰よ、我を救ひ給へ。

至淨なるマリヤ、造成主の母よ、慈憐寛容なる者として、諸慾諸罪に朽ちたる我が卑微なる靈を醫し給へ。 **光榮**

聘女ならぬ聘女・女宰よ、常に爾の庇蔭に趨り附く者の爲に絶えず我が造成主及び神に祈りて、我に憐を垂れ給はんことを求め給へ。

今も

王の活ける宮及び火の状の寶座よ、聖なる致命者及び使徒と偕に、我等を諸難より救はんことを常にハリストスに祈り給へ。

第三歌頌

イルモス、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり。此の石の上にハリストスは異邦より贖ひし教會を堅め給へり。

女宰よ、諸罪の暗は我が心を圍む、我敢て目を舉げて天を視るを得ず。故に呼ぶ、ハリストスの戒を以て我が靈の智慧と心とを照し給へ。

我爾の神聖なる像を仰ぎて、原像なる爾主宰の至淨なる母を尊み、之に接吻し、之に伏拜して、爾及び爾の子を讚榮す。

光榮

童貞女よ、我が肉體の不當なる望を制し、諸慾の焰を滅し給へ。詭譎なる蛇は

第一調 金曜日の晩堂課 二三五

第一調 金曜日の晩堂課 二三六

此等に由りて諸罪の緻密なる網を編みて、我を執へて滅さんと欲す。

今も

生神女よ、言は爾に藉りてアダムを衣て、全き人性を有ちて出でたり。彼に祈りて、我等を諸慾諸難及び永遠の火より救はんことを求め給へ。

第四歌頌

イルモス、預言者アウクムよ爾は神にて言が人體を取るを預見して、傳へて呼べり、年の邇づく時爾は識られん、期の屆る時爾は現れん、主よ、光榮は爾の力に歸す。

萬有の造成主及び贖罪主を生みし童貞女よ、爾は言ひ難き能力と勝たれぬ堅固とを有ちて、信を以て爾に就く者を救ひ給ふ。故に我爾に呼ぶ、世界の女宰よ、我を援

たま
け給へ。

じよさい われ たたか わけい ぞくしん てき つね わ ふとう こころ せ もの たお しんせい
女宰よ、我と戦ふ無形なる屬神の敵、常に我が不當なる心を攻むる者を仆して、神聖
なる穩静と平安とを與へ給へ、我が喜びて爾を歌頌せん爲なり。

光榮

たのみ もの たのみ まず もの たすけ な もの なぐさめ つみ おか もの きよめ まよ もの みちびき
憑恃なき者の憑恃、貧しき者の扶助、泣く者の慰藉、罪を犯す者の潔淨、迷ふ者の嚮導、
病む者の醫師、陷る者の提起なる生神女よ。我等を救ひ給へ。

今も

さんび いさぎよ どうていじよ ひとりしゅうじん のろい と もの なんじ はら い しゅ
讚美たる潔き童貞女マリヤ、獨衆人を詛より釋きし者よ、爾の腹より出でし主に
使徒、致命者、預言者と偕に祈りて、爾を歌ふ者の靈を救はんことを求め給へ。

第五歌頌

イルモス、かみ こ なんじ へいあん われら あた たま けだし われら なんじ ほか た かみ し
イルモス、神の子よ、爾の平安を我等に與へ給へ、蓋我等は爾の外に他の神を識ら
ず、爾の名を唱ふ、爾は生死者の神なればなり。

じよさい われ かんなん ゆうしゅう にくたい しよよく ふかみ すく わ たましい しんせい へいおん
女宰よ、我を患難と、憂愁と、肉體の諸慾との深處より救ひて、我が靈を神聖なる平穩
に護り給へ。

いた むてん もの なんじ わ しょうがい おい わ ため ねっしん けんご まもり ゆえ
至りて無玷なる者よ、爾は我が生涯に於て我が爲に熱心にして堅固なる守護なり。故
に爾に祈る、我が死後にも爾の豊なる慈憐を我に垂れ給へ。

光榮

ばんゆう ぞうせいしゅ およ しょくざいしゅ う もの わ こころ こ ふとう おこない ひ にくたい
萬有の造成主及び贖罪主を生みし者よ、吾が心を焦がして不當なる行に引く肉體の
諸慾より脱れしめ給へ。

今も

ぞくしん せいせい とくろ あらわ じよさい どうていじよ われ ぜんじん せい えいち せい しと とも
屬神なる成聖の處と顯れし女宰童貞女よ、我全人を聖にしてへ睿智なる聖使徒と偕
に我を救はんことを祈り給へ。

第一調 金曜日の晩堂課 二三七

第一調 金曜日の晩堂課 二三八

第六歌頌

イルモス、われ よげんしや なら よ じんじ もの わ いのち ほろび たす
イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ。

せかい きゆうしゅ われ こうえい なんじ き よ もの すく たま
世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。

どうていじよ はは なんじ い とき われ まも しよなん すく たま なんじ わ ち さ とき
童貞女母よ、爾が生ける時に我を護りて、諸難より救ひ給ふ。爾我が地を去る時に
も爾の慈憐を以て我を永遠の生命に移し給へ。

じれん どうていじよ なんじ やぶ かき なんじ たしか おおい なんじ なんじ ぼく けんご
慈憐なる童貞女よ、爾は壞られぬ墻なり、爾は確なる庇蔭なり、爾は爾の僕の堅固
なる轉達者なり。故に我常に爾を籲ぶ。

光榮

かみ まえ きとう いさみ え じれん しょうしんじよ われ ねっしん なんじ おおい はし つ
神の前に祈祷の勇敢を獲たる慈憐なる生神女よ、我熱心に爾の庇蔭に趨り附きて、
ばんゆう かみ はは われ あわれ たま よ もの す なか
萬有の神の母よ、我を憐み給へと、呼ぶ者を棄つる勿れ。

今も

ハリストスよ、われ しりぞ なか きゆうせいしゅ われ い なか み なんじ う どうていじよ
ハリストスよ、我を退くる勿れ、救世主よ、我を諱む勿れ。身にて爾を生みし童貞女
は爾の使徒と預言者及び受難者と偕に我が爲に爾に祈る。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

セダレン
坐誦讚詞、第一調。

至^{しじょう}淨なる童貞女^{どうていじょ}よ、諸^{しよ}預言者^{よげんしや}は爾^{なんじ}を永在なる神^{えいざい}の光^{かみ}の雲^{ひかり}と、約匱^{くも}と、燈臺^{やくひつ}と、壺^{とうだい}と、截^{つぼ}られざる山^きとして預言^{せり}せり。蓋^{やま}末^{よげん}の時に於^{けだしすえ}て爾^{とき}よりハリストス^{おい}我が神^{なんじ}は、父^わの嘉^{かみ}せし如^{ちち}く、種^{ごと}なくして出^いで給^{たま}へり。

第七歌頌

イルモス、救世主^{きゆうせいしゅ}よ、火^ひは爐^{いろり}の中に在^{うち}る爾^あの少者^{なんじ}に觸^{しょうしや}れず、彼等^ふを懼^{かれら}れしめざりき、其時^{おそ}三人口^{もの}を一^なにして、歌頌^{なんじ}祝讚^{しゆ}して言^いへり、我が先祖^{せんぞ}の神^{かみ}は崇^{あが}め讚^ほめらる。至^{しじょう}淨なる女宰^{じよさい}よ、我^{われ}諸罪^{しよざい}と肉體^{にくたい}の逸樂^{いつらく}とに耽^{ふけ}りて、淪滅^{ほろび}の深處^{ふかみ}に墜^{おと}さるる者^{もの}を、急^{いそ}ぎて爾^{なんじ}の慈憐^{じれん}を以^{もつ}て救^{すく}ひ給^{たま}へ。衆信者^{しゅうしんじや}の避所^{かくれが}と有能^{ゆうのう}の庇蔭^{おおい}と拯救^{すくい}なる生神女^{しょうしんじょ}よ、我^{われ}を造成主^{ぞうせいしゅ}に導^{みちび}く者と爲^{もの}りて、爾^{なんじ}の慈憐^{じれん}を以^{もつ}て我^{われ}に諸罪^{しよざい}の赦^{ゆるし}を與^{あた}へ給^{たま}へ。

光榮

潔^{いさぎよ}き者^{もの}よ、爾^{なんじ}は歡喜^{よろこび}なるハリストス^うを生^{のろい}みて、詛^{ほろぼ}を滅^{いた}せり。至^{いた}りて無玷^{むでん}なる者^{もの}よ、爾^{なんじ}の力^{ちから}を以^{もつ}て、罪^{つみ}に由^よりて我^{われ}に及^{およ}びたる詛^{のろい}をも釋^{われ}きて、我^{われ}に歡喜^{よろこび}を與^{あた}へ給^{たま}へ。

今も

至聖^{しせい}至潔^{しけつ}なる者^{もの}よ、我等^{われら}爾^{なんじ}の諸僕^{しよぼく}は晝^{ひる}も夜^{よる}も常^{つね}に傷^{いた}める意念^{おmoi}を以^{もつ}て爾^{なんじ}に祈^{いの}る、爾^{なんじ}の祈^{きとう}に由^よりて我等^{われら}に諸罪^{しよざい}の赦^{ゆるし}を與^{あた}へ給^{たま}へ。

第一調 金曜日の晩堂課 二三九

第一調 金曜日の晩堂課 二四〇

第八歌頌

イルモス、諸天使^{しよてんし}と悉^{ことごと}くの軍^{ぐん}とが造物者^{ぞうぶつしや}及び主^{およ}として畏^{しゅ}るる者^{おそ}を、司祭^{もの}よ、歌頌^{しさい}し、少者^{かしょう}よ、讚榮^しし、人人^{ひとびと}よ、崇^{あが}めて萬世^{ばんせい}に讚^ほめ揚げよ。聖^{せい}なる童貞女^{どうていじょ}、世界^{せかい}の扶助者^{ふじよしや}よ、起^たちて急^{いそ}ぎ、故^{ゆえ}なく我等^{われら}を擾^{みだ}し、我等^{われら}を侵^{おか}す諸敵^{しよてき}と戰^{たたか}ひて、爾^{なんじ}の力^{ちから}を顯^{あらわ}し給^{たま}へ。慈憐^{じれん}なる童貞女^{どうていじょ}よ、爾^{なんじ}は神聖^{しんせい}なる爾^{なんじ}の産^{さん}にて世界^{せかい}を死^し及び朽壞^{きゆうわい}より救^{すく}ひ給^{たま}へり。今^{いま}も爾^{なんじ}の祈^{きとう}に因^よりて、我等^{われら}爾^{なんじ}を讚美^{さんび}する者^{もの}を諸慾^{しよよく}より逃^{のが}して、救^{すく}ひ給^{たま}へ。

光榮

童貞女^{どうていじょ}よ、爾^{なんじ}の能力^{のうりよく}は大^{おおい}にして言^いひ難^{がた}し、神聖^{しんせい}なる洪恩^{こうおん}と慈憐^{じれん}とは大^{おおい}にして盡^{つく}し難^{がた}し。故^{ゆえ}に我等^{われら}實^{じつ}に爾^{なんじ}を籲^よぶ者^{もの}を救^{すく}ひ給^{たま}へ。

今も

童貞女^{どうていじょ}よ、爾^{なんじ}は活^いける葡萄樹^{ぶどうじゆ}として、我等^{われら}の爲^{ため}に熟^{じゆく}したる房^{ふさ}、赦免^{しやめん}の酒^{さけ}を流^{なが}して、罪^{つみ}の醉^{えい}を醒^さます者^{もの}を生^うみ給^{たま}へり。

第九歌頌

イルモス、光^{ひかり}を放^{はな}つ雲^{くも}、萬有^{ばんゆう}の主^{しゅ}が雨^{あめ}の天^{てん}より羊^{ひつじ}の毛^けに降^{くだ}るが如^{ごと}く降^{くだ}り、始^{はじめ}なき者^{もの}が身^みを取りて我等^{われら}の爲^{ため}に人^{ひと}と爲^なりし所以^{ゆえん}の者^{もの}を、我等^{われら}皆^{みな}我が神^{かみ}の潔^{いさぎよ}き母^{はは}として崇^{あが}め

讃む。

女宰よ、我生命の海に肉體の逸樂に甚しく荒らさるる者は爾に俯伏して呼ぶ、爾に趨り附く我を憐み、救の手を我に授けて、淪滅の深處より脱れしめ給へ。

童貞女よ、我爾の前に我が罪を承け認め、爾の顔の前に我が耻を顯して、靈より呼ぶ、至淨なる者よ、我を憐みて宥め給へ、我神と共に爾に堅き憑恃を負はせたらばなり。

光榮

我爾種なく造成主及び主宰を生みし者に靈より呼びて、熱心に祈る、至聖至仁なる生神女よ、我を多くの罪の朽壞より救ひて、滅えざる火を免れしめ給へ。

今も

過られぬ戸、樂園の門、救はるる者の途、救贖の嚮導たる潔き者よ、致命者と預言者、義者と克肖者、及び神聖なる使徒と偕に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び其他常例の如し、並に發放詞。

~~~~~

第一調 金曜日の晩堂課 二四一

第一調 「スポタ」の早課 二四二

「スポタ」の早課

第一の誦文の後に致命者の坐誦讃詞、第一調。

主よ、光榮なる受難者は爾より苦の報賞たる尊き榮冠にて飾られたり、蓋創痍を忍ぶを以て不法の者に勝ち、神聖なる能力を以て天より勝利を獲たり。救世主よ、彼等の祈禱に因りて、我等をも見えざる敵より脱れしめて、我等を救ひ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

聖なる者よ、爾等は善き軍士として、同心に信じて、苛虐者の威嚇を畏れざりき。尊き十字架を任ひ、熱心を抱きてハリストスに來り、馳すべき程を盡して、天より勝利を獲たり。光榮は爾等を堅めし者に歸す、光榮は爾等に榮冠を冠らせし者に歸す、光榮は爾等を以て衆に醫治を施す者に歸す。

句、彼等の靈は福に居らん。

救世主よ、爾に移りし者を明き處に、義人の會に安ぜしめ給へ、彼等爾に憑恃を負はせたらばなり。人を愛する主よ、我等が記憶を行ふ諸父諸子の爲に禱を納れて、彼等を義と爲し給へ、爾は慈憐深き主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

童貞女よ、ガウリイルが爾に慶べよと告げし時、其聲に従ひて萬有の主宰は爾聖なる約櫃に身を取り給へり、義なるダウイドの言ひしが如し。爾の造成主を妊みて、爾は天より廣き者と現れたり。光榮は爾に入りし者に歸し、光榮は爾より出でし者に歸し、光榮は爾の産にて我等を釋き給ひし者に歸す。

セダレン  
第二の誦文の後に坐誦讃詞、第一調。

ひと あい しゅ いの せい もの なんじ ため う きず よ われら ことごと いたみ  
人を愛する主よ、祈る聖なる者が爾の爲に受けし創痕に由りて、我等の悉くの毀傷  
と痛苦とを醫し給へ。

句、義人には憂多し、然れども主は之を悉く免れしめん。

われら みな あい いた しん もつ しか しゅ これ ことごと まぬか  
我等皆愛を抱き、信を以てハリストスの致命者に來りて、彼等に祈らん。蓋彼等は  
我が救の爲に求む、彼等は恩寵の醫治を流す、彼等は悪鬼の隊を退く、教の守護者  
なればなり。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

ハリストスよ、爾は死の權を空しくして、地上の者に不朽を流し給へり、爾を信ず  
る者は死せずして、常に爾に依りて生く。故に主よ、爾の諸僕の靈を安ぜしめて、之  
を爾の聖者と共に入れ、生神女の祈祷に因りて、之に赦免と復活とを與へ給へ。

第一調 「スポタ」の早課 二四三

第一調 「スポタ」の早課 二四四

光榮、今も、生神女讃詞。

ひとり じんるい けんご ねっしん てんたつしや しょうしんどうていじょ よげんしや ちめいしや せいせいしや  
獨人類の堅固にして熱心なる轉達者たる生神童貞女よ、預言者と致命者、成聖者と  
修齋者、及び克肖者と偕に、爾が性に超えて生みし神言に衆人を救はんことて息め  
ずして祈り給へ。

聖致命者、成聖者、克肖者、及び死者の規程、其冠詞は、神を愛せし者に神聖なる歌  
を捧ぐ。イオシフ師の作。第一調。

第一歌頌

イルモス、火柱と雲柱とを以てイズライリを導きし者は、神として海を分ち、ファ  
ラオンの兵車を淵にて覆へり。我等凱歌を謳はん、彼獨光榮を顯したればなり。

致命者の

しんせい じゆなんしや けいけん たて おお たたかい すず てき ことごと ちから ほろぼ かれら  
神聖なる受難者は敬虔の盾に蔽はれて、戦に進み、敵の悉くの力を滅して、彼等  
を堅めしハリストスに凱歌を謳へり。

成聖者の

しんせい ぼくし きみつ くさば かみ ぐん ぼく せい ことば つえ もつ おおかみ お よろこ  
神聖なる牧師は機密の草場に神の群を牧して、聖なる言の杖を以て狼を逐ひ、欣  
びて大なる牧師の在す天の牢に入り給へり。

克肖者の

ものいみ こんなん もつ かみ しき よ にくたい よく ころ こくしょうしや なんじら し のち  
修齋と困難とを以て、神の指塵に依りて、肉體の慾を殺しし克肖者よ、爾等は死して後  
に生く。我等の爲に死者たりしハリストスに我等を宥めんことを常に祈り給へ。

光榮

なんじ ししや な ししや なんじ しんせい ふっかつ ふし いのち たま しん もつ きゆうかい  
爾は死者と爲りて、死者に爾の神聖なる復活と不死の生命とを賜へり。信を以て朽壞  
の度生より移りし者を爾の國に與る者と爲し給へ、爾は獨仁慈にして、慈憐深き主  
なればなり。

生神女讃詞

ハリストスの愛に傷つけられし致命者と、神より榮冠を受けし女等と、衆克肖者と

は、爾なんじ至し潔けつにして女おんなの中に純じゆん美びなる者ものを忠ちゆう信しんに至し尊そんなる女王にようおうとして喜よろこびて尊とうとむ。

又死者カノンの規程ミネヤ、月課經クテイヤの規程なき時に序しゆを逐ちひて之ものを歌うたふ、或あるは死者カノンの祈いのち禱たま式しきに糖飯クテイヤを供たまする時とき之ものを歌うたふ。其冠詞カノンは、信しんを以もつて寢ねりし者ものの爲ために第一あたらの歌うたを捧たもぐ。

### 第一歌頌

イルモス、死しせざる主しゆよ、勝かちを獲うる爾なんじの右みぎの手ては、神かみに適かなふが如ごとく、能ちから力りきにて光榮こうえいを顯あらわせり、其全その能ぜんなるに因よりて、敵てきを滅ほろぼし、イズライリ人じんの爲ために新あらたなる深ふか水みの路みちを開ひらきたればなり。

第一調 「スポタ」の早課 二四五

第一調 「スポタ」の早課 二四六

附唱、神かみよ、爾なんじは爾なんじの聖せい所じよに於おいて嚴おごなり。

不ふ死しの主しゆよ、爾なんじは己おのれの死しを以もつて死しの門もんと柱はしらとを破やぶれり。主しゆ宰さいよ、爾なんじの受じゆ難なん者しやの祈き禱とうに因よりて、寢ねりし者ものの爲ために智ち慧えいに超こゆる不ふ死しの門もんを啓ひらき給たまへ。

附唱、主しゆよ、寢ねりし爾なんじの諸しよ僕ぼくの靈たまを安やすんぜしめ給たまへ。

我われ等らに神聖しんせいなる生いのち命めいを得えしめん爲ために、爾なんじは死しに降くだり、其牢獄そのろうごくを破やぶりて、我われ等らを彼處かしこより引ひき出いだせり。生いのち命めいを賜たまふ主しゆよ、今いま移うつされし者ものを安やすんぜしめ給たまへ。

### 光榮

爾なんじは我われの朽きゆう壞かい及および死しに屬ぞくする者ものを取とり、之これに不ふ朽きゆうを衣きせて、終おわりなき福ふくたる生いのち命めいに升のぼせ給たまへり、其その中うちに爾なんじの受うけし者ものを安やすんぜしめ給たまへ、爾なんじは洪恩こうおんの主しゆなればなり。

### 生神女讚詞

信しん者じやよ、神かみよりする神かみの言ことを生うみし者ものを歌頌かしょうせん、蓋けだし彼かれ純潔じゆんけつなる者ものは死し者しやの爲ために生いのち命めいの途みちと爲なれり。我われ等ら彼かれを神かみを受けし者もの及および生神女しんじゆとして讚さん榮えいせん。

### 第三歌頌

イルモス、第二だいにの天てんを水みずの上うへに固かため、地ちを水みずに基もとづけし全ぜん能のうのハリスかみトスねが神かみよ、願ねがはくは我われが心こころは爾なんじの旨むねに固かためられん。

聖せいにせられし大數ちめいしやの致なんじち命ち者しやよ、爾なんじ等らは多くくの苦くるを受け、多おほくの福ふくを獲えたり。故ゆえに爾なんじ等らの祈き禱とうを以もつて我われが無む數すうの悪あくを淨きよめ給たまへ。

成せい聖せい者しやは義ぎなる恩寵おんちゆうを衣き、美うらしき樂わなる克肖たのしみ者しやの會かいを集あつめて、無む形けいの役えき者しやに似にたる者ものと爲なれり。

ハリスよげんしやトスしんせいの預ちめいしや言せい者し、神聖しんせいなる致せい命し者し、聖せいにせられし女等おんなたちの會かいは勇いさましく困難こんなんを忍しのびて、修齋しゆさいを以もつて光榮こうえいを獲えたり。救世主きゆうせいしゆよ、彼等かれらの祈き禱とうに因よりて衆しゆに爾なんじの慈憐じれんを垂たれ給たまへ。

### 光榮

爾なんじの手てを以もつて己おのれの旨むねに循したがひて人ひとを土つちより造つくりしハリスしんトスあよ、信しんに在ありて我われ等らより移うつりし爾なんじの諸しよ僕ぼくに天てんの福樂ふくらを獲えしめ給たまへ。

### 生神女讚詞

婚こん姻いんに與あらざる神かみの母ははよ、衆人しゆうじんの祈願きがんを我われが造成ぞうせいしゆ主かみ神かみ、爾なんじの胎たいより生うまれし者ものに携たずへて、我われ等らに諸難しよなんより全まったく救すくはるるを得えしめ給たまへ。

又

イルモス、<sup>ひとりひと</sup> 獨人の<sup>せい</sup> 性の<sup>よわ</sup> 弱きを<sup>し</sup> 知りて、<sup>あわれみ</sup> 憐を<sup>もつ</sup> 以て<sup>これ</sup> 之を<sup>き</sup> 衣たる<sup>もの</sup> 者よ、<sup>われ</sup> 我に<sup>うえ</sup> 上<sup>ちから</sup> よりの<sup>ちから</sup> 力を<sup>お</sup> 帯びて、<sup>なんじ</sup> 爾に<sup>よ</sup> 呼ば<sup>たま</sup> しめ<sup>ひと</sup> 給へ、<sup>いつくし</sup> 人を<sup>しゅ</sup> 慈む<sup>なんじ</sup> 主よ、<sup>い</sup> 爾の<sup>こゝろ</sup> 言ひ<sup>い</sup> 難き<sup>みや</sup> 光榮<sup>せい</sup> の<sup>せい</sup> 生ける<sup>せい</sup> 宮は<sup>せい</sup> 聖なり。

獨<sup>ひとり</sup> 仁<sup>じん</sup> 慈<sup>じ</sup> なる<sup>しゅ</sup> 主、<sup>ひとり</sup> 獨<sup>じれん</sup> 慈<sup>ふか</sup> 憐<sup>しゅ</sup> 深<sup>しゅ</sup> き<sup>しゅ</sup> 主として、<sup>けいけん</sup> 敬<sup>い</sup> 虔<sup>い</sup> を<sup>いだ</sup> 抱<sup>なんじ</sup> きて<sup>しゅ</sup> 爾に<sup>ゆ</sup> 逝<sup>もの</sup> き<sup>てん</sup> し<sup>すまい</sup> 者<sup>すまい</sup> を<sup>すまい</sup> 天<sup>すまい</sup> の<sup>すまい</sup> 居<sup>すまい</sup> 處<sup>すまい</sup> に、

第一調 「スポタ」の早課 二四七

第一調 「スポタ」の早課 二四八

言<sup>い</sup> ひ<sup>がた</sup> 難<sup>よろこび</sup> き<sup>なぐさめ</sup> 歡<sup>なぐさめ</sup> 喜<sup>なぐさめ</sup> と<sup>なぐさめ</sup> 慰<sup>なぐさめ</sup> 藉<sup>なぐさめ</sup> と<sup>なぐさめ</sup> の<sup>なぐさめ</sup> ある<sup>なぐさめ</sup> 處<sup>なぐさめ</sup> に、<sup>ちめいしゃ</sup> 致<sup>ちめいしゃ</sup> 命<sup>ちめいしゃ</sup> 者<sup>ちめいしゃ</sup> の<sup>ちめいしゃ</sup> 會<sup>ちめいしゃ</sup> の<sup>ちめいしゃ</sup> 樂<sup>ちめいしゃ</sup> し<sup>ちめいしゃ</sup> む<sup>ちめいしゃ</sup> 處<sup>ちめいしゃ</sup> に<sup>ちめいしゃ</sup> 安<sup>ちめいしゃ</sup> ぜ<sup>ちめいしゃ</sup> し<sup>ちめいしゃ</sup> め<sup>ちめいしゃ</sup> 給<sup>ちめいしゃ</sup> へ。  
我<sup>わ</sup> が<sup>わ</sup> 救<sup>きゅう</sup> 世<sup>せい</sup> 主<sup>しゅ</sup> よ、<sup>なんじ</sup> 爾は<sup>ひとり</sup> 獨<sup>ち</sup> 地<sup>あ</sup> に<sup>つみ</sup> 在<sup>つみ</sup> りて<sup>つみ</sup> 罪<sup>つみ</sup> な<sup>つみ</sup> き<sup>つみ</sup> 者<sup>つみ</sup> と<sup>つみ</sup> 現<sup>つみ</sup> れ、<sup>なんじ</sup> 爾は<sup>じれん</sup> 慈<sup>しゅ</sup> 憐<sup>しゅ</sup> の<sup>しゅ</sup> 主として<sup>せかい</sup> 世界<sup>せかい</sup> の<sup>つみ</sup> 罪<sup>つみ</sup> を<sup>な</sup> 任<sup>な</sup> ひ<sup>な</sup> 給<sup>な</sup> へり。<sup>たま</sup> 人<sup>たま</sup> を<sup>たま</sup> 愛<sup>たま</sup> する<sup>たま</sup> 主<sup>たま</sup> よ、<sup>うつ</sup> 信<sup>うつ</sup> を<sup>うつ</sup> 抱<sup>うつ</sup> きて<sup>うつ</sup> 此<sup>うつ</sup> の<sup>うつ</sup> 世<sup>うつ</sup> より<sup>うつ</sup> 移<sup>うつ</sup> り<sup>うつ</sup> し<sup>うつ</sup> 者<sup>うつ</sup> の<sup>うつ</sup> 靈<sup>うつ</sup> を<sup>うつ</sup> 爾<sup>うつ</sup> の<sup>うつ</sup> 諸<sup>うつ</sup> 聖<sup>うつ</sup> 人<sup>うつ</sup> の<sup>うつ</sup> 第<sup>うつ</sup> 宅<sup>うつ</sup> に、<sup>てんどう</sup> 天<sup>てん</sup> 堂<sup>だう</sup> の<sup>ふくらく</sup> 福<sup>ふくらく</sup> 樂<sup>やすん</sup> に<sup>たま</sup> 安<sup>たま</sup> ぜ<sup>たま</sup> し<sup>たま</sup> め<sup>たま</sup> 給<sup>たま</sup> へ。

光榮

主<sup>しゅ</sup> 宰<sup>さい</sup> よ、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> は<sup>し</sup> 死<sup>けん</sup> の<sup>けん</sup> 權<sup>けん</sup> を<sup>ほろぼ</sup> 滅<sup>ほろぼ</sup> して、<sup>しゅうしんじや</sup> 衆<sup>しゅう</sup> 信<sup>しん</sup> 者<sup>じや</sup> の<sup>ため</sup> 爲<sup>ため</sup> に<sup>おわり</sup> 終<sup>い</sup> な<sup>い</sup> き<sup>なが</sup> 生<sup>たま</sup> 命<sup>たま</sup> を<sup>ひと</sup> 流<sup>あい</sup> し<sup>しゅ</sup> 給<sup>しゅ</sup> へり。<sup>しゅ</sup> 人<sup>しゅ</sup> を<sup>しゅ</sup> 愛<sup>しゅ</sup> する<sup>しゅ</sup> 主<sup>しゅ</sup> よ、<sup>けいけん</sup> 敬<sup>けい</sup> 虔<sup>けん</sup> を<sup>い</sup> 抱<sup>い</sup> きて<sup>い</sup> 逝<sup>い</sup> り<sup>い</sup> し<sup>い</sup> 者<sup>い</sup> に<sup>い</sup> 之<sup>い</sup> を<sup>い</sup> 獲<sup>い</sup> し<sup>い</sup> め、<sup>かれら</sup> 彼<sup>かれら</sup> 等<sup>むすう</sup> の<sup>あやまち</sup> 無<sup>あやまち</sup> 數<sup>かえり</sup> の<sup>かえり</sup> 愆<sup>かえり</sup> 尤<sup>かえり</sup> を<sup>かえり</sup> 顧<sup>かえり</sup> み<sup>かえり</sup> ず<sup>かえり</sup> して、<sup>その</sup> 其<sup>その</sup> 諸<sup>しよ</sup> 罪<sup>しよ</sup> を<sup>しよ</sup> 赦<sup>しよ</sup> し<sup>しよ</sup> 給<sup>しよ</sup> へ。

生神女讚詞

潔<sup>い</sup> き<sup>き</sup> 者<sup>き</sup> よ、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> は<sup>たね</sup> 種<sup>たね</sup> なく<sup>ほら</sup> 孕<sup>ほら</sup> み<sup>えいざい</sup> て<sup>ことば</sup> 永<sup>う</sup> 在<sup>たま</sup> の<sup>たま</sup> 言<sup>たま</sup> を<sup>たま</sup> 生<sup>たま</sup> み<sup>たま</sup> 給<sup>たま</sup> へり。<sup>かれ</sup> 彼<sup>かれ</sup> は<sup>にくたい</sup> 肉<sup>にくたい</sup> 體<sup>もつ</sup> を<sup>われら</sup> 以<sup>きた</sup> て<sup>きた</sup> 我<sup>きた</sup> 等<sup>きた</sup> に<sup>きた</sup> 來<sup>きた</sup> り<sup>きた</sup> て、<sup>し</sup> 死<sup>し</sup> の<sup>し</sup> 力<sup>ちから</sup> を<sup>ほろぼ</sup> 滅<sup>ほろぼ</sup> し、<sup>その</sup> 其<sup>その</sup> 慈<sup>じれん</sup> 憐<sup>よ</sup> に<sup>よ</sup> 因<sup>し</sup> り<sup>し</sup> て<sup>し</sup> 死<sup>し</sup> せ<sup>し</sup> し<sup>し</sup> 者<sup>し</sup> に<sup>し</sup> 復<sup>し</sup> 活<sup>し</sup> と<sup>し</sup> 永<sup>し</sup> 遠<sup>し</sup> の<sup>し</sup> 生<sup>し</sup> 命<sup>し</sup> と<sup>し</sup> を<sup>し</sup> 賜<sup>し</sup> ふ。

第四歌頌

イルモス、<sup>よげんしや</sup> 預<sup>よげん</sup> 言<sup>い</sup> 者<sup>い</sup> 言<sup>い</sup> へり、<sup>しゅ</sup> 主<sup>しゅ</sup> よ、<sup>われ</sup> 我<sup>われ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> の<sup>おとづれ</sup> 風<sup>おとづれ</sup> 聲<sup>き</sup> を<sup>おそ</sup> 聞<sup>なんじ</sup> きて<sup>わざ</sup> 懼<sup>きと</sup> れ、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> の<sup>なんじ</sup> 作<sup>なんじ</sup> 爲<sup>なんじ</sup> を<sup>なんじ</sup> 悟<sup>なんじ</sup> りて、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> の<sup>なんじ</sup> 力<sup>なんじ</sup> を<sup>なんじ</sup> 讚<sup>なんじ</sup> 榮<sup>なんじ</sup> せり。

致<sup>ちめい</sup> 命<sup>しゅ</sup> 者<sup>しゅ</sup> は<sup>ゆうかん</sup> 勇<sup>ゆう</sup> 敢<sup>かん</sup> の<sup>こころ</sup> 心<sup>こころ</sup> を<sup>もつ</sup> 以<sup>しゅじゅ</sup> て<sup>くるしみ</sup> 種<sup>し</sup> 種<sup>し</sup> の<sup>し</sup> 苦<sup>し</sup> を<sup>し</sup> 忍<sup>し</sup> び<sup>し</sup> て、<sup>むてん</sup> 無<sup>む</sup> 玷<sup>てん</sup> なる<sup>むつじ</sup> 羊<sup>ひつじ</sup> の<sup>こ</sup> 子<sup>ごと</sup> の<sup>しゅうじん</sup> 如<sup>ため</sup> く、<sup>ほふ</sup> 衆<sup>ほふ</sup> 人<sup>ほふ</sup> の<sup>ほふ</sup> 爲<sup>ほふ</sup> に<sup>ほふ</sup> 屠<sup>ほふ</sup> ら<sup>ほふ</sup> れ<sup>ほふ</sup> し<sup>ほふ</sup> 生<sup>ほふ</sup> 命<sup>ほふ</sup> たる<sup>ほふ</sup> ハリストス に<sup>ほふ</sup> 薦<sup>ほふ</sup> め<sup>ほふ</sup> ら<sup>ほふ</sup> れ<sup>ほふ</sup> たり。

神<sup>かみ</sup> の<sup>ことば</sup> 言<sup>おし</sup> に<sup>せいせいしや</sup> 教<sup>せい</sup> へ<sup>しんせい</sup> ら<sup>くち</sup> る<sup>な</sup> 成<sup>な</sup> 聖<sup>な</sup> 者<sup>な</sup> は<sup>な</sup> 神<sup>な</sup> 聖<sup>な</sup> なる<sup>な</sup> 口<sup>な</sup> と<sup>な</sup> 爲<sup>な</sup> りて、<sup>ひとびと</sup> 人<sup>ひと</sup> 人<sup>ひと</sup> の<sup>たましい</sup> 靈<sup>たましい</sup> を<sup>きょうあくしや</sup> 凶<sup>くち</sup> 惡<sup>の</sup> 者<sup>の</sup> の<sup>の</sup> 口<sup>の</sup> より<sup>の</sup> 逃<sup>の</sup> し<sup>の</sup> 給<sup>の</sup> へり。<sup>われら</sup> 我<sup>われら</sup> 等<sup>けいけん</sup> 敬<sup>か</sup> 虔<sup>か</sup> に<sup>か</sup> して<sup>か</sup> 彼<sup>か</sup> 等<sup>か</sup> を<sup>か</sup> 尊<sup>か</sup> む。

克<sup>こく</sup> 肖<sup>しやう</sup> なる<sup>せい</sup> 聖<sup>しん</sup> 神<sup>しん</sup> 父<sup>ふ</sup> 等<sup>ふ</sup> は<sup>しんせい</sup> 神<sup>しん</sup> 聖<sup>せい</sup> なる<sup>しん</sup> 神<sup>しん</sup> に<sup>よ</sup> 依<sup>ちから</sup> り<sup>え</sup> て<sup>おんちやう</sup> 力<sup>もつ</sup> を<sup>おおい</sup> 獲<sup>きげつ</sup> て、<sup>しよしん</sup> 恩<sup>しよ</sup> 寵<sup>しん</sup> を<sup>しよしん</sup> 以<sup>しよしん</sup> て<sup>しよしん</sup> 大<sup>しよしん</sup> に<sup>しよしん</sup> 詭<sup>しよしん</sup> 譎<sup>しよしん</sup> なる<sup>しよしん</sup> 諸<sup>しよしん</sup> 神<sup>しよしん</sup> に<sup>しよしん</sup> 勝<sup>しよしん</sup> て<sup>しよしん</sup> り。

光榮

甘<sup>あま</sup> じ<sup>き</sup> て<sup>うえ</sup> 木<sup>ころ</sup> の<sup>われら</sup> 上<sup>いのち</sup> に<sup>え</sup> 殺<sup>たま</sup> され<sup>たま</sup> し<sup>たま</sup> 我<sup>われら</sup> 等<sup>われら</sup> の<sup>いのち</sup> 生<sup>われら</sup> 命<sup>われら</sup> たる<sup>われら</sup> 仁<sup>われら</sup> 愛<sup>われら</sup> なる<sup>われら</sup> 主<sup>われら</sup> よ、<sup>しん</sup> 信<sup>しん</sup> を<sup>い</sup> 抱<sup>い</sup> きて<sup>うつ</sup> 移<sup>うつ</sup> り<sup>うつ</sup> し<sup>うつ</sup> 者<sup>うつ</sup> に<sup>うつ</sup> 永<sup>うつ</sup> 遠<sup>うつ</sup> の<sup>うつ</sup> 生<sup>うつ</sup> 命<sup>うつ</sup> を<sup>うつ</sup> 獲<sup>うつ</sup> し<sup>うつ</sup> め<sup>うつ</sup> 給<sup>うつ</sup> へ。

生神女讚詞

至<sup>しじやう</sup> 淨<sup>しじやう</sup> なる<sup>しじやう</sup> 者<sup>しじやう</sup> よ、<sup>おんな</sup> 女<sup>おんな</sup> の<sup>か</sup> 會<sup>か</sup> は<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> を<sup>なんじ</sup> 扶<sup>なんじ</sup> 助<sup>なんじ</sup> 者<sup>なんじ</sup> と<sup>なんじ</sup> 有<sup>なんじ</sup> ち<sup>なんじ</sup> て、<sup>い</sup> 勇<sup>い</sup> ま<sup>い</sup> し<sup>い</sup> く<sup>い</sup> 苦<sup>い</sup> 難<sup>い</sup> を<sup>い</sup> 忍<sup>い</sup> び<sup>い</sup> て、<sup>しゅ</sup> 主<sup>しゅ</sup> を<sup>す</sup> 棄<sup>す</sup> て<sup>す</sup> ざ<sup>す</sup> り<sup>す</sup> き、<sup>せい</sup> 聖<sup>せい</sup> なる<sup>せい</sup> 者<sup>せい</sup> は<sup>せい</sup> 肉<sup>せい</sup> 體<sup>せい</sup> の<sup>せい</sup> 逸<sup>せい</sup> 樂<sup>せい</sup> に<sup>せい</sup> 勝<sup>せい</sup> た<sup>せい</sup> れ<sup>せい</sup> ざ<sup>せい</sup> り<sup>せい</sup> き。

又

イルモス、<sup>せんち</sup> アウワクム は<sup>め</sup> 先<sup>なんじ</sup> 知<sup>かみ</sup> の<sup>おんちやう</sup> 目<sup>おお</sup> に<sup>やま</sup> て<sup>み</sup> 爾<sup>やま</sup> 、<sup>み</sup> 神<sup>み</sup> の<sup>み</sup> 恩<sup>み</sup> 寵<sup>み</sup> に<sup>み</sup> 覆<sup>み</sup> は<sup>み</sup> る<sup>み</sup> る<sup>み</sup> 山<sup>み</sup> を<sup>み</sup> 見<sup>み</sup> て、<sup>い</sup> イズライ リ の<sup>い</sup> 聖<sup>い</sup> なる<sup>い</sup> 者<sup>い</sup> が<sup>い</sup> 我<sup>い</sup> 等<sup>い</sup> を<sup>い</sup> 救<sup>い</sup> ひ<sup>い</sup> 改<sup>い</sup> め<sup>い</sup> ん<sup>い</sup> 爲<sup>い</sup> に、<sup>い</sup> 爾<sup>い</sup> より<sup>い</sup> 出<sup>い</sup> づ<sup>い</sup> る<sup>い</sup> を<sup>い</sup> 預<sup>い</sup> 言<sup>い</sup> せり。

ハリストス よ、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> は<sup>ししや</sup> 死<sup>ししや</sup> 者<sup>ししや</sup> の<sup>ししや</sup> 中<sup>ししや</sup> に<sup>ししや</sup> 入<sup>ししや</sup> りて、<sup>なんじ</sup> 爾<sup>なんじ</sup> の<sup>なんじ</sup> 勝<sup>なんじ</sup> た<sup>なんじ</sup> れ<sup>なんじ</sup> ぬ<sup>なんじ</sup> 力<sup>なんじ</sup> を<sup>なんじ</sup> 以<sup>なんじ</sup> て<sup>なんじ</sup> 地<sup>なんじ</sup> 獄<sup>なんじ</sup> を<sup>なんじ</sup> 殺<sup>なんじ</sup> せり。<sup>ひとり</sup> 獨<sup>ひとり</sup> 自<sup>ひとり</sup> 由<sup>ひとり</sup> の<sup>ひとり</sup> 主<sup>ひとり</sup> として、<sup>しゅ</sup> 聖<sup>しゅ</sup> なる<sup>せい</sup> 致<sup>せい</sup> 命<sup>せい</sup> 者<sup>せい</sup> の<sup>せい</sup> 祈<sup>せい</sup> 禱<sup>せい</sup> に<sup>せい</sup> 由<sup>せい</sup> りて、<sup>けいしん</sup> 敬<sup>けい</sup> 信<sup>しん</sup> の<sup>ひと</sup> 人<sup>ひと</sup> の<sup>たましい</sup> 靈<sup>たましい</sup> を<sup>じごく</sup> 地<sup>じごく</sup> 獄<sup>じごく</sup> の<sup>せい</sup> 定<sup>せい</sup> 罪<sup>せい</sup> より<sup>せい</sup> 釋<sup>せい</sup> き<sup>せい</sup> 給<sup>せい</sup> へ。

爾は萬有の主宰として、己の屠らるるを以てアダムの子孫の諸罪に適ふ贖を

第一調 「スポタ」の早課 二四九

第一調 「スポタ」の早課 二五〇

爲し給へり。故に我等爾の洪恩に祈る、移されし者に諸罪の赦を與へて、彼等を安ぜしめ給へ。**光榮**

我が救世主よ、爾は墓に藏められて、墓に住まはん爲に定められし死者を神として復活せしめ給へり。今は移されし者に永在の生命を獲しめ給へ、爾獨人を愛する主なればなり。**生神女讃詞**

至りて無玷なる女宰、神の母よ、人類は爾の産に由りて救はれたり、蓋爾は我等の爲に實在の生命を生み給へり。彼は死を滅して、死せし者を生命に上せ給ふ。

第五歌頌

**イルモス**、人を愛する主宰ハリストス我が神よ、朝に爾が誠の定の事を考ふる我等を永遠の明なる光にて照し給へ。

致命者よ、爾等は敬虔を鎧と爲して、敵の箭に傷つけられぬ者と顯れ、恩寵に由りて勝利者と爲りて、榮冠を受け給へり。

主は神聖なる香膏を其成聖者に抹りたるに、彼等は敬虔を以て信者の大數を牧して、天の牢に導き給へり。

聖なる神品致命者及び悉くの克肖者よ、爾等は屬神の法を守りて、天國に與る者と爲りて、宜しきに合ひて讚榮せらる。

光榮

主宰主よ、今爾の命を以て移しし者を諸聖人と共に爾の國に入るに勝ふる者と爲して、彼等が行ひし諸罪を念ふ母れ。

生神女讃詞

至淨なる者よ、修齋と困難とを以て天の光榮を得たる女等は、爾を轉達者と有ちて、蛇の權を破れり。

又

**イルモス**、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリストスよ、爾が智慧の光にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。

生命を賜ふ主よ、爾は死の毒より醫す者にして、死を受けて死の刺を鈍くし給へり。致命者の祈禱に因りて、爾が受けし者を自ら安ぜしめ給へ。

人人を死及び朽壞より解き給ひし主よ、信に在りて移されし者の靈を爾の聖者の第宅に、凡の憂の退きし處、樂の在る處に入れ給へ。

光榮

主宰よ、爾は己と偕に十字架に懸けられし者の爲に樂園を開きし如く、今信に在

第一調 「スポタ」の早課 二五一

第一調 「スポタ」の早課 二五二

りて爾に移りし者の靈を受けて、彼等に冢子の教會に居らんことを獲しめ給へ。

### 生神女讃詞

憑恃を爾に負はしむる者を救ひ給ふ讚美たる純潔なる者よ、爾の子に於ける母たる勇敢を以て、我等を神の旨の穩なる港に導き給へ。

### 第六歌頌

イルモス、我預言者イオナに效ひて籲ぶ、仁慈なる者よ、我が生命を淪滅より援けよ。世界の救主よ、我光榮は爾に歸すと籲ぶ者を救ひ給へ。

聖なる致命者よ、爾等は多くの創痕にて殺されて、眞實の生命を嗣ぎたり。我等衆の救はれんことを祈り給へ。

ハリストスの至榮なる軍士及び睿智なる成聖者よ、爾等は地に在りて輝ける星と識られて、敬虔の光を以て信者を照し給へり。

捧神なる修齋者よ、爾等は節制と謙遜とを以て肉の念を殺して、地上の旅客及び天の住民と顯れ給へり。

### 光榮

人を愛する主よ、爾が移しし信者を爾の暮れざる光と眞實の樂とに與る者と爲して、彼等を諸聖者の會に加へ給へ。

### 生神女讃詞

讚美たる神の母よ、勇ましく苦難を忍び、篤く齋せし者は、聖詠に言へる如く、爾に従ひて萬有の王たるハリストスに進められたり。

### 又

イルモス、今を限の淵は我等を圍めり、脱れしむる者なし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。

慈憐なる主よ、移されし者に諸罪の赦を賜ひて、彼等に爾が顔の光の輝きて、爾の受難者を照す所に永遠の樂を與へ給へ。

爾の脅より流れし血を以て世界を贖ひしハリストスよ、信に在りて寝りし者を爾の尊き苦にて救ひ給へ、爾は衆人の爲に己を價として付し給ひしに因る。

至淨なる手を以て始めて我を造りて、靈を與へ、惡に陥りし者を復至りて美しく新にせし主よ、親ら今移りし者の靈を安ぜしめ給へ。

### 光榮

主よ、爾に於ける信に在りて寝りし者に爾の至りて光明なる宮に入るを得しめ、仁慈慈憐洪恩なる主として、彼等の諸罪を念ふ母れ。

### 生神女讃詞

第一調 「スポタ」の早課 二五三

第一調 「スポタ」の早課 二五四

讚美たる潔き者よ、我等爾を歌ふ、蓋爾に因りて我等幽暗と死の蔭とに在る者に入らざる義の日は輝けり。爾は我等の救の轉達者と爲り給へり。

### 第七歌頌

イルモス、救世主よ、火は爐の中に在る爾の少者に觸れず、彼等を懼れしめざりき、其時三人口を一にして、歌頌祝讚して言へり、我が先祖の神は崇め讃めらる。金が火に試みらるる如く、致命者は悉くの苦に試みられて、神聖なる愛に於て純金よりも更に明に光る者と顯れて、天の寶藏に納められたり。祭を司る者と爲り、神聖なる役者と爲りし聖なる成聖者は、皆神に無血の祭を捧げ、善く人人を牧して、大なる牧者の在す所に入り給へり。克肖者は肉體の慾に服せず、無慾を奥密の衣の如く衣て、諸天使の同住者と爲れり。ハリストスよ、彼等の祈祷に由りて我等を諸の誘惑より救ひ給へ。

### 光榮

恩主なるハリストスよ、信に在りて我等より移りし者を奥密の樂の處、爾が顔の光の輝く處に住まはせて、敬虔に爾の仁慈を讚榮せしめ給へ。

### 生神女讚詞

至聖至潔なる者よ、聖なる女等は爾を己の莊飾と爲して、諸天使と共に欣ばしく祝ひ、多くの慈憐に由りて身にて爾より生れし神言を讚榮す。

### 又

イルモス、生神女よ、我等信者は爾を見て屬神の爐と爲す、蓋先祖の尊まれて崇め讃めらるる神は、三人の少者を救ひし如く、斯く爾の腹に於て全世界を改め給へり。ハリストスよ、世の暴風より爾に移りし者を爾の至淨なる光榮の光を以て照して、彼等に致命者と偕に爾に呼ぶを得しめ給へ、先祖の尊まるる神よ、爾は崇め讃めらる。

アダムの造成主よ、爾は實に新なるアダムと爲りて、獨アダムの詛を滅し給へり。故に我等爾に祈る、ハリストスよ、移されし者を天堂の福樂に安ぜしめ給へ、爾獨慈憐の主なればなり。

### 光榮

神として獨我等の性の弱きを知るハリストス、先祖の崇め讃めらるる神よ、仁慈慈憐の主なるに因りて、移しし者を悉く爾が顔の入らざる光の輝く處に住はせ給へ。

### 生神女讚詞

第一調 「スボタ」の早課 二五五

第一調 「スボタ」の早課 二五六

潔き神の母よ、律法の影と古の預象とは爾の産に由りて過ぎたり、蓋爾は我等の爲に神聖なる恩寵の光を輝かせり。之に由りて我等古の債を解かれて、尊まるる神を崇め讃む。

### 第八歌頌

イルモス、諸天使と悉くの軍とが造物者及び主として畏るる者を、司祭よ、歌頌し、少者よ、讚榮し、人人よ、崇めて萬世に讚め揚げよ。

致命者は皆靈妙に神聖なる神の火に涼しくせられて、獅の開きたる口を害なく過ぎ、沸れる鑊を勇ましく過り給へり。

ハリストス神よ、爾は己の預言者に遠き事を預知するを賜ひて、爾の成聖者をも神妙なる睿智者と爲し給へり。彼等の祈祷に由りて熱切に爾を歌ふ者の心を照し給へ。克肖なる修齋者は世の爲に己を釘して、古世より聖を以て義を以て神の悦を爲しし悉くの者と偕に天上の生命を嗣ぎ給へり。

### 光榮

神に合ふが如く人を土より造りし主よ、地より移しし信者に、爾が仁慈なるに因りて、天堂の福樂を獲しめて、彼等が行ひし諸罪を念ふ母れ。

### 生神女讚詞

潔き童貞女よ、困難を忍びし女等は爾を女の中に純美にして無玷なる者と尊みて、爾の諸僕が諸難より救はれん爲に爾と偕に神に祈を奉る。

### 又

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以て黄金よりも明に輝きて云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

爾の寝りし諸僕の汚を悉く爾の仁愛の露を以て洗ひて、彼等に歌を以て爾を歌はしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

救世主よ、爾が移し給ひし信者を、受難者の祈祷に由りて、信を以て義と爲して、右に立つ者と顯して、歌はしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

### 光榮

死と生との一切の權を有ち給ふ主よ、信に在りて寝りし者て爾の光照を蒙る者と爲して、歌はしめ給へ、主の悉くの造物は主を崇め讃め、彼を歌ひて世々に讃め揚げよ。

### 生神女讚詞

第一調 「スポタ」の早課 二五七

第一調 「スポタ」の早課 二五八

至淨至潔なる童貞女よ、爾は我等の救と、終なき生命と、光照との轉達者と爲り給へり。故に我等悉くの造物は常に爾を崇めて、萬世に讃め揚ぐ。

次ぎて生神女の歌、「我が靈は主を崇め」、及び他の句、其附唱と共に。

### 第九歌頌

イルモス、生命を容れし常に流るる泉、恩寵の光を施す燈、活ける殿、無玷なる幕、天地より廣き者たる生神女を我等信者は崇め讃む。

聖にせられし致命者の聖なる戦、其苦と傷、釘刑と放逐、及び福たる屠殺を、我等喜びて尊まん、此等を以て聖なる者はハリストスの嗣と爲り給へり。

神聖なる役者は神の司祭等として義を衣、聖に於て世を度り、齋の中に生を終へて、ハリストスを崇め讃めて悦ぶ。

諸預言者は主の神聖なる口と爲りて、衆人に其光を傳へたり。彼等と偕に今勲を立て、齋を以て神の悦を獲たる女等も楽しむ。

光榮

萬物の上に王たる能力よ、地より移しし者を爾の諸聖者と偕に爾の國に與る者と顯し、其行ひし諸罪を、萬有の神よ、爾の至大なる仁慈に因りて念ふ母れ。

生神女讚詞

神聖なる光、時に限られぬ者を生みし童貞女よ、爾の祈禱に因りて私の時毎の諸罪を解き、常に怠惰に暗まされたる我が智慧を照し給へ、我が歌ひて忠信に爾を讃め揚げん爲なり。

又

イルモス、生神女よ、燃ゆれども焼かれぬ棘は爾が潔き産の象を顯せり。祈る、今も我等を攻め圍む誘惑の爐を撲ち滅して、常に爾を崇めさせ給へ。慈憐深き主よ、仁愛仁慈なる神として、爾の造物を宥め、信に在りて暫時の生命より移されし者を爾の諸聖者の居處に、衆致命者の楽しむ處に安ぜしめ給へ。人を愛する主、爾の諸僕の罪過に大に勝つ慈憐の淵を有つ者よ、選びし者を受けて、之をアウラアムの懷に安ぜしめ、ラザリと偕に爾の光の中に住はせ給へ。

光榮

人類の爲に贖罪主及び救主と爲りし者よ、今我等より移しし者を、恩主として、十字架に因りて、神聖なる歡喜と、不朽の生命と、光明なる樂とを受くるに勝ふる者と爲し給へ。

生神女讚詞

嗚呼智慧に超ゆる爾の奇蹟や、蓋爾獨、至淨なる童貞女よ、日の下に在る衆人

第一調 「スポタ」の早課 二五九

第一調 「スポタ」の早課 二六〇

に爾の悟り難き産の新なる奇蹟を顯し給へり。故に我等皆爾を崇め讃む。

次ぎて「常に福にして」、及び小聯禱、光耀歌、常例の聖詠。

「凡そ呼吸ある者」に致命者の讚頌、第一調。

人人皆來りて、歌頌と屬神の詩賦とを以てハリストスの受難者を尊まん。彼等は世界の燈、教の傳道師、信者の爲に醫治を注ぐ所の常に流るる泉なり。ハリストス我が神よ、彼等の祈禱に由りて爾の世界に平安、我等の靈に大なる憐を與へ給へ。大なる王の此の軍士等は苛虐者の命に逆ひ、勇毅にして苦を輕じ、一切の迷を踐みて、宜しきに合ひて榮冠を冠れり。今救世主に我等の靈の爲に平安と大なる憐とを求む。

至りて讚美たる致命者よ、憂患も、困苦も、飢渴も、窘逐も、創痕も、猛獸の猛きも、刀劍も、烈しき火も爾等を神より離すこと能はざりき。爾等は更に彼を愛する愛を燃して、他人の身に在るが如く闘ひて、性を忘れ、死を顧みざりき。故に宜しきに合ひて爾等の功勞の報を受け、天國の嗣と爲れり。我が靈の爲にハリストスに祈り給へ。

致命者よ、主の爲に樂しめ、蓋爾等は善き戰を戦へり。諸王に逆ひ、苛虐者に勝

ち、火をも、劍をも、爾等の體を食ふ猛獸をも恐れざりき。諸天使と偕にハリストスに歌を捧げて、天より榮冠を受けたり。世界に平安、我等の靈に大なる憐を賜はんことを祈り給へ。

死者の讚頌

我が救世主よ、爾が衆人の復活なることを、爾は行を以て著す。言よ、爾は言を以てラザリを死者の中より起し給へり。死者が墓より復活し、地獄の門が破られし時、其時死は人人の爲に寝と現れたり。己の造りし物を定罪せん爲にあらざして、之を救はん爲に來りし主よ、選びし者を安ぜしめ給へ、爾人を愛する主なればなり。

光榮、今も、生神女讚詞。

聖なる生神童貞女、全世界の潔き器、滅えざる燈、容れ難き者の包容所、毀たれぬ殿よ、慶べ、世の罪を任ひし神の羔を生みし者よ、慶べ。

挿句に死者の讚頌、フェオファン師の作。第一調。

救世主よ、我等爾に祈る、移りし者を爾の欣ばしき共與に任へさせて、彼等を爾の聖者と偕に義人等の居處に、天の第宅に入れ給へ。爾の慈憐に由りて其諸罪を念はずして、之に安息を與へ給へ。

第一調 「スボタ」の早課 二六一

第一調 「スボタ」の早課 二六二

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

救世主よ、爾の許約せし所は見ゆる者に超えて、目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ曾て入らざる者なり。主宰よ、我等爾に祈る、爾に移りし者を爾の欣ばしき共與を受くるに任へさせて、之に永遠の生命を與へ給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

人を愛する主よ、爾の諸僕は爾の十字架の爲に楽しみ、爾の十字架を頼みて爾に移れり。今彼等に爾の十字架に由り、世界の生命の爲に流しし血に由りて、罪過の釋かるるを賜ひ、爾の慈憐を以て其諸罪を赦して、爾の顔の光にて照し給へ。

句、彼等の記憶は世世に在らん。

獨不死なる者よ、人人の中に一も罪なき者なし、唯爾は罪なし。故に洪恩なる神として、爾の諸僕を天使の品位と共に光の中に入れ給へ。爾の慈憐に由りて、不法を顧みずして、彼等に赦を與へ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

母・童貞女よ爾の産たるハリストスに祈りて、爾の諸僕、爾を實に生神女なりと傳へて、敬虔の言を以て祝讚せし者に諸罪の赦を賜ひて、其國に於て聖者の光照と福樂とを獲しめんことを求め給へ。



「スポタ」の眞福詞、第一調。

てき しょくもつ もつ らくえん ひ いた じゅうじか もつ とうぞく そのうち  
敵は食物を以てアダムを樂園より引き出し、ハリストスは十字架を以て盜賊を其中  
い たま じゆ なんじ くに きた とし われ おも たま よ  
に入れ給へり、主よ、爾の國に來らん時我を憶ひ給へと呼べばなり。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

いす せい じゆなんしゃ せいせいしゃ えいち おんな およ せいせいしゃ おお なんじ  
イイスス神よ、受難者、成聖者、睿智なる婦女、及び至榮なる預言者の無数の多きは爾  
いの われら しまざい ゆるし おおい あわれみ あた たま  
に祈る。我等に諸罪の赦と大なる憐とを與へ給へ。

句、人我の爲に爾等を詈り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時  
は、爾等福なり。

は しみ つく いた せい じゆなんしゃ せい せいせいしゃ およ  
馳すべき程を盡ししハリストスの至りて聖にせられし受難者は、聖なる成聖者及び  
よげんしゃ とも てん まち すま しょうんし とも たの た もの な たま  
預言者と偕に、天の城邑に住ひて、諸天使と偕に楽しむに勝ふる者と爲り給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

ハリストスよ、移しし者を暮れざる光に入れて、洪恩なる神として彼等の諸罪を念  
なか われら なんじ おんしゆ むすう じれん さんえい ため  
ふ母れ、我等が爾恩主の無数の慈憐を讚榮せん爲なり。

第一調 「スポタ」の眞福詞 二六三

第一調 「スポタ」の眞福詞 二六四

光榮

われら しゅうしんじゃ ちち ふくはい こ さんえい しせいしん かしょう いったい さんしゃ ゆいいち かみ  
我等衆信者は父に伏拜し、子を讚榮し、至聖神を歌頌せん。一體の三者、惟一なる神  
よ、我等爾を籲ぶ者を憶ひ給へ。 **今も**

いさぎよ もの われら なんじ ひろ みや こうえい ほうざ ひか くも ほ うた いの なんじ しんせい  
潔き者よ、我等爾を廣き宮、光榮の寶座、光る雲と讚め歌ひて祈る、爾の神聖な  
きとう もつ わ たましい くら くも はら たま  
る祈禱を以て、我が靈より暗き雲を拂ひ給へ。